



0053093000

0053093-000

379.2-Ku859s

青年教育の革新

栗原美能留・著

育生社

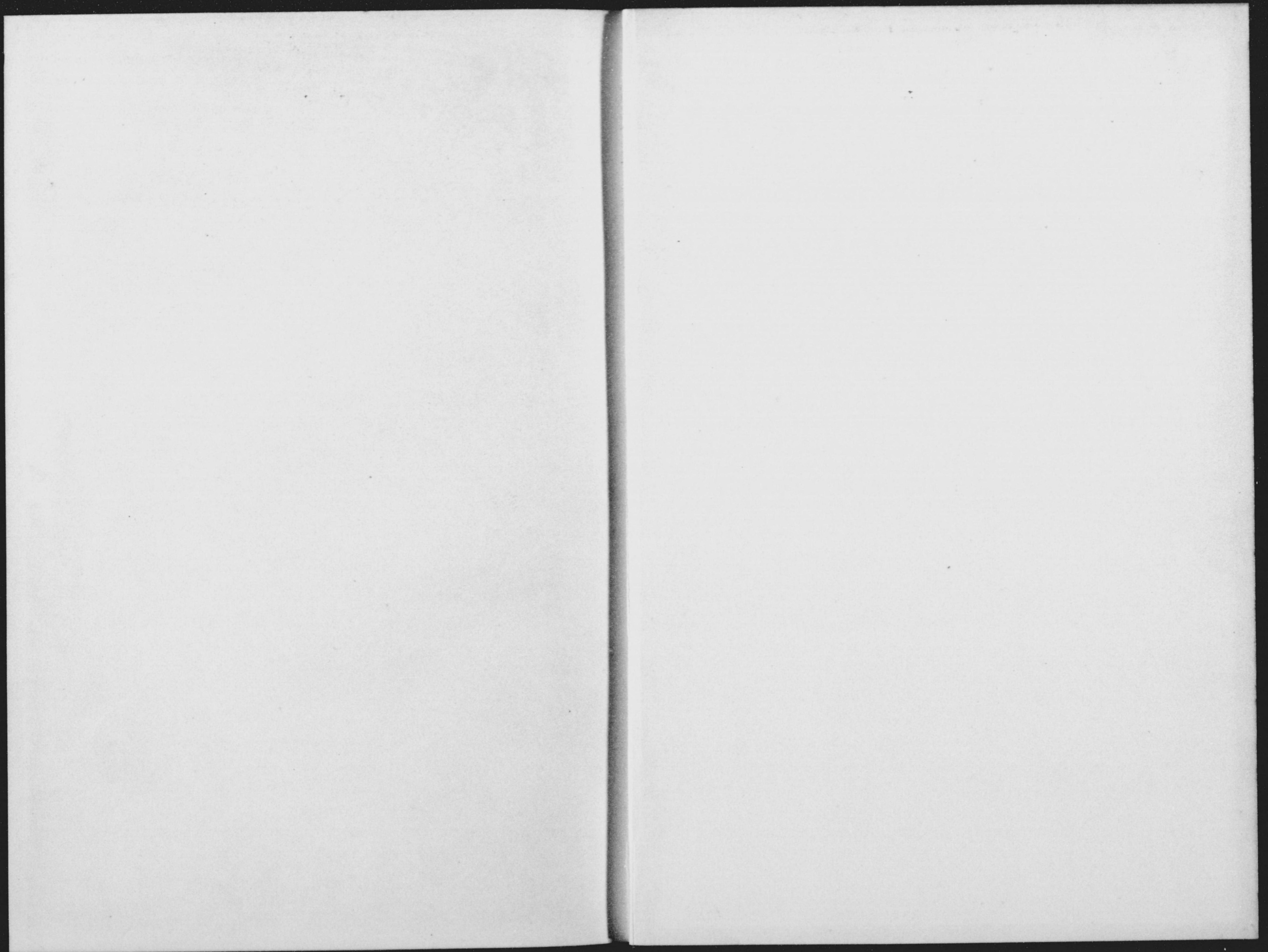
1938

AHP

育生社

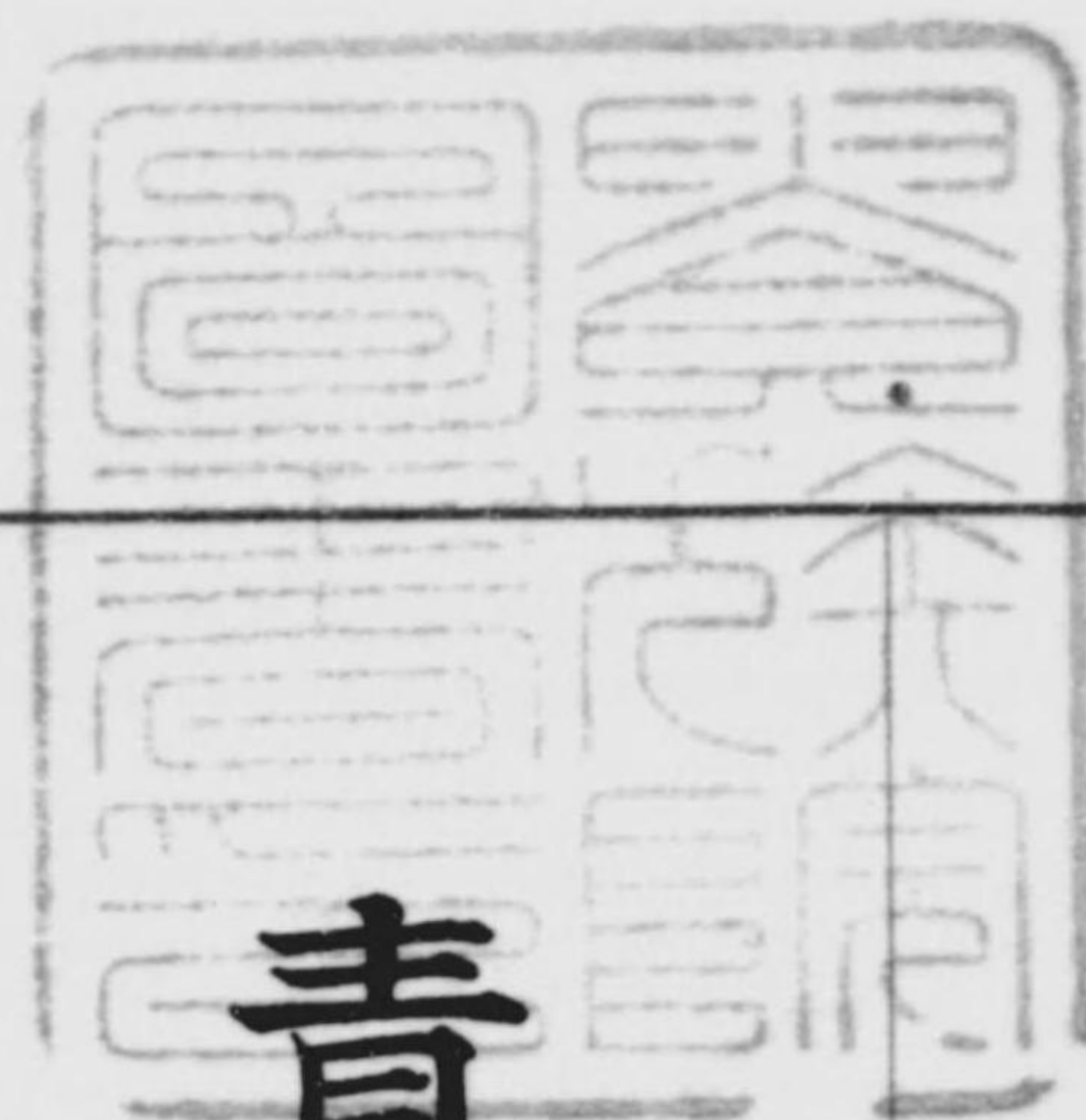
青年教育の革新

3
K



新教育の進歩

新教育社



大日本聯合
青年團理事

栗原美能留著

青年教育の革新

東京
育生社刊

379.2

Ku 859A.



705936

自序

題して「青年教育の革新」と謂ふ。書き了りて再讀すると、忸怩たらざるを得ない。もと／＼教育といふことには全然素人たりし私である。實を云へば斯る大それた役目を書肆の要請に應じて引受けたのが、私の不明の致す處であつた。けれ共一旦の約束は守らざるを得ない。而も如何に今の私が慣れない仕事に轉じて間誤付いてゐるとは謂へ、約束の時を經過すること實に月餘に及んでは、盲蛇に怯ぢずの譏を免れることを得ないでも、思ひ切つて版に付するの外はない。

此の小著に於いては、全くの處が、私が此の春今の立場に移つて以來僅々半歳にも満たない短く淺い經驗を基礎として、私の夢といふか、あこがれと云ふか、當面の紛亂したる時局を打開する爲に我が覺悟すべきこと、従つて我々以後に至る青年諸君にも要望してをかねばならぬと思はれることを共に拙き筆もて誌したるに過ぎない。であるから、教育革新の方策論としては殆んど見るべきものがないことは豫め讀者諸子の御諒解を請うて置かねばならないのである。

唯然し、前述の我々の後繼者への要請の限りに於いては、私の眞情をば、色々な角度から兎も角も一應は卒直に述べた心算である。他に要請する以上、固より私も本書に誌した方向、指導精神に基い

て今後の實踐を敢行するの覺悟である。されば讀者若し是正を要すると認めらるゝ點あらば切に忌憚なき叱正を惠まれ度い。依て以て今後の私の使命遂行をより正しくすることが出来るならば之實に望外の幸である。甚だ虫のよい考であるが、去冬青年教育刷新の重大性を説かれて私の奮發を求められた先輩の熱誠に動かされて、今の職に移つた私のさゝやかな御奉公の誠意に免じて此の望みを許して戴き度いのである。

尙此の書の執筆中、青年團に於ける私の仕事は相當多忙であつたので、僅かな暇をぬすんでは私の部下であり同志でもある大日本聯合青年團調査部の經濟學士志村義雄君に私の考へを話し、夫れを基調として同君に執筆して貰つた處が極めて多い。されば本書は私と同君との共著とも稱すべきであることを誌して、同君の勞に對し、感謝して置き度いと思ふ。

昭和十三年五月二十五日

日獨交歡青少年團を送りたる日

栗原美能留

目次

自序

總論

第一章 序説

我々の課題——青年問題の重要性——人か社會か——歴史の必然性と進歩の自覺——現代青年の通弊
 現實傍觀・現實追隨——現實打破の氣魄——マルクス主義批判——革新の原理——青年努力の目標

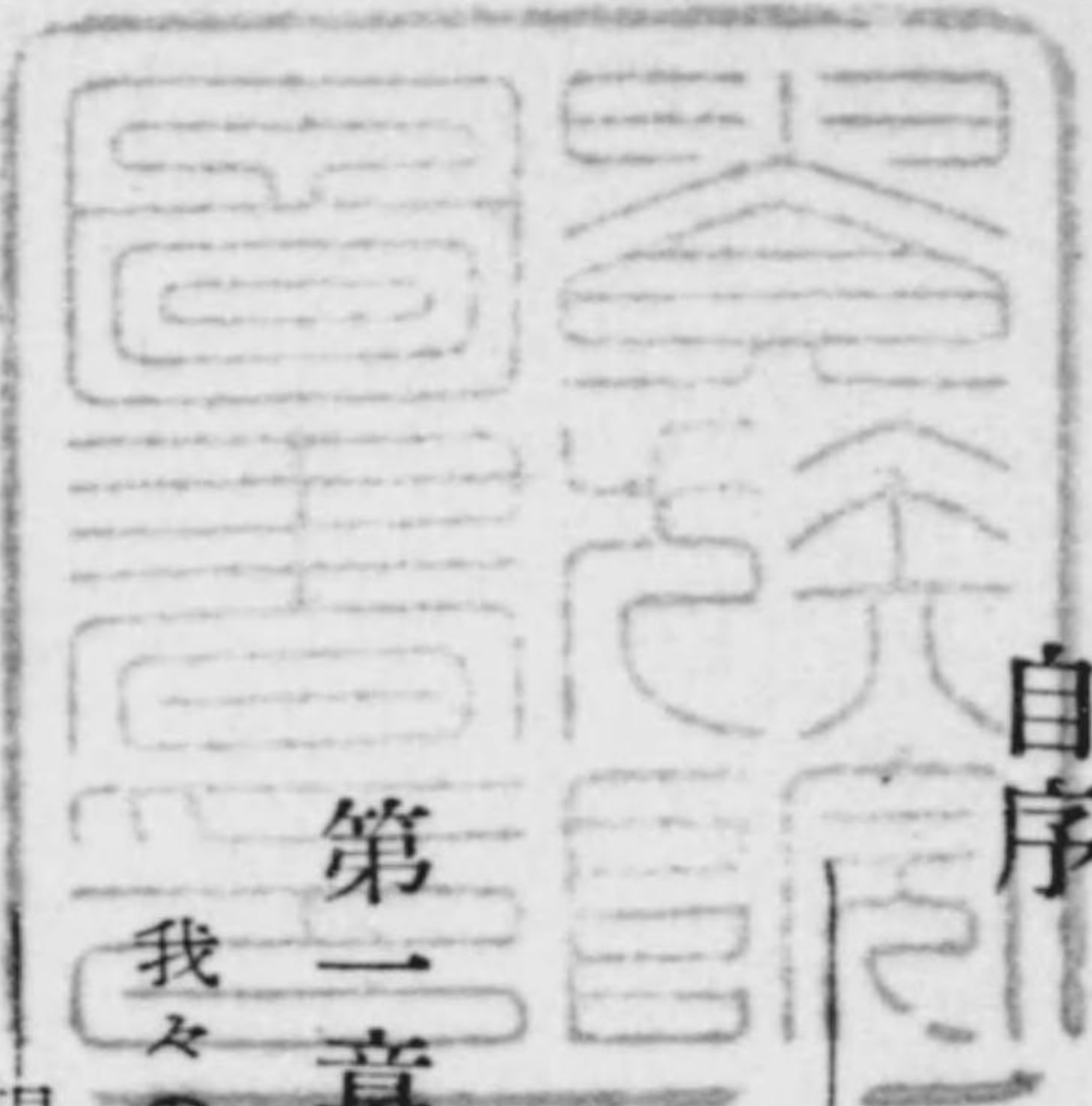
第二章 明治維新の回想

轉機日本と明治維新——明治維新の物心兩面——當時の形勢と現在の時局——開國を迫る外國勢力——吉田松陰の下田踏海

第三章 革新の原動力

國家革新の必要と國史への回顧——大化改新と日本書紀の編纂——建武中興と神皇正統記——明治維新と吉田松陰の國史研究——建國精神の把握——日本は一大家族國家——理想的なる全體主義國家

目次



新日本協同體の建設——「義は君臣、情は父子」——古代日本人の生活——萬世一系の天皇——革新の原動力

第四章 我國の特殊性……………四

- (一) 日本人としての自覚——自由主義・個人主義の批判、共產主義の克服
- (二) 過去の歴史——我國政治史の特色——大化改新——鎌倉幕府の創立——建武中興——明治維新——我國革新運動の本質
- (三) 日本國家並びに民族の特殊性——和の精神——君民一體——綜合性・獨自性・純粹性——血族的・文化的・國家的一體——世界無比の傳統——一切のものゝ日本化——外來文化の攝取・消化・醇化——日本の後進性——創造は絶対必至——鞏固なる日本國民的統一——國民的特質の否定と肯定
- (四) 我國の現段階——躍進日本と東洋平和の確立——新生活體系と新生活文化の創造

各論

第五章 新らしき青年……………六

- (一) 日本精神——眞個の日本人——全體主義・道義國家日本——革新時代と新型人間——新らしき青年とは新らしきイデオの把持者の謂——國體觀念と科學精神——困難と不可能とを混同すべからず——

——創造・開拓の氣魄

- (二) 皇基の振起・新臣民道の展開——初一念の確立——惠まれたる日本青年——新精神の容器たる新肉體——體育を重視するドイツ青年教育——青年團體力検査要項——生活實踐に依る鍛鍊の切要——教育における一貫せる理想並びに方針——ドイツ・イタリーの新教育理論

第六章 新らしき生活……………一三

- (一) 現代青年は何を爲すべきか——國史を回顧せよ——時代認識の要——全體觀に立つ至公無私の行動——全國青年の大團結——ヒットラー・ユーゲント生成史——先づ國家社會への奉仕體勢を決せよ——日本の指導者原理——日本の全體主義
- (二) 青年の特殊なる立場——先輩・同僚・後輩——成熟せる世代の健實性と若き世代の新鮮味——革新的新氣運の勃興——新らしき生活への第一歩

第七章 青年の社會的地位……………一四

- (一) 我國青年層の人口及び職業——社會的地位の動搖・不安——その克服への努力——全體的責任者としての青年の奉仕活動
- (二) 青年の種差——勤勞青年と知識青年、兩者の接近——勤勞青年の希望——勤勞青年の教育方針——社會政策の必要——都市青年の環境——進歩の自覺——農村青年の環境

第八章 青年と教育制度……………一八四

小學校教育——就業兒童——社會教育特に青年教育の重要性——少年團における教育——入學難、就職難——學校教育の缺陷——徴兵検査に現はれたる學力並びに體力——軍隊教育——青年團と壯年團——幼年・青年・成年の三位一體の人的結合の再建——我國教育制度の改革——學生及び知識階級の問題

第九章 青年團と青年學校……………二二一

- (一) 青年學校の目的——青年團の本質と現況
- (二) 青年團と青年學校との關係——青年學校の沿革——青年團の沿革——附記 若者仲間生活と自治
- (三) 青年學校教育の義務制と青年團の革新——文部當局の説明——青年學校の義務制に關する諸論議——青年學校の時代的意義——國民大衆教育制度確立の方途——學校教育革新の先頭に立つ青年學校——青年團の教育内容と青年學校の教育形式——學校教師か生活指導者か——問題解決への道

第十章 結語……………二五四

我國の現段階は創造・開拓時代——今日の日本に明日の日本の姿を看取せよ——舊型青年の克服と新型青年の登場——青年教育の革新——所謂塾風教育の勃興——新たなる時代と青年の新たなる動き——勤勞奉仕運動——滿蒙開拓青少年義勇軍の壯舉——我國青年の當面の任務



青年教育の革新

總

論



東京大学図書印

第一章 序 説

我々の課題は我國現下の青年の諸状態を究明し、青年教育の現状に検討を加へ、以て我國刻下の急務たる青年問題解決への一提案を爲さんとするに在る。

最近數年來のジャーナリズムに於ける一異彩はこの青年に關する諸問題が社會の各方面の人士によつて盛んに論議され出したことである。而して或る者は悲觀し、或る者は樂觀し、また或る者は悲喜相半ばしてゐる。とまれ、斯の如き傾向は單にジャーナリズムの一時的な流行ではよもやなからう。また左様であつてはなるまい。これは明白に、日本の青年が日本の社會の重大關心事とならざるを得なくなつたことを示す一證據であらう。學生も、都會の青年も、將又農村青年も、今の儘の状態では駄目だ、何とかしなければいけない、何とかなつて貰はねば困る、といふ空氣が次第に濃厚になつてきたのである。

問題は具體的に、現實的に且つ歴史の必然として提起された。まさに青年を問題とすべき時機が日本にも到來したのである。否、時機は既に早くから到來してゐたと云ふ方が寧ろ正しいであらう。今や問題は焦眉の急を告げてゐる。轉機日本は青年に恃つ處極めて大きいからだ。勿論疑もなく青年の一部は既に動き出してゐる。決して總ての青年が優柔不斷であり、因循姑息なのではない。我々が今更ら呼びかけなくても、彼等は彼等自身の發意で、彼等自らの止むに止まれぬ正義感と公憤と純情とを以て、既に數多くの青年が新なる道へ發足してゐる。新たに創造の天地を開拓しつつある。けれども斯の如きは日本全體の幾百萬の青年の總數に比すれば、まだ極少數にしか過ぎない、それは僅かにその一部分である。大多數の青年は内面的には兎もあれ、外面的には尙ほ舊態依然として低迷してゐるが如くに見える。問題はこの點である。これは何と説明すべきであるか、まことに怖るべき現象である。

斯の如き無氣力、怯懦、現實主義、御都合主義、低調の原因は一體何處にあるのであらうか、人か？ 社會か？ 就職難、前途に横はる生活苦、貧困、結婚難、社會の矛盾・對立、不正・不純等々、原因は一應社會の側にあるやうに見える。そは、或は事實かも知れない。が併し、社會は本來人間の作つたものであり、人間の結合以外の何物でもない。青年自身既にこの社會のうちに生息し、更らに彼れ自身自ら社會を表現してゐる。人間は社會的動物であると、曾てフランクリンは言つた。言語の一例をとつて見ても、この事は明らかである。對者がなければ言語は生じない。單なる音が生きた言語でな

いやうに、單なる個人は生きた人間ではない。それはたゞ人間が頭の中で考へた、抽象的な觀念にか過ぎない。生きた、魂のある個人は常に社會的個人である。個性は社會性であり、社會性はまた個性である。人と社會とを對立的に考へ、個と全體とを、別々に切り離された概念と思惟するのは非常に誤謬である。

自己の環境の貧弱性、劣等性、停止、沈滞、固定、消極面にのみ眼を向けてゐる限り我々は所詮何時まで経つても救はれるものではない。歴史は總べてのものが、結局停滯し、固定せざることを教へてゐる。人類は常に進歩し、社會は常に發展してゐる。それは古往今來一貫して謬らざる鐵則である。この鐵の如き歴史の軌道を踏み外すとき、人は、歴史の發展から取り残され、没落者となる。

かくて、我々は進歩の自覺を持つことが絶対に必要だ。この自覺と認識とを武器として、我々は雄々しく、勇敢に生きて行かねばならない。近代西洋畫の先驅、セザンヌは他人から見れば涙を誘はれるやうな孤獨に生きた人であるが、何を精神の糧とし、支柱として、彼はあれほどの藝術的精進を續け得たのであらうか。「回想のセザンヌ」にある彼の短い言葉は這間の消息を物語つてゐる。曰く、「私は毎日進歩して居る。私の本領は是だ」と。進歩の自覺といふのは即ちこれである。

元より進歩は青年のみの持つ特權ではない。然しながら青年は壯年や老年に比して遙かに有利な、

進歩の爲の諸條件を具備してゐる。

第一に青年は若き樹木の如くに、之から伸びて行く力、精力を保有してゐる。青年はそれ自身一つの可能性であり、希望である。それはこれからである。民族の春である。

第二は青年は先輩の残した幾多の業績を繼承してゐる。それだけ、新らしい、既に進歩した地盤の上に立つてゐる。より高き生活、より豊かなる文化を享受しうる條件下に置かれてゐる。若き世代は既に固定せる世代に比して常に遙かに内容豊富である。彼等の過去が偉大であればある程、當然彼等も亦偉大になり得る。青年はかくの如き傳承の價値の基礎の上に、より高く、卓れたるものを建設し得るとの信念と自覺とを持つことができる。

第三に青年は素朴、純眞である。青年の精神状態は本來左様に複雑、不純なものではない。故に青年は理想を追究し、現實を打開するの素質に恵まれてゐる。

斯の如く、青年は當然進歩の自覺者たり得るのである。日々の行動をこの進歩の自覺を以て營むとき、一切の事物に對してこの自覺の眼を以て對處するとき、我々は實に生き甲斐のある、明るい、且つ力強き生活を爲すことができる。ゲーテはその死に際して、「もつと光を」と言つて、窓から明りを入れさせたそうであるが、不斷の精進、永遠の進歩、我々はこれでなければならぬ。

不利なる環境、貧弱なる屬性等々、其他一切の消極性はこれによつて打破、克服されるであらう。苦痛、困難、矛盾、對立の眞只中にも青年はそこに含まるゝ積極性、進歩性を發見し、それを助長し、發展せしむるところに自己の使命を感じなければならぬ。

現代青年の痛弊は端的に云へば、斯の如き自己自身の本質を自覺してゐない點に存する。ほんとうに自己の價値、自己の歴史的意義を悟つてゐない。斯く云へば、否、それは寧ろ反對だ、我々は餘りにそれを知り過ぎてゐる、だから動けないのだ、我々は餘りにも無力なのだ、反問するかも知れない。けれども國家の將來を負擔し、民族の希望であるべき青年が、そして前述の通り、種々有利なる諸條件を具へたる青年が、たとへ如何なる外的條件下にあらうとも、その前途に光明と希望とを發見し得ず、唯、手も足も出ず、何等爲す術を知らぬといふのは何う云ふわけであらうか。甚だ痛嘆すべき事實であり現狀である。

要するに心ある青年は別として、現代青年の大多數はあまりにも現實主義であり、あまりにも現實に囚はれてゐる。而もそれは現實打破主義ではなく、現實追隨主義、現實傍觀主義である。歸する所個人主義であり、自由主義である。勿論これは獨り青年のみの罪ではなく、日本社會全體の罪であり、いまの先輩にも充分その責任があるのであるが、それにしても若しそうであるならば、尙更青年は自

ら自覺、反省すべきではないか。自由主義、個人主義とは、元來、資本主義に固有のものであり、それは、明治維新以來我國に輸入せられた一つの思想の潮流である。その役割は決して小さくはなかつたが、我國において既に一定の役割を果し終り、今やそれを批判し、検討すべき時期が到來してゐるのである。

現代青年は現實をもつとく直視する必要がある。そして單に自己の側から、國家、社會を見るのではなく、國家、社會の側に立つて、自己を直視し直すべきである。そして單に現實を冷やかに傍觀、乃至それに無氣力に追隨するのではなく、この現實の矛盾と對立とに自ら體當りを以てぶつつかり、それを如何にせば除去、打破できるかを、周到に研究し、對處すべきである。

唯こゝに誤解を避くべき二つの事がある。一つはあまりに設問的フロンティックであつてはならぬと云ふことである。徒らなる穿鑿立や實際とかけ離れた議論は役に立たぬと云ふことである。若き青年は云ふまでもなく偉大なる現時代に直面して立たねばならない。彼等は自ら問題を提出し、その素朴、純眞なる自信を以て世の眠れる者を奮起せしめねばならぬ。併し單なる疑問の提出、批評のやりつばなし、涯しなき論争では全くのナンセンスであり、無價値である。問題は純粹でなくてはならない、即ち自己自身の生活の中から生れたもの、實踐を通じて獲得せられたものでなければならぬ。そしてそれは實際

に實を結ぶ、より新らしい、より健全なる行爲へ導くものであらねばならぬ。

今一つは青年が革命的であるといはれてゐる點である。かつてマルクス主義者はこの見地から青年を煽動し、彼等をその獨特のイデオロギーに基く實踐運動に導き入れた。多くの春秋に富む青年がこのために犠牲に供せられ、其思想は憎むべしと雖も、同情すべき苦難と災厄とに陥入れられた。マルクス主義の誤謬は何であつたか？ その微細に亘る全理論體系を批判するは、そのところでないが、要するにそれは一面的な、現實を離れた抽象論、實踐から理論へではなく、理論から實踐へと全然事物を逆に見る方法であつた。その國家觀、社會觀、階級闘争説にしても、すべて皆然り。人間を單に階級の見地からのみ把握したるが如き、非常に一面的であり、抽象的である。それは物質的利害關係によつて行動する人間の、かゝる行動の一面にのみ囚はれた、融通性のない、ひからびた理論である。人間が單に斯の如き一面に於てのみ行動しない事は、歴史が之を物語り、眼前日々の事實が之を證明してゐる。むしろ逆に、そうでない精神的な人間の活動こそ、永遠であり、人類の誇りである。我々が歴史を讀んで、讚嘆し、感激し、昂奮するのは、實に斯の如き道に生きた人々であり、決してこれとは逆に生きた、守銭奴や現實主義的俗物ではない。か様に、人間精神の生粹を忘却したマルクスの階級觀、從つてそれに由來する階級の對立、闘争説の謬れることは云ふまでもない。

更らにマルクス主義は事物を否定するに急に於て、これを肯定することを忘れてゐる。人間は一度び否定の見地に立てば、自分自身をすら否定せざるを得ないであらう。觀念において否定し、現實においては肯定し乍ら生きてゐる人間もある。此種の人間にはこれより外に生きる方法もないが、併し斯の如きは哀れむべき不具者である。觀念においても現實においても、自家撞着なく、肯定しつゝ生きてこそ、始めて我々は全面的に、惜しげもなく生きて行くことができる。要するに否定とは人間思想の一つの傾向、型にし過ぎない。それが實際に正しいとされるときは、人の死亡、國家の滅亡、地球の絶滅等々、事實上それが起つたときに限られる。我々が革新の立脚點に立つといふのは、あくまで肯定の立場を保持しつゝ、批判し、検討し、改革するの謂であつて、もとより前述の如き、單なる否定を意味する革命（言葉ではなく、事實）を意味するのではない。

青年は歴史、傳統を礎石としてその上に、より高く、より優れたるものを、建設し得るとの自信と信念とを有たねばならぬ。單に否定するのみが一つの達成であると考へるのは不可である。

プログラムをつくることはいと容易である。然し、それを強力的に、且つ創造的に實現するまでには、その間幾度か斷念、放棄のことをおもふ長い過程が介在する。實際にそれを成し遂げるためには自分で事に當り、堅忍持久しなければならぬ。

青年はまた奉仕の念を忘れてはならない。自ら服従の價値を體得せざる者が他に命令することは出來ない。眞實に滅私奉公の誠を捧げてこそ、始めて改造を口にし、國家の革新に參與し得る。

然し青年期の人間は未だ國家の革新に堪へるほど成熟してゐるとは一般的に言へない。但し自己自身の改造については如何なる年齢の者も充分成熟してゐる。私が以下本書において説かんとすることも、全くこの趣旨に出づる、その心構へについて卑見を述べるのである。それは國家に御奉公する我々の日々の實踐のうちに體得され、やがてそれがお役に立つ日が來るであらうと信ずる。

國家革新の原理は何處に之を求むべきか。我々は先例者として、ロシアを有し、ドイツを有し、またイタリーを有してゐる。端的に云へば革新又は改造とは自國の善を以て自國の惡を討つことでなければならぬ。他國の善と見ゆるが如きものを取り、それを以て自國の惡に代へることではない。建設の原理は飽くまで我のうちに之を求むべく、斷じて之を他に求むべきではない。而して斯の如き原理は唯、我が國の歴史を學ぶことによつてのみ、把握せられる。

我々は日本國家と日本民族の將來とについて、常に雄大、壯嚴なる國家の姿を胸中に抱いてゐなければならぬ。皇室・國家、斯の如き「神聖・永遠なるもの」こそ、我々日本人の一切の活動と思索との源泉であり、基礎である。悠久三千年の昔より、いま我々に傳へられ、更らに尙未來永劫に至るまで

傳へらるべき我々の光榮ある傳統である。個々の世代はたゞ彼の時間的なる行爲のうちにこの永遠なるものを實現し、謂はゞこの永遠なるものゝ中心に迫るといふ義務を有つのみである。

永遠なる日本は義務を要求する理念であり、何人もこれに對して恣なる内容を附するを得ず、また附すべきではない。そは我々にとつて一つの形而上學的基礎であり、變動されるべきものでない。我々の奉仕とは即ちこの永久に存在する、崇高なる義務の精神である。青年は須らく斯の如き目標の下に健闘し、以て最後の勝利を獲得すべきである。この至公無私の道において、我々はまた世界の平和並びに文化に寄與しうるであらう。

第二章 明治維新の回想

日本はいま重大なる轉機に立つてゐる。その情勢は恰かも今より約七十年前、明治維新前後の頃の空気を回想せしめる。現在も又當時に於けると同様に歴史の一轉換期、革新時代、即ち昭和維新である。變革期の特徵として、そこには種々なる勢力の交流、對立があり、新舊イデオロギーの闘争があり、國內改革の問題もあれば、重大なる對外問題も繼起してゐる。更らに新舊文化の交錯がある。あらゆる革新がさうであるやうに、明治維新にも物心兩面の背景があつた。元和偃武以來、徳川幕府の採り來れる二大政策、即ち封建制度の完成と文教復興政策とが結局幕府を亡ぼした緣由であると、福地源一郎はその著「幕府衰亡論」の中で述べてゐる。

封建制度は幕末において、幕府並びに諸藩の財政破綻、下級武士の窮乏、農村の疲弊等々、極度にその矛盾を激化し、やがて崩壞の運命にあつた。徳川幕府が治安の必要上盛んに奨勵し、普及した漢學は却つて王たるべき皇室の御ために、覇者たる徳川氏を倒すべき理論を提供した。而して國史の研究、神道の隆興、國學の發達等々、次第に日本國家における皇室の御地位が明らかにせられ、勤王思想

想が勃興した。

嘉永六年アメリカの黒船が浦賀に投錨、我國に通商貿易を強要せる非常事件を契機として、俄然、革新運動は全國に漲り、強烈なる國民的自覺に燃ゆる諸國志士の東奔西走となつた。

明治維新の標語は「尊王攘夷」であつた。勤王精神の勃興がその思想上の背景を爲し、外國勢力の壓迫がその實行の機縁となつた。當時の志士の攘夷的精神は決して無智偏狹が然らしめたものではなかつた。當時の日本は思想墮落し、精神喪失し、それが因となり果となつて、あらゆる政治的、社會的、經濟的諸制度が廢朽、頽廢の極に達した。この時に當り、最も必要であつたのは愛國の至誠であり、強烈なる國民的自覺であつた。而して攘夷的精神はこの旺盛なる國民的自覺が、外國によつて與へられた日本への侮辱に對して發せる義憤に外ならない。

更らに維新の志士は、皇室を中心として、君臣一體の國家を形成せんとすることをその根本の精神となし、終始一貫この主義を貫徹し、種々なる天佑のもとに、遂に見事にその目的を達したのである。倒幕は僅かに維新の第一歩にし過ぎない。封建制度の殘存が愈々これから拂拭せられなければならぬ。明治維新の建設的事業は不世出の御英主たる明治天皇の親裁の下に、新政府の手により着々實行せられた。版籍奉還、廢藩置縣によつて王政維新の基礎定まり、徴兵令の發布によつて國民皆兵

制度が布かれ、地租改正によつて、土地に對する「四民平等」の精神が徹底せしめられ、義務教育の方針もすでに明治四年において確立せられた。

明治維新の志士の思想的背景は勤王の一事において歸一してゐたのみで、其他の點では種々なる思想系統に屬してゐた。大義名分を強調せる漢學者、大日本史、日本外史によつて國體の本義を明らかにせる史學者、また復古神道を力説した國學者、更らに歐米の新知識に接せる開國洋學者等々、その思想的背景は頗る複雑であつた。維新の大業完成の後において、かやうな各種の思想的傾向は、先づ新舊兩勢力の對立となり、また武斷派と文治派、急進派と保守派との二大陣營の分裂となり、朝において征韓論と内治派との抗争があり、野においては暴動と暗殺とが行はれ、波瀾を極めるに至つた。一方には「王政復古」の精神によつて天皇の御親政が行はれ、太政官、神祇官の如き大寶の舊官制が再現し、廢佛毀釋や基督教の迫害が行はれると共に、他方では、「明治維新」の精神によつて、政府の高官、學生が歐米に派遣せられ、一切の舊き物を極端に排斥し、歐米文物の極端なる模倣が行はれ、國語を廢して英語を採用せよなど、云ふ者すらもあつた。洋服は胡服と罵られ、和服は蠻服と夫々互に嘲けられた。この新舊の對立は國家生活のあらゆる部面に現はれて行つた。かくの如き傾向は爾來明治時代を通じて流れてゐた。否、今日においても或はさうかも知れない。之に對し、我々は唯曇り

なき日本精神によつて、その取捨に迷はざらん事が大切である。

さて、以上が大體、幕末より明治初年へかけての天下の形勢であつた。我々は次に當時の時局と現在の時局との間の若干の差異を指摘しておかう。

第一に當時の對外問題は征韓論であつた。激烈なる論争が廟堂においてたゞかはされ、遂に内政改革・庶政一新の上、對外發動をなすべしとする岩倉、大久保の一派が勝利し、征韓論を強力に主張した三條、西郷一派は敗退した。我國の現在の方針はこれとは恰かも正反對である。對外問題の解決が第一の、而して最高の國策であり、國內改革の問題は近衛首相の言明にもある通り、事變の根本的解決に直接關係あるものを主とし、其他の方面は従とされてゐる。

いま一つ、國家政策の順位が決定せらるゝに當つて、維新當時は征韓論は是非かの二派に廟堂が分裂し、抗争をしたが、現代の日本においては、斯様な傾向は微塵だも存在してゐない。事變對策、東亞に於ける大使命の敢行については、忠勇なる皇軍將士の戦地における決死的奮闘は云ふまでもなく、官僚も政黨も資本家も労働者も、如何なる職業にある者も、國民の總てが一致して、大政輔弼の任に在る近衛内閣と共に不可分一體の協力を爲さうと努めてゐる。

更らに時局の重大性に就いて考へれば、現在の我國の情勢は明治維新當時のそれ以上であり、時代

の相違するに従つて、その本質も形態も異つてゐる。

即ち明治維新は封建社會の行詰りを清算して、王政を復古し、近代的民族社會を樹立することを、その歴史的使命としてゐたが、現在の日本は、この明治維新以後に發達したる政治、經濟、文化の行詰りを打開して、より高度に綜合せられた、新社會の創造をその任務としてゐる。換言すれば内に於ては現時の情勢に對應すべき新政治機構の建設を目指し、外に對しては東亞諸民族協同體を建設すべき基礎工事を行ひつゝある。

我が國は今や眞に舉國一致、國家、國民の全力を傾けて、支那事變の解決、東洋平和確立の爲に闘つてゐる。これは今日我國における不動の國策であり、萬難を排して成就されねばならぬ。我國の目的は數次に亘る政府の聲明に明らかな通り、共產主義其他謬れる主義と抗日、侮日の政策とを以て、我國及び我國民に對し、暴戾なる行動を繰返せる支那の蔣政權と支那軍とを徹底的に撃碎し、それに代るべき新政權並びに善良なる支那一般大衆とともに日滿支三國間の融和提携の實を擧げ、やがて東亞永遠の平和と東亞諸民族間の共同、共榮の新關係を確立せんとするのである。こゝに我々の意識は單なる民族意識より飛躍して、東亞諸民族の平和と協力とを目指す大陸意識へと發展する。かくして東亞の社會には史上未曾有の新生活形態、新協同體が創造、展開せられんとしつゝある。

現在我々が到達せる段階はまさに右の如きものである。帝國の直接の敵は支那の蔣政權であるが、彼の背後には、ソ聯あり、コミンテルンありて、之を操縦し、またイギリス、フランス等々の外國資本主義が之に關接し、爲に我國の進路は妨げられ、我が躍進は阻まれてゐる。されば外國の壓力の存する點においては維新の當時も現在も全く同斷である。唯現在における我々の活動領域はいまや東洋全地域に擴大されてあり、往年の如き小さな島國に跼蹐し、外國勢力の壓迫にたとへ一時的にもせよ畏縮した時代とは大いに趣を異にする。併しながら當時日本が斷乎として開國の國是を決し、彼我の經濟、文物、諸制度發達の差、甚大なりしにも拘らず、よく半植民地化の危機を脱却し、遂に我國今日の隆盛を爲したる點は、我々の近い祖先の奮闘努力の賜ものとして大いに感激措かざる處である。

次に當時彼我國勢の差が如何に距りがあつたかを考へて見よう。明治元年は西歷一八六八年に當る。當時の歐米の状態を見るに、ヨーロッパではその前年に普墮戰爭があり、プロシヤはオーストリアに勝ち、國運まさに隆々たらんとする時であつた。又一八七〇年の普佛戰爭は維新以後僅か二年後に起つてゐる。當時の歐洲の經濟状態は勿論今日に比較すれば未だ幼稚であつたが、それでも我國のそれと比較すれば格段の相異があつた。歐洲ではすでに維新より六十年前も前に汽船が發明され、汽車も動いてゐた。電信もあれば寫眞もあつた。パリで萬國博覽會が開かれたのは一八四四年であるから、

これも明治維新に先立つこと二十數年である。

我が國は永年鎖國状態を續けてゐたから、經濟は總て自給自足の農業が中心であり、商工業においては未だ見るべきものがなかつたが、當時歐洲においてはすでに大規模の商工業が出現してゐた。有名なるスエズの運河の開通が一八六九年のことであるから、それは明治二年に當る。當時我國においては陸運には駕籠を用ひ、海運には帆船を操つてゐた時代に、向うでは佛人レセップの努力により紅海と地中海とを連絡する大運河の開鑿が完成したのであるから、彼我の相違は甚だしい。また當時我國には慶應三年に幕府が始めて大阪に商社を設立せしめ、會社のやうな企業組織をとつたのが唯一のもので、其外に銀行も會社もなかつたが、英國にはすでに英蘭銀行の如き中央銀行が創設されてをり、有名なるロバート・ピールの銀行條例はそれより三四十年前に制定されてゐた。

ヨーロッパに於ては實に明治維新に先立つ四百年前、すでに封建制度が倒壊し、爾來通商自由の經濟時代となつてゐた。一四九二年にコロンブスのアメリカ發見があり、一四九八年には東印度航路が發見され、この所謂地理上の發見と共に、ヨーロッパ各國の植民地獲得競争が展開せられて行つた。ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリス、フランス等々ヨーロッパ資本主義はすでにこの頃から發芽しはじめてゐる。既にこの頃から彼らの經濟生活は近代的形態をとりはじめてゐた。やがて一七

六九年、明治維新を去る百年、イギリスのリチャード・アークライトによつて紡績機械の發明が爲され、かくしてヨーロッパに始めて工場制度が設立せられ、所謂産業革命の經濟的大變動が起るに至つた。之に反し我國では當時、主たる産業は農業であり、國內に商工業の發達ありしとは云へ、それは國內限りの經濟的發達から自然に發生した、極めて小規模のものであつた。世界を股にかけて發展しつゝあつた當時の歐米とは、比較になるものではなかつた。

徳川氏が日本全國に制覇の權を握つたのは西暦で云へば、十七世紀初頭頃からであるが、それより約半世紀前天文十二年（西暦一五四三年）にポルトガル人が我國に渡來して鐵砲を傳へ、次いで天文十八年には鹿兒島に天主教が傳來された。即ち先に述べたヨーロッパに於ける地理上の發見に伴ふ植民地開拓熱の餘波が、すでにこの頃一度日本を訪れてゐたのであつた。當時日本はキリスト教の我國に害あることを認識し、秀吉先づ之を禁じ、家康も亦之に倣ひ、かくて我國と歐米との連絡はこゝで一應斷絶したのである。然るに約二百五十年の泰平の夢を破つて、歐米勢力が再び日本に迫つたのが、幕末における所謂頻々たる邊境の警報であつた。二百五十年以前に可能であつた事も、二百五十年以後においては不可能であつた。鎖國はもはや時勢遅れであり、開港が歴史の必然であつた。

維新の志士、吉田松陰はこの歴史の必然性を認識し、而もそれを誰よりも先に實行した純情、熱血

の實行家であつた。松陰は幕府の海外渡航禁止の令を以て當然早晚改正せられなければならぬものと信じてゐたが、「禁は是れ徳川一世の事、今時の事は將に三千年の皇國に關係せんとす。何ぞ之を顧みるの暇あらんや」と、遂に改正を待つ能はずして、下田踏海を企てたのである。彼の雄圖は空しく破れた。また、その取つた手段の是非を何れに決すべきか、我々の批評の限りではないが、唯松陰の國をおもふ一念のみは永久に我々の腦裡を離れるものではない。毛利藩の長老村田清風は容易に人を許さぬ傑物であつたが、松陰のこの舉に對し、世間の紛々たる非難など、眼中になく、「是は極くよい事をやつてくれた。何か思切つた事をせんければ役に立たぬ。ぐぶり／＼して居ては埒が明かぬ。大次郎（松陰）が外國の船にでも乗つて行かうといふと世間では喧しく云ふが、併しそれを敢行した事はよい事である。事の成敗はどうなるとも、其の志を天下に顯はしたら心は既に西洋に行つて居るわけではないか、これが事の端緒といふものぢや」と云つて喜んだのである。村田清風は死を賭して事の端緒を開くところに、志士としての松陰の存在價値を看取したのである。

第三章 革新の原動力

さて、明治維新前後にわたる、國家未曾有の非常時局に際會して、我々の祖先が、克くその對内、對外問題の處理を誤らず、ために我國今日の隆盛を致した所以を我々は回想し、これに對し深き敬意を表し、厚き感謝を捧げると共に、この曠古の大業が何が故に成功し、また何れの所にその困難があつたか等々、その革新の過程を深く検討し、そこに多大の教訓を學びとらねばならぬ。

一般に、我々は國史において、何を學ぶべきであるか。曰く、眞個の自己を知ることである。現在の日本を知らずして、未來の日本を推し得ざるが如く、過去の日本を知らずして、現在の日本を知ることが出來ない。我々は國史により、始めて現在の國家を把握し、始めて現在の自己を自覺する。眞に自己を自覺したる者のみが、始めて革新を口にし、改造を筆にし得るのである。革新乃至改造は確かに舊きもの、破壊であるが、それは同時にまた新らしきもの、建設でなければならぬ。破壊は必ず建設のためのみ爲さるべく、破壊のための破壊は一個のナンセンスにしか過ぎない。

國家革新の必要は、國民的生命の墮落衰弱したる時に最も切實である。要するにこの生命中の善が

畏縮し、悪が跋扈する時である。故にこれを改革するためには、その國民的生命のうち潜む、偉大、高貴、堅實なるものを探究し、之を再興することによつて、現に横行する悪を打倒しなければならぬ。換言すれば、革新とは、自國の善を以て自國の惡を征する事であつて、決して他國の善と見ゆるものを以て、自國の惡に代ゆることではない。即ち建設の原理は斷じて、之を他國に求むべからず、必ずこれを自國に求めなければならぬのである。この建設の原理は云ふまでもなく、自國の歴史の中にあり、我々はそれを學ばねばならない。

かくして由來、我國においては世の革新の切要なるときは何時でも國史が回顧せられ、そこから革新の精神的動力が生み出された。誠にわが國史こそは若人の革新への渴を醫す、酌めども盡さざる泉である。大化の改新も、明治維新もさうであつた。更らに回天の事業空しく中道にして挫折したとは云へ、建武の中興も亦さうであつた。

わが古代に、堂々「日本書紀」の如き立派な史書の編纂されたるが如き實にこの故である。日本書紀が編纂された所以は、當時日本民族の文化的發展が、かくの如き史書を編み出しうる迄の段階に到達してゐた爲でもあるが、その直接且つ有力なる原因は支那との接觸であつた。我々の祖先は支那と接觸し、茲に始めて強烈なる國民的自覺を生じた。この強烈なる國民的自覺並びに反省の結果として、

日本書紀の編纂が爲された。當時我國は早くより支那との交渉開け、推古朝以來は盛んに隋唐文明を吸収し、彼我對等の地位に立たんが爲に、我々の祖先は只管努力を重ねてゐた。けれども當時遙かに我より偉大なりし彼の文明に些かも壓倒さるゝことなく、毅然として自己を失はず、むしろ之によつて自覺が強化されたのである。聖德太子が隋の煬帝に書を送り「日出處天子致書日沒處天子」といひ、また「東天皇敬白西皇帝」と記し、堂々對等の態度を堅持せられたるが如き、また天智天皇が百濟を援けて大唐帝國と戦ひ給ひたるが如き、戰爭は我に不利であつたが、この一戦は傲慢なる唐をして、我が國民の勇武に畏怖と嘆賞とを禁ずる能はざらしめ、却つて彼より使者が來り、和を乞ふに至つた。何れも隋唐文明の最大熱心なる採用者であらせられしだけ、我々はその莊嚴なる國民的氣魄に感激を禁じ得ないのである。

聖德太子の御理想は支那文明を大いに吸収し、氏族制度の弊極まれる舊社會を改造し、以て新日本を建設、一日も早く我國の文化的水準を引き上げることであつた。かくて太子は昂まれる國民的自覺に相應しく、日本建國の由來並びにその精神、從つてわが國體の尊嚴を内外に明示するために、朝廷に於て國史の編修を企てられた。太子編修の國史は不幸にして蘇我氏と共に亡びたが、太子の理想であつた大化改新が中大兄皇子、即ち後の天武天皇によつて斷行されるに及び、元正天皇の養老四年、

日本書紀の完成を見たのである。これより先、元明天皇の時に、稗田阿禮の暗誦を大安万侶に勅して編せしめられた古事記が出来たが、かくの如く修史事業の盛んなりしは當時の旺盛なる國民的自覺を反映するものである。

日本書紀は特に從來の史書にはなかつた「日本」なる國號を冠し、また壯麗なる漢文を以て書かれた。當時の輝ける先進國たる支那に對し、我が壯嚴なる國體の本義を明示するために、斯く日本書紀が撰修されたことは、獨立不羈なる日本精神の嚴たる存在を證して餘すところがない。

後醍醐天皇の建武中興は無念にも中道にして失敗に終つた。しかしながら、その時發揮せられたる楠木正成はじめ幾多勤王志士の義烈なる日本精神は、北畠親房の「神皇正統記」に、その見事なる結晶となつて現はれた。北畠親房はこの書において、「大日本は神國なり、天祖はじめて、基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ。我國のみ此の事あり。異朝には其のたぐひなし。此の故に神國と云ふなり」と冒頭し、わが皇統の天壤無窮なるべきことを明確に力説、且つ主張した。まことに神皇正統記こそは、前に遙か神武の創業を見はるかす、後に遠く明治維新を呼ぶ處の我が國史の中軸であつて、此書一度出で、大義名分の存するところ、煥乎として千載に明かとなつたのである。

神皇正統記はまた、天照大神の神勅が、日本書紀、古事記、古語拾遺等に、夫々書法を區々にして

載せられたるを、よく纏め、更らにその意を擴充し、明確化し、史籍としても重要な價値を包藏してゐるのである。

明治維新の志士が此書によつて如何ばかり感奮興起したるかは今更ら云ふまでもない。安政元年九月下田踏海に罪を得た吉田松陰は江戸から護送されて郷里の野山獄に投ぜられた。この野山獄における生活こそ、松陰にとつて重大なる生涯の轉回期であつた。松陰の野山獄における生活は、嘉永三年の九州遊學に始まる、前後五年の遊歴時代を終り、今や鵬翼を收めて私生活への開拓に全精力を集中せしめる爲の重大なる轉換期を意味する。

「吾卑微にして孱弱、虎の猛を以て師と爲すに非ざれば、安んぞ士たるを得ん。吾生來事に臨み猛を爲すこそ凡そ三たびなり。而し或は罪を獲（東北行のときの亡命）或は謗を取り（嘉永六年秋の上書）、今は則ち獄に下り（安政元年三月下田踏海）復た爲すあること能はず。而も猛の未だ遂げざる者尙十八回あり。其の責も亦重し。神人蓋し其の日に益孱弱日に益々卑微にして終に其の遂ぐる能はざらんことを懼る。故に天意を以て之を啓くのみ。然らば則ち吾の志を蓄へ氣を稱する。豈に已むことを得んや」と。所謂二十一回猛士の猛烈なる勉勵がこゝに始まるのである。この轉回を結實せしめたる爲に松陰は單に純情なる青年志士、悲憤慷慨はするが實行に拙なる失敗者とは成り終らなかつた。

やがて病氣保養を名とし、野山獄を出て杉家の幽室の人となるに及び、松陰の勉學には更らに一層磨きがかけられた。まさに松陰二十六歳の時であつて、之より約二ヶ年半は、松陰の生涯中最も平和な時代であり、松陰は讀書と思索、著述と教育とに没頭し、光輝ある幾多の業績を残した。

松陰はこのとき始めて北畠親房の神皇正統記、山鹿素行の中朝事實、本居宣長の古事記傳等を讀んだ。まさに東北遊歴に際し、松陰は修史の都水戸に滞在したが、此處で松陰は、當時天下の志士の愛讀書であり、「革新の書」であつた「新論」の著者、會澤正志齋、それから大日本史編纂の總裁であつた歴史家、豊田武次郎に始めて會見し、國史研究の必要を痛切に感じた。即ち、「はじめて會澤、豊田諸子に踵りその語る所を聴き輒ち嘆じて曰く、身皇國に生れて皇國の皇國たる所以を知らざれば何を以て天地に立たんや」と發奮したのである。爾來松陰は國史の研究に思を潜め、研鑽、もとより怠らなかつたが、右に述べたる史書はこのとき始めて繙いたのである。

かくして國史の研究によつて得たる松陰の最後の結論は何であつたか。

「天照の神勅に日嗣之隆與天壤無窮と有之候所、神勅相違なければ日本は未だ亡びず。日本未だ亡びざれば正氣重ねて發生の時は必ある也。只今の時勢に收着するは神勅を疑ふの罪輕からざる也。

皇神の誓あきたる國なれば正しき道のいかで絶ゆべき

道守る人も時には埋れどもみちしたえねばあらはれもせめ」

これが國家に對する松陰の究極の信念であつた。つまり、國難打開の手段として國體を説くのではなくて、建國の精神、國體の尊嚴を知つて、國難打開の力を内に感じ、臣節の根源を悟つたのである。國體の尊貴なるは元より云ふまでもないが、それを非常時局に際して憶ひ出したり、又はそれに即して考へたりしたのでは、まだ國體の眞髓を把握したのではないといふ意味である。松陰はこゝに從來の國體觀より、更らに最後の一步を進めて、その究極にまで到達し、まさに眼前の風光一變し、本末先後一目瞭然たる思ひをしたのである。

松陰にして既に然り、まして我々はこゝに思ひを致し、深く自覺、反省しなければならぬのである。そして若し非常時局を縁として、また外國との關係から、國體の本義を悟るに至つたのであるならば、その過程を更らに究極の境地にまで到達させ、松陰に従ひ、こゝに我々は國體思想の轉換を行はねばならぬ。松陰の言を更らに尙ほ一節を引用して我々の反省の資としたい。

「天朝を憂へ因て遂に夷狄を憤る者あり。夷狄を憤り因て遂に天朝を憂ふる者あり。余幼にして家學を奉じ兵法を講じ夷狄は國患にして憤らざるべからざるを知り、爾後徧く夷狄の横なる所以を考

へ國家の衰ふる所以を知り、遂に天朝の深憂一朝一夕の故に非ざるを知る。然れども其の孰れか本孰れか末なるかは未だ自ら信ずる能はざりき。向に八月の間一友（安藝の僧默林）に啓發せられ瞿然として始めて悟る。従前天朝を憂ひしは並に夷狄に憤をなして欠を起せり。本末既に錯ふ、眞に天朝を憂ふるに非ざりしなり」と。

これ即ち、松陰をして眞に日本人たらしめた所以であり、また松下村塾の教育に永遠の生命の存する所以であり、これがまた維新回天の大業成就に深刻なる影響を與へたる所以である。

以上、我々は我國における、三回の重大なる革新時に際し、夫々我が國史への異常なる反省、自覺の行はれたることを明らかにした。過去を知り、自己を知り、而して革新の原理を把握するとは、即ち我が建國の精神を把握することに外ならない。雄大にして莊嚴、萬世・萬國に冠絶する、わが建國の精神を把握することに外ならない。建國の精神とは即ち國體原理であり、日本精神の粹である。それは皇室、國家、國民の理想であり、我が國史は實にこの理想を悠久の昔より、現在に至るまで、實現してきた現實、即ち過去の事實である。然らば即ち我々日本人が我が日本歴史を學ぶべき所以は明白であらう。蓋し祖宗の理想を今後現實化してゆくものこそ實に現在の我々であるからである。

建國の精神は天孫降臨の神勅並びに神武天皇の即位詔に、最も簡潔に表現されてゐると拜する。即

ち左の通りである。

神 勅

『葦原の千五百秋の瑞穂國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治らせ、行矣、寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし』

神武天皇即位詔

『我れ東を征ちしより茲に六年になりぬ。皇天の威を頼りて凶徒就戮されぬ。邊土未だ清らず、餘妖尙梗しと雖も、中洲の地に復た風塵なし。誠に宜しく皇都を恢廓め、大壯を規摹るべし。而して今、運、屯蒙に屬ひ、民心朴素なり。巢棲穴住、習俗惟常、夫れ大人の制を立つるや義、必ずず時に隨ふ。苟くも民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且た當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て元々を鎮むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまふ徳に答へ、下は則ち皇孫、正を養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲んこと亦可かららんや。夫の畝傍山の東南、攝原の地を觀れば、蓋し國の塊區か治るべし』

建國の精神は皇室の御祖先並びにそれを輔翼し奉つた我々の祖先が、全心全靈を擧げて確立した雄大、莊嚴なる理想である。即ち「あまつひつぎのみさかえ、あめつちとともにかぎりなけむ」ことであ

つた。我國肇國の頃の状態は記紀の神代の卷に、天地開闢、修理固成の説を以て述べられてある。即ち我々の祖先が、その信仰においても實際においても、まだ神々であつた頃の傳承が述べられてある。皇統は實に斯くの如く悠遠、神嚴の時代に、その由來を發するのである。古事記、日本書紀等の古典は、この尊い、神々しい事實を確認し、皇統の萬世一系、天壤無窮なるべきことを明らかにしたのである。然して我々の祖先は既にこの神代の時より、わが皇室を輔翼し奉り、歴代天皇また世々我が臣民を慈み給はれたのである。この「義は乃ち君臣、情は父子」(雄略天皇御遺詔)の、惟神の道を、何時／＼までも持續するところに、我々日本人の尊貴があり、光榮があり、幸福がある。何となればこれこそ人間の社會生活の最も本然なる形態であるからである。

右に述べたることをいさしく具體的に云へば、我が國が大家族國家であることを意味するのである。日本に於ては君に忠なるはまた親に孝なる所以であり、忠孝一本は即ち我が國民道德の基本である。この基本に立つ限り、我々は常に最も立派なる日本人であり、また最も立派なる日本人は人間としても亦最も立派であるべき筈である。従つて我々は常にこの血につながる、家族的なる關係を保持すべく努力しなければならぬ。何となれば疑ふべくもなく、之が人間生活の最も本然なる姿であるからである。而して皇室は先にも述べたる通り、我々の祖先が神代において、まだ氏族制度を營んでゐた頃、

即ち社會の紐帶が唯血液だけであつた頃の、我々の祖先の氏族の長であらせられた。即ちわが皇室は我々の家族の總本家にましますのである。故に日本においては忠孝が一致し、之が國民道德の基本となるのである。それ故、日本における君民の關係は外國のそれとは全く範疇を異にする。この君民一體・歸一・沒我の關係が我が國體の本質である。この最も理想的なる協同體を常に保持し、それを基礎として發展するのが、我が國家並びに民族の特質、即ち我々の唯一無二の個性である。

日本はかくして本來最も理想的なる、全體主義國家である。我々の全體主義とはまさに斯くの如きを云ふのであり、本來我民族に固有なる昔ながらの關係を、單に近代的な言葉で表現したるに過ぎない。革新とは取りも直さず、現在の日本を斯の如き日本に再建し直さうと云ふことであり、又これを新日本協同體の建設と稱する。然らば現在何故にこれを必要とするのか。その詳細は後述の豫定であるが、要するに、この本來、自然的なる協同體の紐帶、並びにその協同意識が弛緩して來たのであり、故にそれを締め直さんとするのである。

人間結合の最も本質的なるは血液である。血のつながり、これが本來一番強固な且つ自然な結合力であり、この結合力によつて、しつかり繋がれたるとき、人間は最も明朗であり、最も幸福である。即ち、古代人、小兒、家庭がその實例を物語る。我々が萬葉集、古事記等々の古典を読み、當時の我

が祖先達のいかにも明朗、潤達さに讃嘆せざるを得ないのは全くこの爲である。我々の祖先はこの一番自然な、最も人間的な結合力以外の何等の結合力を知らなかつた。彼等は肉身の關係以外の、社會關係を毫末も知らなかつた。といふのは事實左様なものは存在しなかつたからである。

當時、君臣の義は固より儼存してゐたが、それが明らかに現はれたのは、國家、社會生活の内容が複雑化してからのことで、當時は父子の情が君民の絆であつた。我國では兩親がその子女を呼んで「子寶」と稱するが、天皇は國民のことを「大御寶」と呼ばれた。如何に國民を愛撫され、尊重されたかが、之によつて分るのである。天皇によつて斯の如く愛重された國民は、自ら「天の益人」と稱へてゐた。天の益人とは天上より來て、或は天意を奉じて彌榮を行く人と云ふ意味で、天とは即ち最高の理想であり、それを具現せられるのが皇祖皇宗であり、天皇はその御延長にわたらせられる故に、つまり天皇の大御心を奉ずる人といふ意味である。そして天皇の大御心を奉ずる日本國民の數が多くなればなるほど、それだけ最高の理想が地上に實現されて行くと、かく我々の祖先は自負、自尊してゐたのである。

古代の日本人は晴れわたる大空の如く、明るく、朗らかに、且つ雄々しく生きんことを希つた。彼等は常に「天晴れ」なる氣持を失ふまいと心掛けた。文武天皇御即位の宣命に、

明き淨き直き誠の心 清き明き正しき直き心

と、仰せられたる通り、これが我々の祖先達の心であつた。

我々の子供達の幼な心も亦この祖先の心と相通するものがある。彼等はたゞ純眞無垢、まことに無邪氣である。他人に對しては無心であり、たゞ自己の父母に慕ひ寄るところに、一定の關係即ち血縁、更らに換言すれば親子の絆があるだけである。

矛盾と對立に充ちた現代社會に於ては、單に子供のみならず、それをも含めての家庭全體がまた一つのオアシスである。家庭は人間がその生活を體驗する最初の場所だが、我々はまたそれを最後の場所であらしめたい。兼好法師は、「よき人の心のどかに住む家は、さし入る月の色もひときはしみなく」と見ゆるぞかし」と、徒然草で云つてゐるが、現代社會の家庭もまさに斯くの如くであらねばならぬ。

自由主義的、個人主義的現代社會はこの家庭をも破壊するのが一般的傾向であるが、日本に於ては幸にもまだそれは餘り顯著な傾向を示してゐない。國家全體が一大家族を爲す我國においてこれは元より當然であるが、問題はやはりこの點に存する。個々の家庭よりも、むしろ國家全體の家庭的結合が弛んできたのである。故に昔ながらの建國精神を振起、興發し、これをその本然の姿に復歸せしむること、これ即ち革新に外ならない。革新の切要なるとき、必ず建國精神を想起せざるべからざる所

以は正にこの點に存する。かくして我々の祖先は國內の對立、相剋の激化したるとき、この君民一體、國家全一體の結合力の弛緩したるとき、常にこの國體の精神により、事態を日本的に正しく收拾してきたのである。(必ずしも總ての場合に成功したとは云へないが、それに就いては後節に述べる。)

さて、今日我々は古代の日本人の生活に、如何に憧憬の心を寄すると雖も、最早や再び古代人に立歸ることは出来ない。また幼兒の天真爛漫なるを如何に無限に愛すると雖も、これ亦子供に歸ることは不可能である。さりながら、我々は古代日本人に憧れ、また小兒を愛する。何故であるか？そこに我々の理想の姿があるからである。然らば斯の如き理想を我々は如何にして實現すべきであるか？こゝで我々は我が建國精神乃至國體の他の一面に觸れねばならぬ。もとより國體は渾一全一體であり、各種の面があるわけではないが、我々が今まで述べてきた事は、「義は乃ち君臣、情は父子を兼ね」と仰せられた雄略天皇の御遺詔の、謂はゞ、父子の情の方面に就いてあつた。故に次に君臣の義に就いて述べねばならぬ。

天つ日嗣、天壤と共に無窮なること、これ我が建國の理想であり、精神である。大日本帝國は、萬世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて、永遠にこれを統治し給ふこと、これ我が不易の國體である。この我國の建國思想ほど雄大、確固たるは古代何れの諸國の建國思想にも、其比を見ないのである。唯僅

かに秦の始皇帝が「朕を始皇帝として、二世三世より萬世に傳ふべし」と豪語したが、事實は二世を以て亡國してしまつた。これは故ありで、支那においては天命といひ、天が有徳者に命じて君主たらしめ、その君主が徳を失へば、天は命を革めて他の有徳者を君主にするといふ事が、主權に關する支那の根本思想であるからである。かくて支那においては、結局、所謂天の命は地上の權力の強弱如何によつて、判斷するより外に道なく、この弱肉強食の戰爭に勝ちたるものが、ついに主權者として國家を支配するのである。これ即ち、王侯將相何ぞ種あらん哉たる所以である。

これに反し、我國においてはか様な淺ましいことが存しない。我國では、あまりいゝ言葉ではないが、勝てば官軍、敗くれば賊軍と言はれる如く、勝者、敗者何れにしても、それは天皇の治下においての事である。天皇の地位は何時如何なる時にも確固不動であり、たゞ、その下に於て治安を紊したる者のうち、結局勝を制したる者が官に就くといふ意味である。併しこの言葉はいかにも悪い、これでは悪くても勝つたらよいと云ふことになるが、日本の國體はさやうな人間の道に外れたことを許さないものである。

天つ日嗣、天壤と共に無窮なることは、天皇を輔翼し奉る我々臣民が、また萬世に冠絶し、繁榮することを意味するのである。何となれば我々日本人は實に建國創業以來、この偉大なる理想を堅持し、

その實現に努力したるが故に、今日在るを得るのである。皇統が萬世一系なるためには、我々臣民が萬世に獨立し繁榮しなければならぬのである。それ故、萬世一系といふことは、とりも直さず、我々臣民の永遠の發展をも意味するのである。それは何故か。我が國家の中心が萬古不動の礎の上に置かれてゐるからである。如何なる國に於ても、その國が亂れ、民が亡ぶといふのは、その國の結合力が薄弱微力となつたからである。國の中心は即ち主權の所在であり、斯の如き結合力の由つて來る源である。我國においてはこの國の中心が、嚴然、確固不動のところにおかれてあるのである。國の一切の結合力の源が恰も地軸の如く、深奥、堅固なのである。故に日本においては國家の危急に際し、皇室を中心に舉國直ちに一致して國難に當れるのである。まことに天皇は、國家の中心として、人間社會生活の公けの代表者として、萬邦無比の御資格を具有されてゐると、我々は拜するのである。我々は皇統の萬世一系なることが、同時に我々臣民の、一切の福祉の根柢たることを、切實に銘記しなければならぬ。

萬世一系の天皇は實に我々の國家生活、政治生活の理想であり、またもとより現實に左様であらせらるゝ。我々日本國民は、皇室を中心に、皇室の御理想を我が理想と仰ぎ、一切の眞なるもの、善なるもの、並びに美なるもの、即ち全なるもの、神として天皇に仕へ奉るのである。「天神にして皇帝」

たる天皇は即ち現神あきつかみであらせられるのである。然して我々臣民の、斯くの如き赤心は自らまた神の心に通ずるのであり、その限りに於いて、我々もまた神となり得るのである。

たが身にもありとはしらすまどふめり神のかたみの大和魂

これは明治維新の女流動王家、筑前の野村望東尼が、或は平尾の山莊に或は玄海の姫島に、寂寥、困窮と闘ひつゝ、幾多勤王の志士を援護してゐた間に詠んだ歌であつて、「やまとごころ」、「やまとだましい」即ち日本精神自覺の歌である。

我が國家並びに民族の理想は全的なものであり、決して部分的なものではない。故にまた永遠なるものであり、一時的なるものではない。我々は我々の道徳、政治、經濟、社會並びに文化生活の全般において、恒にこの永遠なる理想を追究して生きて來た。斯の如き、我々の態度こそ、我々が過去において我が理想を實現し得た所以であり、今後に於ても、更らにそれを實現しうる所以である。この雄大、壯嚴、至純、至高の道が、我國においては、既に建國の當初において確立、宣言せられてゐるのである。故にこそ、我々は我が建國精神を尊しとするのである。

この事は長くも明治二十三年十月三十日に賜はつた「教育ニ關スル勅語」において拜察できるのである。この勅語は、明治維新以來歐米文物の輸入に急にして、歐化萬能主義となり、我が國體の本義

の漸く没せられんとするを憂へられ、我國の教育の淵源の存するところを明示せられたのである。勅語に、「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられてあるのが、即ち夫れである。我々はこの古今を通じ、中外に施して謬らざる道を體得しなければならぬ。

我國古代の戦争は、「まつろはぬもの」を「まつろはす」ために戦はれた。まつらふとは祭り合ふことを意味し、同一の神を信ずること、即ち同一の理想を奉ずることである。古代日本人は決して私利私慾のために干戈を執らなかつた。彼等がその精銳なる武器、「細戈」を取つて起つたのは、實に同一理想を奉ぜざる者をして、彼等と同一の理想を奉じさせる爲であつた。古代日本人は、その敵に對し、或は「まつろはぬ神」、或は「あらぶる神」と言ひ、之を神と目してゐた。即ち敵の人格を尊重したのであつて、如何なる敵でも一度「まつろひ」さへすれば、みな同胞となし、相提携して、至高の理想實現のために邁進しようと思つた。斯の如き至高、至純の神々ありしたため、古代日本人は宇内に冠絶して勇武であつた。由來、日本においては戦争は、實にこの「まつろはぬもの」を「まつろはす」ために戦はれてきてゐる、現在においても、もとより然りである。

されば、國難迫り、國歩艱難なるとき、我々の祖先達がいつでも、斯の如き國體精神の把握に精進し、そこに革新の原動力を發見し、己れを空しうして、正しい革新を行はんとしたるは極めて理の當

然である。蓋し、斯の如き至公無私の道においてこそ、始めて眞個の社會改造、眞個の國家革新が可能であるからである。日本においては革新の必要なるとき常にこの方法が採用せられた。日本には革命がなく、維新があると云はれる所以であり、現代が昭和維新と稱される所以であり、日本社會の革新の理を、日本歴史に求むべく、他國の歴史に求むべからざる所以である。

最後に、吉田松陰が、非常時局を機縁として、國體を考へることの非なる所以を自肅自戒したのはつまり、對外關係のことが目先にちらつてゐたのでは、眞に國體の眞髓、建國の精神を把握できない、さやうな（或る意味の）私心を以てしては、未だ精神が透徹しないと告白したのである。未曾有の非常時局に際し、皇室を思ひ、國家を思ひ、國民を思ふは、松陰にしても、我々にしても、まさに然るべき處である。たゞ我が建國の精神、我が國體は、我々の斯くの如き態度を、尙ほ遙かに超絶して、宏大無邊なのである。

第四章 我國の特殊性

一

先きに、我々は明治維新を回想し、不充分ながらその革新的意義を明らかにし、次いで斯の如き革新の原動力を我が國史の中に求めた。要するに、それは眞個の自己を知るためであつた。自己の何者たるかを明確にし、それを堅固且つ不動に把握せんがためであつた。現在、我々に肝要なことは、我々が本來日本人であるとの自覺であり、これが眞に自己を知る所以である。單に人間一般としての自覺でなく、自分が日本人といふ人間であるとの自覺がこの際最も切要なのである。何となれば、この日本人としての自覺に弛緩を生じ、それが不明瞭、朦朧となつたところに、現代の思想不安の重大なる原因が存するからである。

明治維新以來、歐米の資本主義が導入せられ、我國に資本主義諸制度が發達し、それに伴ひ個人主義、自由主義の思潮が生成發展してきた事は周知の通りである。これらの思想の功績は種々なる封建

的束縛下にあつた我々の父祖を解放し、自由ならしめ、彼等をして人間的な自我の自覺に到達せしめた點にある。嚴重な、身分的な階級制度下に在つて、全く身動きも出来なかつた日本人を四民平等の原則によつて、その階級的差別觀から解除した點は確かにその功績であつた。斯の如く自由主義、個人主義はかつて一定の進歩的役割をもつてゐたが、明治維新以來七十年を経たる今日においては、それは最早や時代の進歩的意義を有せず、反而時代の進展を妨げる反動的な役割をしか持たなくなつた。特に滿洲事變以來、今次事變に及び、我國の對外活動が益々進展の一路を辿るとき、この自由主義、個人主義の思想は全く百害あつて一利なしと云はねばならない。故に我々はこれを強く排撃するのであるが、その詳細の理由は後述するとして、唯こゝで指摘しておきたい事は、これらの思想は結局、いま、舉國一致、國內結束の一番大切な時に、國民の結合力を弱める因となると云ふことである。この非常時において、國內團結力に不安を感じ、人心の統一に困難を感ずるやうな事態は絶対に生ぜしめてならぬ事は論を俟たない。

更らに我々の確信するところに依れば、日本は、その對外的活動において、歴史的に一大躍進を爲さんとしてゐる。今次事變は我國にとつて曠古の難局であり、その前途眞に豫測し難い。然しながら、我々は進歩の道を歩んでゐる、決して後退してゐるのではない、或る新たなるものを創造しつつある

のだ、また創造しなければならぬといふ、この國民的自信と氣魄とを我々は絶対に失つてはならぬのである。更らに肝要なことは、我々は日本人としての人間においてこれを敢行しつゝあるといふことである。我々は本來決して排外的でない、我が國の歴史の事實はそれを物語つてゐるが、それは兎も角、我々にいま必要なのは人間概念一般ではなく、人間日本人の概念である。もとより我々日本人と雖も、人間一般に關する規制を離脱し得るものではないが、地上何れの人間をとつて見ても必ず何れかの人種、民族に屬する人間であり、加ふるに我々はいま國家全體として、民族全體として、躍進し、飛躍し、發展せんとするのであり、またこの道を通つて、我々個々も亦、より高度な、より卓越せる人間に發展、轉化せんとするのであり、この際我々は飽くまで日本人的自覺を明確化し、強化することを必要とするのである。

共產主義はもとより云ふまでもなく、自由主義、個人主義は我々のこの歴史的、具體的實踐の意義を把握することが出来ない。日本人がこの方向において、眞に東洋平和を確立し、東西文明を融和、綜合し、より高度なる新文化を創造し、かくしてよく世界平和並びに世界文化の發展に貢献し得る所以に想倒し得ないのである。されば我々はこれらの無用有害思想を斷乎として排撃することが今日必要であり、更らに進んでは、これらの思想を克服し、征服すること、即ち若し少しでも取るべき處が

あれば、之を採用咀嚼消化し、以て我々は、更らに前進をして、より高度の新生活體系、新文化形態をこの日本の天地に創造しなければならぬ。

二

そこで、我々はいましばらく日本の過去の歴史に想ひを潜め、先人の成敗の跡を顧りみ、日本が來るべき革新に蹉跌せざらんことを念願としなければならぬ。

元來、日本の政治には不變なる部面と可變なる部面とがある。國家の樞軸たる國體は永世不變であり、萬古不易であるが、此の國體に則したる現實の國民生活を生成發展せしむる爲の手段、運営に關する部面は、時代と共に變化し進歩してゐる。如何なる政變が惹起されやうとも、國家の中心は常に確固不動である。そして何時の時代の政治的轉換期においても、先づ萬世一系の國體の再認識から出發し、それを起點として、來るべき新時代の新政が問題にされる。大化の改新も明治の維新もさうであつた。この意味から云へば、現代の政治もやはり同じ軌道を進みつゝあるやうに見える。そして各時代の新政には、夫々その時代に對應する、新政治機構並びに新政策が採用されてきた。斯の如く日本の政治は常に不斷の發展性をもち、何時の時代にも、その時代に即應した、進歩した政治が行はれ

て來てゐるのである。

これに關聯して茲に述べねばならぬ事は、日本における偉大なる革新時代には、常に屢々外國の政治、法制、諸制度が參考されたことである。即ち日本の政治は外國の政治形態、その運用方法でも、その長所とする處を採用するに吝かでなかつた。例へば大化の改新、並びにそれに續く大寶時代には、隨唐の制度が採用され、明治維新の時は歐米の政治制度が採用されたことは周知の通りである。帝國憲法の制定にはプロイセンの憲法その他が參考となり、わが議會制度及び政黨は、アングロサクソン型が加味されてゐる。

大化改新は中大兄皇子即ち後の天智天皇、及び藤原鎌足の手によつて斷行されたが、この改革の基礎を築き、その改革の根本方針を定めたのは實に聖德太子であつた。改革は太子攝政の後五十年にして實行され、この改革を實施するに必要な法令としての、近江令、大寶の律令、更らに養老の修正等々の編纂制定は、それより、更らに約半世期の期間を要したのである。従つてこの改革の實行が相當に困難であつた事が察せられるのであるが、而も我々の祖先は、その理想實現の爲に實に不撓不屈の努力を續けたのである。

改革の根本的意義は、當時既に頽廢の極に達してゐた氏族制度の機構を清算し、新たに中央集權的な郡縣制度の國家を樹立するに在つた。當時人口は漸く増加し、その移動があり、從來の如き純粹なる血族團體的生活を營み得なくなり、反而地域團體の方が多くの意義を有するやうになつてゐた。更らに支那、朝鮮より輸入されたる諸種の物質的文化は、氏族の經濟生活の内容の變化を必然化し、加ふるに諸氏族は互ひにその勢力を争ひ相ついで滅び、かくして氏族制度はまさに崩壞の過程にあり、朝廷の中央權力によつて最後の斷案を下さるべき状態にあつたのである。

然しながらこの改革を促進せる根本原因として、當時重大なる思想界の動搖があつた。即ち儒教によつて代表せらるゝ支那文化、及び佛教を以て代表せられる印度文化、この兩つの外來思想によつて惹起された我が國民思想の動搖である。我國は神功皇后以來盛んに三韓文化と接觸し、應仁天皇以來朝鮮半島を経て傳來せる、儒教並びに支那文化を熱心に攝取し、欽明天皇の時に、印度文化の精華としての佛教が、同じく朝鮮を経て我國へ輸入された。これは儒教傳來後三百年を経てゐる。我々の祖先はこの間實に重大なる試練に際會したのであるが、前にも述べた通り、我が偉大なる民族精神はよくこの試練に堪へ、これを克服することができた。

古代日本人の宗教的生活の統一的中心は天祖に對する信仰であつた。天照大神の御子孫である皇室の祖神に率ゐられ、この大和島根を經營すべく天上よりお伴してきた神々の子孫であるといふ信仰が、

他の一切の信仰に超絶して絶対であつた。我々の先祖が、天祖を以て天上の神々を統率して日本に天降り、國神を歸服し、諸神を統一し給へる神であるとする根本的信仰は、我國の政治の基礎に「統一したる神の世界」の觀念があるといふことを表はしてゐる。我々の祖先は日本を以て神國と信じてゐた。彼等が其威を韓半島に行つてゐたときは、韓半島の者も日本を以て神國となし尊敬してゐた。かくしてかゝる信仰は内治、外交の根柢でもあり、更らにそれは、我々の先祖達の法律でもあり、道徳でもあつた。要するに古代日本人の精神生活の中心はこれであつた。

外來文明の傳來がかゝる素朴、純一なる我々の祖先達の精神生活に甚大なる影響を與へたゞらうことは察するに餘りがある。

先づ儒教は道徳と政治とを兼ね教へる修身治人の學として、一面においては人の道義的精神を闡明し、他面においてはこの鮮明に把握せられたる道念により、不斷に社會の組織、制度を改善すべきことを説く。而して儒教の、天が有罪を討ち、有徳に命じて主權者たらしめると教へる、有徳作王、禪讓放伐の説は、前述の我國固有の觀念とは相容れないものであり、儒教がよく咀嚼され、普及された今日から云へば一寸不思議であるが、當時としては一種の危険思想であつた。更らに超國家的な觀念を包藏する佛教も當時としては異常な新思想文物であり、これには政治問題がまづはり、新舊兩派の

對立抗爭が起り、周知の通り崇佛進歩派の勝となり、我國はすでに天神地祇があるのに、今更蕃土の神を拜せば、國神の御怒り現前なるべしと云つた排佛派の敗北となつた。儒教、佛教ともに、我國當時の族制思想、祖先崇拜と相容れず、從來の團體思想に反して個人思想を喚起するものである。

けれども、儒教、佛教及びそれに隨伴して傳來された諸種の大陸文化は、當時我々の祖先の持てる文化とは格段の相違があり、それは彼等にとつて非常なる魅力、感激であつた。朝廷をはじめ諸人は争つてこれの攝取、研究に努力した。例へば、その傳來文化が如何に我國の文化に貢獻したかを示す一例として、當時の藝術的遺物に残る、その取材の範圍を見るに、印度の佛像は云ふまでもなく、西域諸國の風俗、バビロン神話の神馬、獅子、象、駱駝、椰子、鳳梨等々に及び、我々をして、その意外に豊富、博大なるに一驚を喫せしむるのである。

聖徳太子こそはこの新文明を提げて、來るべき日本の新時代を開拓すべき使命を帯びて登場せられた史上稀に見る偉傑であつた。斯くして太子は動搖、紛亂せる當時の國家問題を解決すべき、確乎たる方針を確立された。即ち太子は、神道を以て政治の根本義とし、國民の道徳的生活を儒教によつて向上せしめ、佛教によつて宗教的生活の醇化を圖らんとした。舊き傳統を失はず、而かも新文化を排斥せず、之を抱擁し、之を綜合、歸一し、より高度の國民生活の創造への道は、かくして太子によつ

て展開され始めた。

太子の十七條憲法は色々な意味において革新的である。例へば特に、その第十二條は當時の社會、政治組織を根本的に否認せる劃期的意義を有つものである。即ちそれまで日本の皇室は諸氏族の最高の長として諸族を統治してゐられたが、直接に全國の人民を統治されたものではなかつた。天下の人民が直接に仕へたのは、その族長であつて、その族長は恣に人民に課税し、大半は自己に收め、餘祐があれば、それを朝廷に進めるに過ぎなかつた。この時において太子は、國に二君なく、民に兩主なしと昭示して君臣の大義を明らかにせられ、臣民は人民より租税を徴する權利なしと斷ぜられたのであるから、まさに従來の氏族制度の根本を突いた立言であつた。

聖徳太子の斯の如き革新思想は、中大兄皇子の出現によつて大化改新として偉大なる開花を見た。即ちこゝに始めて我國に、眞に國家としての組織が與へられたのである。この改革は文字通り大化であつた。氏族制度の時代には天皇は土地人民を間接に統治せられたに過ぎなかつたが、改新に於て、全國の土地は國有となり、部曲は廢止されて、全人民が國家の公民となつた。更らに國政の參與について、氏の上と氏人との間に差がなくなり、かくして従來の氏族制度による行政組織は改められて、中央に八省、百官、地方に國司郡司を置く所謂郡縣制度となつた。紛亂を極めた身分的秩序は明確化

され、公民には班田收授の法が實施された。要するに大化革新の重要な眼目は土地を一切國有とし、之を一定の制度の下に、國民に分配し、國民間の富の分配を平均化し、その農耕によつて國民の生活が保障され、他方これより國家に必要な經費を得るといふ點であつた。この結果は社會上政治上における氏族の重要さの喪失であつた。而して斯の如き改革が、僅か蘇我入鹿一人の血を流し、蝦夷を自殺せしめたのみで成功した事は、誠に偉大なる成功と云はねばならぬ。

大化改新は支那の隋唐制度を思ひ切つて參酌し、王道思想をも採り入れた極めて斬新な政治革新であつたが、それは制度文物の上の事で、その根本精神においては全く日本的であり、建國精神への復歸であり、蘇我氏によつて傷はれんとした國體の本義を、徹底的に復古したのである。即ち大化元年の詔には、

當に上古の聖王の跡に遵ひて、天下を治むべし

と宣はせられ、また同三年四月の詔には、

惟神も我が子治さむと故寄せせき。是を以て天地の初より君と臨す國なり。……是の故に今は隨在天神も治平くべきの運に屬りて、斯等を語らしめて、國を治め民を治むること、是を先にし是を後にす。今日明日、次ぎて續きて詔せむ

と仰せられ、惟神肇國の大義により、現御神におはす天皇を中心として政治の行はるべき、復古の精神が明確に示されてあるのである。

即ち大化の革新は明治維新と同様に、一面においては新來の異邦文明の採用による大改造であり、他面においては建國精神への復歸であつた。斯くの如く復古維新の精神によつて政治改革が行はれ、天業が恢弘せられゆくところに、我が國の革新の根本的意義が存するのである。更らに前にも述べたる通り、この時代において神道、儒教、佛教の三思想は相互ひに調和し、綜合され、より昂揚せられた形態において、國民思想の内容を豊富、多彩ならしめ、國民の生活活動はこれによつて生新、潑漶となり、國家は飛躍的に躍進し、かくて燦爛たる奈良朝文化の華がやがて、壯麗、雄大に満開することになる。斯の如く、あらゆる外來思想を大膽に受容し、而かもこれをよく咀嚼、消化し、即ち日本的に醇化し、以てこれに正しい、且つ新らしい方向を與へ、國家の進展に寄與せしむる點も亦、我が民族の特色ある傾向の一つである。

大化の革新が隨唐制の單なる模倣であるとの説を爲す者があるが、それは全く當つてゐない。革新が隨唐政治に其範を採つたことは勿論であるが、向ふの制度をその儘日本に當てはめたのではない。當時支那の政治制度は支那人自身にとつてさへ、理解に困難であらうと思はれる程、錯雜、複綜を極

めてゐた。然るに我々の祖先は之を極めて短時日の間に理解し、咀嚼し、八省百官の制度に纏め上げ、以て當時の切要たる政治的改革を解決したのである。この鮮かなる手腕は決して單純なる模倣者のよく爲し得るところでないのである。

三

鎌倉幕府の創立は大化革新、明治維新と並んで日本歴史における重大なる革新期の一つである。何となれば、これより以後、鎌倉時代、室町時代(後半は戰國時代)、安土桃山時代を経て、徳川時代に至り、その末期に明治維新の起るまで、約七百年間に亘つて我國を支配した、所謂封建制度の端緒が茲に開かれたからである。かくの如く政權が武門に移つたことは、我國の政治においては一つの變態であつた。然しこれは誠に止むなき必然に迫られた政治改革であり、一概に頼朝を責めるわけにはゆかない。周知の通り平安時代に入り、大化革新の口分田制は漸次頽廢し、私有地の増大、大土所有制たる庄園が勃興してきた。庄園は不輸不入の土地であり、國家に租税を收めるを要しないから、ために國家の財政的基礎は動搖し、従つてその政治的權力も薄弱となつた。朝廷は例へば後三條天皇を始め屢々庄園整理を企てられたが、權門の勢力が強固であり、如何ともなし得ず、徒らに地方國司が私

利を圖つたにすぎなかつた。庄園は益々増加し、それにつれて地方に新たに豪族が起つてきた。かくして平安朝中期以後、中央政府は有名無實となり、何等の實力を有せず、地方には浮逃の徒が充滿し、群盜が蜂起し、更らに豪族、領主、國司等の間の衝突が絶えなかつた。かくの如き無政府、無警察の情勢下において、大小の地方豪族の必要としたのは武力であり、武力によつて自家防衛を爲すことであつた。これ即ち武士の起源であり、強大なる武士は頭領として群れ武士を率ゐ、相互に恩給・奉公の關係に基づき主従となつた。

武士は最初中央貴族を本所、領家と仰ぎ、その家禮となつて甘んじてゐたが、地方に於ては事實上拔くべからざる強固な地盤を築いて行つた。かくして勢力ある武士は多くの家子・郎黨を養ひ、その武力を強大ならしめ、平安朝末期には、彼等の棟梁としての源平二氏の地位が確立した。やがて保元、平治の亂が起り、これが武士に中央權力獲得の機會を與へ、先づ平氏がそれを獲得したが、平氏の政治は舊平安貴族の攝關政治の方法であり、加ふるに「平家に非ざるものは人にして人に非ず」といふが如き榮華は、永く天下の人心を得る所以でなかつた。

平氏の手によつては未だ國家は安定し得なかつたのである。かくてこの時局を收拾したのが、即ち源氏の棟梁頼朝であつた。頼朝は平家殘黨並びに義經追討を名として、各地に兵を進め、日本の政治

の版圖を著るしく擴大し、これを統一したのである。

源頼朝は、極端なる勤王論者によつて皇室に對し罪あるが如くに非難され、日本國土を私せるものゝ如く、かつて云はれたが、それは正しい見解ではあるまい。頼朝の子、實朝が詠じた「山は裂け海はあせなむ世なりとも、君に二ごゝろ我あらめやも」は、同時にまたその父の心でもあつたに違ひない。彼はその部下に對し、常に尊皇の大義を忘れてはならぬと訓戒してゐた。頼朝はその心において皇室に不忠ではなかつた。史上稀に見る誠忠無二の北畠親房が、その神皇正統記において、「頼朝は更に一身の力にて平氏の亂を平げ、二十餘年の御憤りをやすめ奉りき。昔神武の御時に宇麻志麻手命の中外をしづめ、皇極の御宇に大職冠蘇我の一門を亡ぼして、皇家を全くせしより後には、類なき程の功勳にや」と云つてゐる通り、頼朝の安民治國の功績は大きい。頼朝の出現によつて、日本の國民生活全體は全く活を容れられた如く、生氣溢るゝ新面目を發揮するに至つた。

例へば平安朝時代の頽廢的道德は質朴、剛健、清新なる武士道の發展によつて一新された。武士道は武將及び代々これに仕へたる武人との間の主従關係に端を發し、更らに武人相互の間に發展せる道德であつて、主君に對する純一無垢の忠誠、凜然として自己の體面を保つ自尊とを、その内容とする道德である。これは後に佛教と儒教とによつて夫々その内容を豊富にし、體系化し、以後七百年の永

きに亘つて日本國民の道德生活の中心生命となつた。

鎌倉時代にはまた婦道も新生面を開いた。平安朝文學は戀愛を人生の最大關心事としてゐたが、鎌倉文學に現はれた戀愛は、義理を描き、より一層偉大なるものゝ爲に犠牲となれる戀愛であつた。武士道の頼朝におけるが如く、婦道はその妻政子に負ふところが大であつた。平安朝の婦人は戀愛に陶醉することをその本願としてゐた。然るに政子に於ては、婦人は唯一の夫に仕ゆべきもの、正しき家庭を作つて其の支配者たるべきものとされた。加ふるに此頃より夫が妻の家に通ふ風習漸く衰れ、かくして正しい婦人道も亦發達した。更らに政治、道德の革新が必然であつた如く、宗教改革の氣運も熟してゐた。平安朝末期の加持祈禱の俗世宗教に代つて、新興、清新なる宗教が起つてきた。この宗教改革の偉人は先づ法然上人、次いで親鸞上人、それから榮西、道元の禪宗が新なる生命をもつて行はれ出した。他力本願の念佛は庶民の宗教、簡潔、強力なる禪宗は武士の宗教となつた。最後に日蓮が現はれ、熱烈清新の氣を吐いた。

さて頼朝は皇室に對して深く尊崇の念を捧げると共に、天下の治安が自己の双肩にかゝれることを自覺してゐた。彼は腐敗墮落せる京都の政治が到底、天下の秩序を保つ所以に非ざることを確認し、新たに別個の制度を東國鎌倉に創設し、新銳の氣を以て新しい政治を行つた。かくして頼朝はその

政治を圓滿に行はんがために、朝廷の重要な朝官の進退に關し、幕府より意見を奏することにした。こゝに始めて朝廷と武門の幕府との此種の關係が生ずるのであるが、この點に於て、同じく封建制度でも日本の封建制度は歐洲の封建制度とは異なるのである。彼に發達せる騎士道と我が武士道との差もこゝに起因してゐる。彼の君主は封建諸侯中のある者が強大となり、逆にその地位に上昇したのであり、我に於ては如何に兵馬の大權を掌握しても、それは朝廷の征夷大將軍であつて、君主ではない。國家の中心は些かも動搖しない處に、我が國の尊い根本的特質があるのである。戰國末期に至つて、諸侯はその封土を中心とする私闘に没頭し、畏くも皇室の衰微となつたが、皇室に對する國民的信仰は依然不動であり、大戦亂が全國統一への終極に近づくにつれて、天下を取らんとする多少政略的な處はあつたと云へ、諸侯の尊皇心は昂まり、大内、毛利、織田氏等、勤王の志に厚く、豊臣秀吉に至つて、その極點に達したのである。

これに關してこゝに北條泰時について一言しなければならぬ。先に述べたる通り、鎌倉幕府の京都朝廷に對する方針は元より京方の欣ばれざるところであつた。英明なる御鳥羽上皇はこゝに氣概ある公卿と北條氏に不平なる武士とを糾合し、幕府顛覆の計畫を講じ給ふことゝなつた。事は空しく水泡に歸し、反つて北條氏の權力確立となつて終つた。而して北條氏がこの役において、三上皇を遠島に

遷し奉りし事は断じて許し難いものであり、日本國民の光榮ある尊皇心を甚だしく傷けたのであり、やがて後醍醐天皇の御時に遂に滅亡したのはもとより當然であつた。然し斯の如き惡逆無道を敢てせるに拘らず、北條氏は約百年に亘りて天下を保つことができた。その理由の一つは民政をよくしたからであつた。更らに義時、泰時が非常な大惡を犯すに至つたのも、その動機は人民安堵の爲であつたであらうと史家は云つてゐる。更らに泰時は決して心の底まで不忠ではなかつた。彼は軍を率ゐて西上せんとするや、赤心を神前に披瀝し、此度の事若し神慮に叶はずんば、我れ京都に達せざる以前に、先づ我が命を奪ひ給へと祈念して出發してゐる。そしてまた西上の途中から、たゞ一騎引返し、父義時の處へ歸り、「若しも途中において、錦の御旗を翻へして鳳輦出御しました時には如何すべきや」と尋ねたところ、義時答へて、「その事なり、まさに君の御輿に向ひて弓を引くことはいかゞあらむ、さばかりの時は、兜をぬぎ、弓のつるをきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし、さはあらで、君は都におはしましたしながら、軍兵をたまはせば、命をすて、千人になるまでも戦ふべし」といつた事は「増鏡」に出てゐる有名な話である。とに角泰時は政治家としても、人格者としても、立派な武士であつた。勤王北畠親房の左の言が之を證明して餘りがある。曰く、「おほかた泰時心正しく政すなほにして、人をはごくみ物におごらず、公家の御事を多くし、本所のわづらひをとゞ

めしかば、風の前に塵なくして、天の下則ちしづまりき」と。

鎌倉幕府は先づその御家人を地頭として各庄園に配置したが、これは庄園の舊來の領主に對し大きな脅威であつた。地頭の最も重要な任務は、庄園の年貢・所當を徴收し、これを本所、領家又はその代理人に引渡すことであつた。が併しこの引渡しは遲滞し勝ちであつた。更らに幕府が任命した守護は、從前の諸國の檢非違使・押領使、總追捕使の變形で、その任務は警備で、大番催促、謀反人及び殺害人の三ヶ條を務めとし、また軍役のある時には、國中の地頭、御家人を催ほし、國民を夫役に充て、これを率ゐて事に従つた。鎌倉幕府の初期にはその完全なる支配圏は九ヶ國の所謂分國が主で、京都を中心とする三十七ヶ國の公田、權門の庄園は幕府の完全な支配の外であつた。承久亂後全國三千餘ヶ所の公田・庄園を沒收し、之に新補地頭(前記のを本補地頭と稱す)を補し、守護は國司を兼ね、これより守護・地頭の制は全國に及び、その大半は幕府の支配するところとなつた。かくして守護地頭は次第にその權力を増大し、庄園崩壊し、大名制に基く典型的封建社會の確立して行くのが、この中世期の歴史的必然であつた。

建武の中興は實に日本歴史の中軸をなすものである。「今の例は昔の新儀なり、朕の新儀は後世の例たるべし」と、宣はせられた後醍醐天皇はまことに革新に相應しき英邁なる天子であらせられた。元

弘三年五月、新田義貞稻村ヶ崎を迂廻して鎌倉を突き、北條氏滅亡、頼朝以來百五十餘年にして幕府は倒れ、承久の兵亂以來御歴代の御宿志であつた朝權恢宏の偉業は成就された。愈々中興の建設が開始せられる。その理想は頼朝の創設した封建制度を覆へし、天皇親政政治の實現であり、國體の正しき姿への復古であつた。改革は極めて徹底的であり、中央政府に、記録所、雜訴決斷所、侍所、武者所等を置き、特に公武の功臣を以て國守に任じ、それをして頼朝以來の守護、地頭を統制させようとしたもので、若しこの計畫が完全に遂行されたら、その結果はすばらしいものであつた。だが、北畠親房が神皇正統記に、「君は萬姓の主にてましませば、限りある地を以て限りなき人に分たせ給はんことは、推してはかり奉るべし。若し一國づゝを望まば、六十六人にて塞がりなん。一郡づゝといふも日本は五百九十四郡こそあれ。五百九十四人喜ぶも千萬の人は喜ばじ」と云へる如く、論功行賞に對する諸將の不平、之を抑ゆる武力が朝廷に無かりし事に依り、回天の大業は空しく挫折した。

黑板勝美博士が、中興政治の失敗を誹謗するものあるに對し、「余は天皇の中興政治が遂に失敗に歸したることその事が天皇の偉大なる御人格に由るのであり、我が神聖なる國體そのものを御體現になつたのであつて、今日我々日本國民が我が神聖なる國體の正しい姿を見ることの出来るに至つた所以は、實に天皇の中興政治が失敗に歸した爲めと申して差支ないと思ふ」と云つてゐられるのは、まことに至

言と云ふべきである。更らに我々は新井白石がその續史餘論に、楠木正成を評せる言葉を引用しよう。即ち曰く、「功臣においては正成を以て第一とすべし。其教は、はじめ笠置あちて天子西州に蒙塵ありし時にあたりて、六十六州のうち、たゞ此一人其節を改めずして、わづかの小勢を以て東國の大軍と戦ふ事年を経しほどに、武家に背く輩も彼是出來しなり、此人かく王家の御爲に勳勞なからましかば、新田、足利、赤松等の人々も其志を立る事叶ふべからず」と。正成はまことに至誠純忠の士であつた。延元元年三月、朝敵尊氏西海より東上するに對し、正成は再び天皇に叡山の行幸を請ひ、敵を京都に誘致して糧道を絶つ奇策を進めたが、公卿の間に容れられなかつた。正成の獻策は戰略上正しかつた。しかし、彼は即ち子正行と櫻井驛に訣別し、手兵僅か七百を率ゐ、進んで淡川に陣し、遂に戦死したのである。

建武中興の大理想は日本を眞に日本たらしめんとするにあつた。しかも時利あらず、その理想の大旆は遂に倒れた。この一度倒されたる大旆を、再び中天高く掲げんとしたるもの、これ即ち明治維新の志士である。齡二十六歳、身を挺して回天の偉業に口火を切つた高杉東行は、その直面する時機を洞察して、「是れ此時、日本の日本たらんと欲する日也」と喝破した。

明治維新は何よりも先づ、王政を復古し、天皇御親政を確立し、次いで五箇條の御誓文に明示せら

れたるが如く、開國進取の政策と萬機公論に決する民意暢達の道を開いた。王政復古の御精神は慶應三年十二月九日に發せられた王政復古の大號令に明示されてゐる。即ち、その中に、

王政復古國威挽回ノ御基被_レ爲_レ立候間自今攝關幕府等廢絶即今先假ニ總裁議定參與之三職被_レ置萬機可_レ被_レ爲_レ行諸事 神武創業之始ニ原キ精神武辨堂上地下之無_レ別至當之公議ヲ竭シ天下ト休戚ヲ同ク可_レ被_レ遊 叡慮ニ付各勉勵舊來驕惰之汚習ヲ洗ヒ盡忠報國之誠ヲ以テ可_レ致_レ奉公_レ候事とあり、神武天皇の肇基に原づき、庶政を一新すべきことを宣揚し給うたのである。更らに明治元年三月には五箇條の御誓文が宣示せられたのである。

五箇條の誓文

- 一 廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
- 一 官武一途庶民ニ至ル迄各共志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
- 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
- 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

而して、同時に賜はつた宸翰に、

朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ 列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ス親ラ四方經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置ン事ヲ欲スと仰せられてあるを拜誦するとき、天皇御親ら、玉體を勞し、宸襟を惱ませられて、艱難辛苦の先頭に立ち給ひ、以て上は列祖の神靈に應へ、外は萬國に國威を輝かさんとし給うた深い叡慮と強い御決心とを拜する。かくて國民の須臾も忘るべからざるは、實にこの皇基を振起し奉ることより外にはないのである。

以上、我々は簡單ながら、我國における、政治革新の主要なるものについて概観を試みた。その故は、云ふまでもなくこゝに我國の革新運動の本質が存するからである。

憶ふに日本國民の天皇に對し奉る信念は絶對的である。日本國家が萬世一系の國體を中心にして不可侵の權威を保有するといふことは、實に我々の傳統的精神であり、國民的信仰である。我が國家はまことに萬邦無比であり、我々の如く、立派な、權威ある國家を有つ國民は世界何處にも存在しない。何れの國家も何らかの權威を保持せざるはないが、それには程度があり、差異がある。かゝる意味で我が國家は實に世界最高の權威を具有する國家である。

それは理念においてさうであるばかりでなく、現實においてもさうである。我が國家が古來外國か

ら侵されたことのないことは云ふまでもない。更らに我國においては、内において、無政府状態を現出したことはない。これは歐米諸國との比較においても言ひうる事實である。古代において、英、佛、獨の諸國よりも先きに、權威ある皇朝政治が實現されてゐたことは既述の如くであるが、歐洲の中世一千年は暗黒時代と稱せられ、多くの國は政治の中心を失つた多元政治、分權政治に悩まされたに反し、日本には戰國時代の一百年を除いてはこれに相當する時期は見當らない。而もこの戰國時代においても、戰國領主治下の民衆はむしろ平和であつた。實戰に携はつたのは武士だけで、領主は天下に覇を唱する必要上、國內の治政には大いに意を用ひたからである。かくの如きは何れの國民よりも我が國民が政治的統制と秩序を重んずるといふ一證であり、この意味で、日本民族は政治的民族であると言ふことができる。

従つて日本の歴史においては、概して、國家の役割が大きい。古代におけるわが産業及び文化の著しい發達には、皇朝の政治的指導が與つて力あることは多くの研究者の等しく認識する所である。降つて自由主義が支配した明治時代にも、我國では産業上には高度の保護政策が採用せられ、教育その他の文化施設においても、政治の役割を輕視し得ないのである。しかもそれは、絶對主義國家の如くに國民を隸民視するのではなく、國家の權威を重んずると同時に、それに相當する職能、任務を果すべきを強調し、その政治機構には、何等かの形で國民代表の政治的參與を認めることを意味する。

三

日本國家、日本民族の特殊性は、簡潔に表現すれば、一または一體であるといふことである。或る外國人が横濱の埠頭に近づいたとき、雲間に、くつきり聳ゆる秀麗なる富士を眺めて、これだ、これが日本だ、と叫んださうであるが、まことにこの不二こそはこよなき日本の象徴である。日本の純粹性、統一性、獨自性、連綿性、綜合性等々、これら總ては、この一に簡約される諸現象の夫々の表現である。我が尊嚴なる國體の萬邦無比、皇統連綿たるは申すも畏し、實はこの國體にこそ、我が國家並びに民族の唯一、無二の特性は、はつきりと現はれてゐるのである。

所謂和の精神といふのはつまり日本人の綜合性を意味する。和の力の現れたのを、「むすび」と稱するが、「むすび」とは即ち創造である。日本の綜合が發展的なる綜合であることが、この古典的言葉に既に看取されるのである。神と人との和、人と自然との和、人と人との和等々、日本においてはこの和の精神がよく發揮されてゐる。聖徳太子が憲法十七條に、

和を以て貴しとなし、忤まかふることなきを宗むねと爲す。人皆黨有たがひり、亦達たれる者少し。是を以て或は君

父に順はずして、乍隣里に違ふ。然れども上和ぎ下陸びて、事を論はむに諸ひぬるときには、則ち事理自らに通ず。何事か成らざらむ

と示し給はれたのは、この和の精神である。

天皇の聖徳と國民の臣節とは互に融合して、美しい和を爲してゐる。この事は古來我國では君臣一體なりと云はれてゐる。仁徳天皇が、

百姓貧しきは、則ち朕が貧しきなり、百姓富めるは則ち朕が富めるなり

と仰せられ、また蒙古襲來に際して、龜山上皇が宸筆の御願文を伊勢神宮に獻げて、

朕が身をもつて國難にかへん

と御祈念遊ばされ、また今上天皇陛下御即位式の勅語には、

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ治ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ

と仰せられてある。こゝに君民體を一にして、その苦樂を共にし給ふ尊い和の御精神の顯現を拜するのである。

「君のため世のため何か惜しからむ捨ててかひある命なりせば」といふ歌の心は、臣民が天皇に一身を捧げ奉る和の精神の極致を示してゐるのである。

即ち我々日本人に發達せる特質は、この和の精神即ち別言すれば綜合性である。これは後述の外來文化の採用の態様においても現はれることであるが、例へば日本の政治的革新期の例をとつて見よう。

日本では常に社會内の分化、對立、相剋を克服して、より高い綜合、統一が行はれてゐる。即ち革命によらず、改革によつて、新舊要素の再整理、社會の上層と下層との再編成がなされて、前進するのである。大化改新がさうであるし、戰國時代の結末においても、明治維新の當時においても、社會的諸勢力の再編成によつて、高度の綜合を生んだことは否定し得ない事實である。明治維新の際に、青年公卿及び下級武士が新興諸勢力と共に、大政維新の事實に參劃したのはこの好適例であらう。これに關聯して興味あることは日本の政治がつねに二つの對立に分れるといふ傾向のあることで、例へば、蘇我、物部の對立、源平の對立、豐臣、徳川の對立、京都、江戸の對立、現在の二大政黨、二大資本閥の對立も亦その一例であらう。これは要するに、一なるものゝ分裂の最少の限度であつて、これ以上は分裂しないことを意味し、それはやがて一に歸すべき傾向をその内部に包藏し、反而一の力の強力なることを反證してゐるのである。

次に、我々の國家は周知の通り、未だ曾つて外國から國土を蹂躪せられたことがない。刀伊の入寇にも、蒙古の襲來にも、幕末における歐米諸國の來航の危機に際しても、未だ我々は侵されたことはない。寧ろ、近くは朝鮮事件、臺灣事件、日清、日露戦争、古くは神功皇后の三韓征伐、秀吉の東亞經略等々、反而積極的に大陸に進出してゐる。こゝに我々の獨自性は極めて明瞭である。

また我が日本民族が極めて高度の純粹性を保持せることは學者の意見の一致するところである。即ち日本民族は天孫種族を中心とし、これに出雲族、アイヌ族等が混入、融和したものであり、建國後に於て歸化朝鮮人、支那人の要素を加へたが、天孫種族が壓倒的に優勢であり、且つ地理的環境が大陸を離れたる島國であり、而かもその面積小ならず、民族としての發達を遂げしむるに不足せざる關係上、之を郷土として成立せる我が民族は、外部より異民族の大量的侵入によりて攪亂せらるゝことなく、また國土外へ大量的に移住して動搖したることなく、二千年に亘る長年月の間民族的生存を安定せしめてゐた。また民族内部において種族的對抗の影響が残存してゐないこと並びに我が民族の郷土を爲す地理的環境が隔離的で、異民族との交流が比較的少かつた事に基づき、民族の生存及びその傳統とが、長い間比較的平穩に持續せられたことによつて我々は民族として高度の純粹性を保有してゐるのである。

この民族の純粹性はまたその獨自性を意味する。日本民族が異種の民族的、並びに文化的要素を、その時々々の反撥、摩擦はあるが、大局においてよく攝取、消化し、之れを自己の發展に貢獻せしめ且その固有の傳統を持續せしめ得た所以は、實にこの獨自性、純粹性が高かつたからである。

日本民族は建國以來、血族的にも文化的にも、將又國家的にも一體の意識をもつて來た。しばらく今日の臺灣と朝鮮とを除けば、日本人は血族國民、文化國民、國家國民といふ、多くの國民には一寸見られない、三つのものを全部有つてゐるのである。かくして我々は誠に堅固、緊密なる民族的、國家的結合體を形成してゐる。これは我々にとつて非常なる強みでもあり、また誇りでもある。この有機的統一を可能ならしめるものは何か。それは即ち我々の血管であり、その中に流れてゐる我々の血である。その血は、太古、まだ神々の生活をしてゐた我々の祖先が持つてゐたその血、それがなほ脈々と我々の血管の中を流れてゐるのである。我々が日本を一大家族國家と云ふのは此の故である。日本精神の實體は實にこの血にある。この血の共通こそは、實に日本人の協同精神、協同生活の核心である。

日本歴史の發展は必ずしも獨自性、特殊性のみではなく、世界史とも充分聯關のある普遍性を有つてゐるし、その例證は幾らでも擧げられるが、然し乍ら、叙上の一點だけは全く我々獨自のものである。

り、世界何れの國家民族においても、我國における程、これ程純一無垢に現はれてゐる處は外にはない。まさに、尊ぶべき、誇るべき我々の傳統である。而かもそれは我々の祖先が幾千年の永きに亘つて、あらゆる有利な外的條件の天佑をも受けながら、護持し、堅持してきたものである。斯の如き悠遠、無窮の傳統は、歴史の如何なる發展段階に於ても、持續さるべきであり、日本精神の精華は實にこの點に存するのである。

天皇は、我が國家の元首にましますと共に、また我が民族の最高の長であらせられる。「義は君臣たり、情は父子たり」とは、天皇の大御心の程であるが、それはまた恐れ多き事ながら我々臣民の生活の規範を示されたるものと拜すべきである。日本の日本たる所以は實にこの點に存するのである。詳言すれば、元首と國民との間の關係が、外國に於けるが如く、權力服従の關係ではなく、親子の關係であり、君臣一體なのである。

さて、日本人の主要なる傾向は一切のものを日本化する點である。あらゆるものに日本的なる方向を與へるのである。これ實に日本の、強大なる一の力の然らしむる處である。曾つて日本に輸入された外來思想の例を以て、これを考へて見よう。

我々の祖先は古代において支那の思想及び文化に接觸してこれを自己のものとし、次で印度思想及びその文化を咀嚼し、このアジア精神の兩極ともいふべき思想は日本において始めてその生命を護持され、長養された。支那思想の精華は實に孔孟の教であるが、それは日本に於て生き、支那に於ては死んだのである。悲壯にも菟道稚郎子皇子の自殺によつて立證されるが如く、儒教は傳來の當初から我が祖先により嚴格忠實に實踐躬行された。修身治人の學問としての儒教は日本の國民道徳を向上させた。特に徳川時代においては儒教は國民の道徳的並びに政治的生活の重要な指導原理となり、諸侯は之に則り國を治め、士人は之によつて其身を修めた。儒教は支那の國家社會の發展には全く没交渉であつたが、それは日本精神に把握せられたるとき始めてその正しい方向を與へられたのである。老莊の思想についても亦同様である。支那においては老莊は卑俗なる民間信仰と結べる道教となつて生きてはゐるが、それは老莊本來の精神とは相距ること極めて遠いものである。然るに我國に於ては老莊の精神はいつとはなしに國民的精神の裡に浸透し、我が國民性の上に特異なる教化を與へてゐる。即ち我々が枯淡、閑寂を愛し、さび、しづみに愛着を感ずるのは實にこの老莊及び禪に最も多く負ふものである。

印度文明の粹たる佛教についても亦然り。佛教はついに印度を興し又は救濟し得なかつた。のみならず、印度も亦佛教を生かすことが出来なかつた。佛教はその祖國たる印度に其跡を絶ち、第二の故

郷たる支那においても、民族の信仰生活とさしたる交渉が無くなつたが、ひとり我國においてのみは、いまだに我國民の宗教的生活を律する信仰となつてゐる。

かやうに日本民族は早くより大陸思想、文化に接したるを以て、精神的に支那、印度の植民地にでもなりさうなところであるが、事實は然らず、我國民の毅然たる國民的自負と有機的統一とはよく之に對抗し、たとへ波瀾曲折はあつたとは云へ、國民の精神は如何なる場合においても、それらの文化の奴隸となる事がなかつたのである。我々の最も光榮とする處は、日本民族が單に政治的にのみならず、その道徳的、宗教的或は藝術的生活においても、常に外來の文物の影響のために、寸毫も自家の面目を犯されなかつた點である。

しかし我々の祖先は、大陸に花咲く香り高き文化の輸入される度毎に、常に新なる感激と興味とに胸躍らせて之を迎へた。決して排他的ではなかつた。かくして三韓文化も、支那文化も、印度文化も、我々の祖先はいとも熱心に受容し、研究し、嚴肅なる批判的精神を以てそれを検討し、これらの思想がわが國民的生命の内容として攝取され終るまでそれが續けられた。盲目なる崇拜は我々の斷じて排する處であるが、偏狹なる排斥も敢て我々の爲さざるところである。

例へばこれを現在の我國情について言へば、往々科學を排斥するの聲を聞くが、これは妄斷であら

う。成る程科學は明治以來我國に導入された新らしい思想であるが、科學のもつ分析的且つ實證的研究法が我々を如何に啓發し、我が文化を如何に發達、向上せしめたか、誠に測り知れざるものがある。科學に對する我々の態度はむしろ大和魂を以て之を征服するにあり、之を忌避し、排斥するが如きは進歩的日本民族の恥辱であり、名折れとせねばならぬ。

外來文化の輸入並びに攝取の仕方は日本において全く獨特なるものがある。日本民族は概して言へば後れて出發してゐる。この事情は實に古代から現代に至るまでも繼續してゐる。従つて外來文化の輸入及びそれに影響される處多大であつたことは少くとも今日までの處では如何ともし難い日本の歴史の必然であつた。即ちこれを時代的に概観すれば、國初の朝鮮經由による大陸文化の輸入次いで飛鳥奈良朝時代の隋唐の文化の輸入、平安朝時代の醇化時代、鎌倉時代の日宋交通、室町時代の日明交通、戰國時代の南洋・南蠻貿易、江戸時代における醇化時代、明治時代における西洋文化の輸入、これである。

然し日本の「後進性」といふことも機械的に考へるのは間違ひである。例へば、日本においては既に紀元八世紀の頃、權威ある皇朝政治の下に、たとへ隋唐文化の甚大なる影響を受けたからだと云へ、まことに光彩陸離たる文化の華が咲き、當時の政治形態、經濟形態はすでに原始的の段階を脱し

てゐた。然るにその頃のヨーロッパと云へば、ギリシャ、ローマ以外の諸國では即ち今のイギリス、フランス等々は未だローマ帝國の支配下に全く未開人の生活を爲してゐたに過ぎなかつた。この點から云へば日本はむしろこれらの諸國よりも先進國である。近世に於ける日本の後進性は主として徳川時代の鎖國政策の遺産であるといへる。

白柳秀湖氏は云はれる。「明治維新を俟つて、はじめて解決されたやうに思はれてゐる、近代國家工作上の諸問題も實は明治維新にさし迫つて起つたものではない。これはすでに遠く戦國の末期、織豊時代の初期に起つて居るのだ。」戦國の後に來るべき新秩序が、源頼朝によつて創設された行政組織、若しくはそれを殆どそのまま繼承した室町幕府の行政組織であり得ないことは、もはや誰の眼にも明かになつてゐた。従つて戦國の後に來るべき新秩序は、皇室を中心として、少くとも、もつと皇室と密接な關係に於いて打建てられなければならぬ」ことが當時の我國の題案であつた。「信長も、秀吉も、家康も出來るだけは問題を解決しようとして努力した。問題を解決するといふことは、やがて天下を統一し、政權の基礎を固めるといふことにあたるので、信長、秀吉が進歩主義者であつたといふ意味からすれば、家康とても立派な進歩主義者であつたのだ」、「たゞさうして出揃つた近代國家工作上の諸問題も、これを根本的に解決するには、まだ時期が早く、或る程度で、舊制度との折衷、妥協が必

要であつた」と。少しく引用が長くなつたが、この際まことに示唆多き、意見である。

之を要するに、其國の地理的關係や、其他人爲を以て容易に克服し難い原因によつて生じた、「後進性」は、我々としては甘受するより外に方法がない。然し、だからと云つて「後進性」が我が民族の特性であるわけではない。同様によく云はれる、我々の「非創造性」、「模倣性」に就ても然りである。後れて發達してゐる處へ、優秀なる文化が可なり頻繁に渡來してくれば、模倣する人もあるし、創造の意を働かす餘地の無くなるのも當然である。然し乍ら我が國においては決して單なる模倣ではなかつた。決して單に非創造に終始してはゐなかつた。むしろ我々は、あらゆるものを克服し、消化し、一步／＼前進して來てゐる。そしてそれをなし得たところに、我々の卓越性があり、優秀性がある。

同じく東洋文化の系統に屬しながら、支那や印度では、文化が停滞し、我國ではそれは無限の進歩を爲してゐる。この斷えざる進歩、自己更新力こそ、我々の特性である。これは實に日本民族が幾千年の間培養し來つた特性であり、この無限の發展性こそは、やがて偉大なる創造性へと發展、轉化する。そして現代はまさに斯の如き時代ではないかと考へる。いま日本人にひし／＼と差し迫つてゐる問題は實にこの創造の問題である。とに角、我が國のあらゆる分野において、一切のものが創造的眼光を以て再検討されなければならぬ。現代はまさにかくの如き時代であり、あらゆる困難、相剋、

苦痛を克服し、超越し、一個清新なる創造を敢行することが、今や絶対必至である。

單純なる傳統主義的舊態度から、一步を抜け出さない限り、進歩も創造も不可能である。が然し、傳統の基底を持たない進歩もまた考へられない。例へば言語の發達にしても、必ず一定の國語の傳統に沿うて進むのであり、外國語を巧みに話す技術と國語の發達とは無關係である。かくして進歩とは舊文化の缺陷または舊來の陋習を廢除しつゝ、之を綜合して新文化を創造することである。また時代の進展と共に斷えず新要素を吸収すると共に、價値ある舊要素を保存しつゝ、前進することである。

ところが、こゝに一つの問題がある。即ち斯う云ふことが言はれてゐる。日本は宣傳にまづい。これを人々はしばしば日本國民性の美質に歸してゐる。それもあらう。しかしそれ以上に我々の文化の何かの缺點にそれは基づくのではないか。我々の島國は東に太平洋をひかへて、古來いはば文化の傳移の終極點として在りつづけてきた。しかも西方大陸に支那といふ優秀な古い文化國をもつてきたためにあらゆる文化を受け入れ貯藏するところとはなつたが、これを他に傳へるところとはならなかつた。宣傳の技術の拙劣もそれに基づくところがあるであらう。が、そこから更に獨善的閉鎖的な性質が生れて來る。かつて偉大なる征服國家になつたことがなかつたといふ事實はその性質に輪をかけた。それは小さな島國根性として我々の反省して來たものである。かくして大國民たるの襟度は我

我には少いやうである、と。

これは一つの注目すべき意見である。我々の國民的統一があまりに鞏固であるために、より一層偉大なる國家へ發展するのに、これが却つて障礙になりはしないか、小さな島國根性に固まり過ぎはしないか、と云ふのである。我國の現在の段階において、これはまことに考ゆべき事柄である。

傳統の擁護は須らく眞に國家發展、民族發展の線に沿つて行はるべく、我が大和民族の進路を逆轉せしむるが如き方向において爲さるべきではない。傳統再認識の問題は、時代の進歩に應じて、それを展開するといふ意味において、民族發展の要求に適合するのであつて、舊き傳統への單なる復歸運動であつてはならない。傳統の擁護と新文化の吸収とは決して矛盾するものではなく、兩者の綜合によつて、民族の傳統は益々その内容が豊富となり、民族の生命力は無限に伸張、展開するのである。

現在、我が國には、あまりに單純なる國民的特質の肯定者がある。と同時に、今より少し前には、あまりに單純なる國民的特質の否定者があつた。いづれも簡單主義であり、まさに兩者とも我々は脱却しなければならぬ。我々が先きに、創造を絶対必至と云つたのは、この故である。我々の「獨自性」が「獨善性」に轉化せざるやう、また我々の「綜合性」が「折衷性」に墮落せざるやう、我々は異常の緊張と努力とを肝要とする。

我々の活動舞臺はいまや著るしく展開せられてゐる。日本は最早や單なる日本的存在ではない。それは既に東洋的存在である。更らに我々は明白に世界的存在である。東洋の一隅に跼蹐してゐた往時の日本とは全然、生存の諸條件を異にしてゐる。従つて過去の日本人が、入り来るあらゆる外來文化、思想をよく理解し得た能力に敬意を拂ひ、そしてこれらの外國文化を正しく醇化し、日本化したことを驚嘆すると共に、我々の使命は更らにそれよりも遙かに重大且つ廣汎であることを認識せざるを得ないのである。

日本人は同化性が大にして、受容性が強いと謂はれる。これは我々の美點でもあり、缺點でもある。美點となつて現はれる場合には、それが積極化した時である。進歩の線に沿うた時である。その實例は改めて擧示するまでもあるまい。缺點として現はれた場合には、それが我々の消極的受動的態度となつて現はれる。内外の事變に對し比較的に受身的態度をとり、無關心と思はれる程の消極性を示す一面である。これは佛教思想の影響か、將又封建的專制時代の遺習か、何れにしても斯の如き一面が存するのである。

我々の謂はんとするところは、創造、開拓とは、まさに斯くの如き、消極的受動的態度の一擲から出發しなければならぬといふのである。それは今や我々において焦眉の急であり、急速に解決すべき

問題である。將してそれは可能であるか？ 勿論、然り！ と、我々は答へ度い。

唯、現在のところ、これを如何に解決すべきかの、指導理念も指導勢力も確立してゐないのが、客觀的な實情である。けれども本來問題は我々自身の問題であり、我々自身が探究すべきものである。それは我々個々の創造的な實踐において、その方向への努力のうちに創造され、それが、やがて我々全體をリードする指導精神を生み、指導勢力を形成する。而して斯くの如き形勢は今日既に存在し、漸次發展しつつあるものと斷じて差支ない。昭和維新の聲は即ちこれである。

四

今次事變勃發以來、陸に海に、或は北支、中支、南支に、我が勇武果敢なる、皇軍將兵の活躍は、その壯烈、偉大なる、まことに鬼神を泣かしむるものがあり、我々の衷心より感激と感謝に堪へざるところである。而して我が軍は遂に長驅、敵の首都南京を衝き、これを陥入れ、去歲十二月十七日、輝しい歴史的入城式が擧行された。然るに支那蔣政權は依然として抗日態度を改めざるのみか、益々戦備を擴大し、長期抗戦の態勢を執るに至り、南京攻略後に於ける事態の推移に注目しつつ、あつた帝國政府は、こゝに國民政府に對する最後の確固不動の方針を決定し、去る一月十六日所謂重大聲明と

して、それが内外に公表せられたことは周知の通りである、即ちその全文は左の通りである。

帝國政府は南京攻略後尙ほ支那國民政府の反省に最後の機會を與ふるため今日に及べり、然るに國民政府は帝國の眞意を解せず漫りに抗戦を策し内民人塗炭の苦みを察せず外東亞全局の和平を顧みる所なし仍て帝國政府は爾後國民政府を相手とせず帝國と眞に提携するに足る新興支那政權の成立發展を期待し是と兩國國交を調整して更生新支那の建設に協力せんとす、元より帝國が支那の領土及主權並に在支列國の權益を尊重する方針には毫もかはる所なし、今や東亞和平に對する帝國の責任愈々重し、政府は國民が此の重大なる任務遂行のため一層の發奮を冀望して止まず。

我が國はこゝに愈々重大なる局面に到達したのである。素より、斯くの如き事態に到達するかも知れないことは、事變勃發當初より我々に豫想せられた處であり、更めて驚くべきではないが、然し事變が愈々かゝる段階にまで發展してきたといふことは、我々の特に覺悟と認識とを新にすべきことであり、それに依つて今後に對處すべき方策もまた自ら生れてくるのである。政府が中外に向つて、斯の如き聲明を爲し、かゝる重大使命の達成に一路邁進せんとするの決意を闡明したる所以も實に此に存すべく、我々國民は政府の意のある處を充分體得し、舉國一致、不退轉の氣魄を以てこれに對處すべきは云ふまでもない。

かくして、日本のいま立てる地位はまことに重大である。國際的にも國內的にも、日本がこれ程深刻にして、莊嚴な、これ程困難ながら、雄大な、時局に當面したことは未だ曾て史上に其比を見ないところである。徳川を盟主とする三百諸侯の制覇を打倒し、封建社會の行詰りを清算した明治の王政復古は、近代資本主義的日本の端初を開いた偉大なる變革であつたが、今日の時局に比すれば尙ほその規模は小であり、その矛盾は少いと謂へる。

日本が今日當面する歴史の段階は實に日本が、明治の維新以來營々として西洋の文物を採り入れ、その諸制度を輸入し、遂に世界列強に伍し、偉大なる近代國家として成長したことの當然の歸結である。と謂はざるを得ない。今や東亞唯一の實勢力であり、權威國家たる日本が歴史のこの新なる方向へ進行しつつあることは如何なる勢力も、如何なる外國も之を否定し得ず、妨害し得ざる道となつた。それは日本國家に委ねられた新たな歴史の創造であり、世界史の書き直しを意味する。悠久三千年の歴史と傳統とを持ち、萬邦無比の國體を今日に至るまでも嚴として保持してきた我が大和民族にして始めて可能な國策であり、外交であり、戦ひである。

世界はいまや「持つ國」と「持たざる國」との相剋、「現状維持國」と「現状打破國」との對立、更らに重大なる對立は共產主義と反共產主義との對立、自由主義、個人主義と國家主義、民族主義との

矛盾等々、まことに異常なる状態に直面してゐるのである。

日本も亦世界の一環として、この大勢の外にあるものではない。否、むしろ極めて密接不離なる關係にある。日本は謂はゞ東亞における「持たざる國」であり、「現状打破國」である。土地狭少、資源貧弱、資本また豊富ならず、更らに人口過剰に悩む日本が對外的にその發展の活路を求むべきは理の當然である。また世界無比の國體をもち、正義に厚く、勤勉なる日本民族が我が國體と根本的に相容れざるソ聯邦に對立し、その階級獨善的なるイデオロギイを強く排撃し、常に彼に備へつゝ、我が大和民族独自の大道を進むべきはまた多言を要しない。

現時の我が對外活動は結局この「持たざる國」から「持てる國」への發展、轉化であり、不合理、不均衡なる現状を打破して、公正、妥當なる新秩序を建設せんとする大活動に外ならない。そは躍進日本の必然の道であり、我等日本民族の息むことなき發展の表現であり、正義日本に課せられた崇高なる歴史的使命である。而して我國は獨り日本の成長、發展を希ふのみならず、滿洲國の發展、四億支那民衆の福祉、更らに歐米資本下に呻吟する東洋諸民族の平和と正義との爲に闘ふのである。それのみならず、我々の掲ぐる理想は更らに偉大である。即ち八紘一宇の大精神を以て、世界に正義と平和とを宣布せんとするものである。近衛首相が、「日本は何を望むかと問はれたならば、日本は世界と

東洋の平和を望むと答へる。唯その平和の地盤をより確固たらしむる爲に、今日戦ひが必要である」と述べてゐるのは誠に至言である。平和建設の實際的方法是、清新、潑瀾たる觀念を以て考慮すべく、世界の新秩序の建設は、公平にして創造的なる眼光によるに非ずんば不可能である。我々は今次事變を近視眼流の小人の見解を以て見るべきではない。これに危惧と不安とを感ずる者は歴史の具體的な發展法則を解せざる腐儒と云ふべきである。斷乎として戦ひを貫徹するところに、國家百年の大計は樹立されるのであり、當面の事態はもとよりそれによつて解決される。我々はこの歴史の必然性を心肝に銘じて認識する必要がある。

かくて日本の對支徹底方針の由つて來る所は一面には、容共、抗日の誤れる政策を以て、隣邦相互の協力を故意に拒否しつゝある蔣政權及び支那軍を徹底的に粉砕するにあると共に、他面においては、叙上の如き東亞における歴史的、現實的不可分一體性の再認識の上に、東亞永遠の平和と東亞諸民族間における共存、共榮の新關係を樹立せんとするものである。それは即ちアシア協同體の建設であり、東亞經濟ブロックの樹立であり、アシアの天地に、一個清新なる、新生活關係、新生活形態を創造、展開せんとするものである。更らにそれは我が日本民族の不斷の自己更新力と發展性との顯現、その新たなる創造過程である。

各

論

第五章 新らしき青年

一

我々の課題は、我國現在の青年の諸状態を究明し、青年教育の現状に検討を加へ、以て我國刻下の急務たる青年問題解決への一提案を爲さんとするに在つた。

本書總論は、この課題の研究に着手するための大前提であつたが、それは同時にまた我國青年が、現在一般的に享受しなければならぬ事實上の大前提である。故に我々はこの與へられたる現實的な前提から出發しなければならぬ。

我々はいま事變（戦争）の時代に生きてゐる。決して平和の時代に生きてゐるのではない。これはもとより云ふまでもないことだが、世上、これを忘却せるが如き青年を見掛けるので、敢て一言せざるを得ないのである。

日本は今や一切を擧げて國家總動員、戦時體制下にある。昭和六年秋の滿洲事變以來「準戦時體制」

といふことが喧ましく論ぜられてゐたが、もはや左様な段階はとつくに通り越し、昨年七月七日の蘆溝橋事件、其後の事變の發展、更らに長期戦の第二段階に入つた今日においては、政治も經濟も、其他一切のものが戦時體制に組織化され、整備され、それが今後益々強化されるであらうことは疑を容れぬ。何となれば我々はいま、戦つてゐるのであり、戦争には必ず勝つといふことが無條件的に肝要だからである。「戦はこれからだ」とか「長期戦はこれからだ」とか謂はれてゐるが、それは今次事變の終局目的の達成の意であり、それまでは正に文字通り戦ひである。故に目的はこの大業を成就して、上 聖明に應へ奉らんと冀求するところにあり、一切の物力、人力がこれに動員せられんとしてゐる。獨り軍職に在る者のみならず、軍籍を持たざる總ての國民に、更らに日本に存在する一切の物資、一草一木に至るまで、動員令が下るものと見なければならぬ。これが戦ひの實體であり、現實であり、總てのものが國家に奉仕すべく、今や規制せられてゐる。もとより我々は平時においても國家に奉仕するの念を缺いてはならぬが、戦時においては、それを強化し、持久化し、且つ斷續するところ無からしめぬ覺悟が要請せられる。

この戦争を、戦地における同朋兵士諸氏と同じ氣持で親ら身を以て體驗することが、いま我々青年に與へられてゐる、唯一つの修養の方法であると、私は確信する。事はもとより修養どころの問題で

はないが、我々の対象としてゐるのは、内地における銃後の青年諸君であり、それらの諸君の、現在における生活態度は如何と問はるれば、その答は當然に右の一點に歸着するのである。而して私の云はんとする所は、斯の如き銃後の實踐活動のうちに、それを通じて、眞の日本精神の自覺に到達して貰い度いと云ふことである。更らに私の云ひ度い事は、この自覺こそが一切の問題の解決の鍵だと云ふことである。

ドイツのルーデンドルフ將軍の謂へる如く、現代の戦争は全體戦争である。即ち近代戦争は單に武力と武力との闘ひであるのみならず、それは同時に經濟戰、政略戰、思想戰であり、これらのものが相互に密接に一體となつて結ばれ、それが一つの戦争となつて現はれるのである。換言すれば、この何れの戦線においても我々は勝利しなければならぬのである。

思想戰に勝つための第一の前提は、國內思想戦線の統一であり、この點に分裂を來すときはまことに由々しき大事に至るのである。もとより我國現下の情勢は、萬邦無比の國體の下に、他國に追隨を許さぬ熱烈なる愛國心があり、國民精神總動員運動が實施され、一絲亂れざる舉國一致體制をとつてゐるのであるが、この體制は彌が上にも強化されることが必要であり、單に對外を目標としてのみならず、對內的にも、これが更らに／＼緊密化されねばならぬ。この點においては、遺憾ながら、我が

國內の情勢はまだ十全とは云へぬのである。

現代青年はまさに斯の如き思想戦線の行者たるべきであり、斯の如き國家的任務をよく敢行し得るが如く、自ら修養することを以て、その第一の修養目標としなければならぬ。これに關して、最近四月七日に開かれた第五回教育審議會において、左の如き意見が開陳されてゐる。曰く、教育刷新の根本は教學精神の確立にある。抑々教と學とは別のものではない。從來是を分離して來た爲に色々な弊害が起つた。明治の初年には學は即教であつた。然るに後になつて、教と學とが二つに分離されたのである。今日の急務は國體を中心とする日本教學の確立にある。教育の本義は人をつくるにある。これがためには學と道とは不二體でなければならぬ。學問を教授すると共に道を傳へなくてはならない。道をはなれた學問はなく、この點を建直さなければならぬ。然るに今日の教育は國家と個人とを對立せしむる、自由主義に災らはされて、恰も教育と政治とは兩立しないものゝ如く考へてゐる。この點を思切つて改めなければならぬ。そこで今後の教學は、國體の本義に則り、國防の完備、國力の充實、國民精神の振興、國民生活の安定、國民文化の向上並びに國民の海外發展等を其の内容として行かねばならない、と云ふのである。

右の意見のうち、注目すべき要點は、國體のことは申すまでもないが、第一、教育の本義は人をつ

くるにある。第二、教育は政治と伴つて行かなければならないといふ、この二つである。

かくして、現代青年は先づ眞個の日本人となるべく要請せられてゐるのであり、更らに青年は政治に無關心であつてはならぬのである。従來青年は政治に對して比較的傍觀的であつた。否雷り青年のみならず、一般成人もさうであつた時代があつたが、いまは左様なことでは眞の日本國民たるの資格を失ふのである。

要するに我々はこの非常時局下において、先づ新らしい人間に轉身することが肝要なのであり、新時代を脊負つて立つ、新型の人間と成ることを迫られてゐるのである、先きに我々は、日本人にとつて、いま必要なのは人間概念一般ではなくて、日本民族としての人間概念であると云つたが、これは従來のイデオロギイに囚はれた、所謂個人主義型、自由主義型人間、或は階級主義型乃至マルクス主義型人間を清算して、眞に日本主義型の人間を造出せんとすることである。前者は謂はゞ形式的な小乘の人間であつたのであり、後者は創造的な大乘の人間なのである。

眞に日本主義的な人間とは如何なるものが、それは先きにも述べたる通り明治廿三年に賜はりたる教育に關する勅語において日本人の日本人たる所以は既に確立せられてゐるのである。然るにそれを今日再び畏れ多くも捧讀し直さなければならぬのである。吉田熊次博士に依れば、「爾來我教育界に行

はれて來た倫理學や哲學等は専ら歐米の個人主義的思想を背景とするものであつて、教育勅語に含まれて居る世界觀、人世觀とは根本的に相違するものがあつた。故に法則において教育勅語を學校教育の指導精神と定めながら、實際においては不幸にして教育者の思想と精神とを左右するものは、依然として所謂西洋思想であつた。隨つて我國體觀念の徹底が困難であつた。これ我國にありては教育の程度の高き者ほど國體觀念が稀薄であるかの如き奇觀を呈して來た所以である」と。この様な事情が従來存在してゐたのである。

即ち我國においては明治維新以來、所謂「文明開化」の聲によつて始まつた急速なる西洋文明の輸入の傾向がついにその素朴なる形態を脱し得ず、それが今日に至るまで充分清算されずに、最初の方針のまゝで行はれてきたのである。もとより維新當初における西歐文物の輸入、移植が我が國家の發展上、更らに國民文化の向上の上に充分なる功績のあつたことは否まるべきではなく、議論の餘地はないが、眞の革新は健全なる民族的傳統の基礎の上に建立せらるべき點が、不幸にしてほんとうに把握せられてゐなかつたのである。かくして我國の、主として知識階級の指導層は今日まで二元主義の精神的苦惱を持ちつゞけて來たのである。即ち彼等は一方においては西洋思想の個人主義的人生觀を理念的には最も卓れたるものとして、これに心酔しつつも、他方においては現實的本能的にはこれと

方向を異にする民族全體主義的な世界觀、人世觀の存在を否定し得ず、斯の如き、内面的矛盾から脱却する事が出来なかつた。

然るに、最近に至つて漸くこの矛盾撞着を克服、解決せざるを得ない、種々なる客觀的情勢が我國内外に展開せられて來たのである。即ち對内的には、從來の自由主義文明、個人主義思想の、我が日本人の實際生活としつくり合はないことが愈々痛切となり、他方においては滿洲事變以來の國際情勢の緊迫によつて、民族的自覺、國民的自覺が力強く、知識層ではなく、むしろ民衆層の側から擡頭してきたのである。かくして我々はこれに關して一聯の具體的清算過程の事實を見る。即ち、國家法人説並びに天皇機關説の排撃、國體明徴の要望、文部省における教學局の新設、人民戦線派大學教授の檢舉、内閣情報部における中堅官吏の思想講習會等々はこれである。教學局の任務は、消極的には自由主義と共產主義に基づく外來の學術を批判し克服すると共に、積極的には、日本民族世界觀に基礎づけられた所謂日本主義的諸學の理論體系化を行ふべきところにある。而して教學刷新は、この教學局と日本學の體系化をその主たる任務とする國民精神文化研究所と更らに教育審議會の三位一體の建前において爲されんとしつゝある。まことに今次支那事變は單に武力の戦であるのみならず、それは一つの思想戦であり、國內においても既にこれだけの闘いが行はれてきたのである。

さて、本來日本人はどうあるべきか、その存在のありかたは何か。

我々が日本人としての自己生命を自ら自覺するとき、それが決して孤立單位としての個人生命ではなく、それは先づ親から傳はるものであり、又親の生命そのものは過去における無數の祖先より流れ出でたものたることを悟得するのである。更にそれは結局天照大神及天御中主神によりて象徴せられてゐる宇宙原始生命に迄遡るといふのが、我が大和民族の傳統的信念である。即ちこの一元的な宇宙根元の原生命が血脈の道によつて内奥より、時間的に空間的に、外面に向つて多元的に顯現したものが即ち日本人の生命である。斯の如く日本人は其の本來の存在のあり方において個人でもなく階級人でもなく、實に最も純粹なる民族人なのである。個人や階級人の人生觀が對立的、排他的態度に終始し且つ概念的、形式的であるのに反し、民族人は全體調和的な存在であり、且自己の裡に生々發展の潜勢力を無限に包藏してゐるのである。

ナチス獨逸においては「血と土」といふ民族的スローガンが叫ばれてゐるが、我大和民族は不言のうちこれを昔から實踐してゐるのである。ドイツのクリーク教授は普遍概念としての生命なるものをドイツ民族の生々發展の根本理念として提唱されてゐるが、これは日本民族の「道」に當るものと考へられる。

道は血統と徳行とが一如となつたものである。道は實に正しき存在のあり方における人間生命發展の原理である。天皇の道即ち皇道を教として明らかにせられたものが、教育勅語である。この意味に於て教育勅語は日本民族主義的人間學の根本原理を闡明せられたものである。

以上は我が日本人本來のあるべき姿であり、青年修養の究極の目標もまた此點になければならぬ。併し斷るまでもなく、問題は研究でなく實踐であり、日本精神乃至日本人間學に關する著書を單に讀むだけではなく、其の文字に含まるゝ精神を酌み取り、それによつて眞に日本的な自覺に到達し、この自覺に基づき實踐することではなければならぬ。この眞の日本的自覺に到達するといふことは一つの復古であり、確かに古への人に歸ることである。併しこの古人の心に還ることが少しも保守に非ざることとは總論において、既に述べたる通りである。反而、我々は現在の如きこの革新時代において、革新への氣魄と自信とを先づこゝに求めなければならぬのである。即ち革新の原動力を何よりも先づ把握し、堅持し、これを長養する必要があるのである。

前にも述べたる通り、本來我國こそは典型的なる全體主義國家であり、この點ドイツ、イタリー諸國の全體主義と多少異なるのである。これらの諸國は近世に到つて、斯の如き全體主義を血みどろの争闘を経て闘ひとつたのであるが、我國は本來かゝるものとして、昔から存在してゐるのである。従つ

て我々は最初から道の國日本であり、有り難い、幸福な國家に生れてゐるのである。故にこの皇恩、國恩に感じ、益々この道の國たるの實を擧げなければならぬのである。

現代は全體主義の時代であると共にまた革新の時代である。靜より動の時代、一切のものが動く時代である。斯の如き動搖、混亂の時代には我々はまさに毅然として不動のものを把握してゐなければならぬ。さもなければ我々は忽ちにして、時代の波に足許をさらはれて仕舞ふ。我々において不動のものとは何ぞや。それは云ふまでもなく、國體精神であり、日本精神である。我々は先づ、この確固、不動の日本精神を、自己一切の生活の基底に据えねばならぬ。この盤石の如き、強固なる立脚地に先づ起たねばならぬ。現在において、青年の把握すべき思想は、この日本精神を描いては外にはない。この日本精神の眞髓を掴むことが何よりも急務であり、これによつて、既往一切の不純、汚濁、不明瞭、漠然たる一切のイデオロギ―を清算することが肝要である。

革新時代は更らに創造、開拓の時代である。政治、經濟、社會、文化等々、我々の生活の一切分野において、或る新しいもの、即ちいま迄曾つて存在しなかつたものを創造する時代である。いま、我々において創造、開拓の如何に切要であるかは既に前にこれを述べた通りである。新しい時代には新しい型の人間を絶對必要とする。新らしき酒は古き皮囊に盛ることは出來ない。新しい人間

でなければ、この新たに起る變化、變動に堪へることが出来ない。創造的、實踐的人間のみが、よくこの危機を脱却し、これを克服し、やがて來るべき新時代を開拓、展開し得る。彼等によつてのみ始めて健全なる新秩序の再建、建設が可能である。

如何なる變動が起るか。それはこゝに全く豫測し得ないところである。然しながら、戦時における變化よりも、更らにまだ一層大きい變動が、戦後において起るべきは、彼の歐洲大戰の例を見ても明白であり、古今東西に亘る史實もまたこれを實證してゐる。我々はこれを充分覺悟してゐなければならぬ。些かも恐怖すべきことではないが、また絶対に輕視すべからざることである。

青年はそれ自身新らしき存在であり、而かも未完成である。かやうな新型の人間が何よりも先づ青年を基礎にして造出せらるべきは元より論を俟たないところである。未來はまさに青年のものであり青年の國家に對する義務と責任とはまことに測り知れざる程大きい。國家を善くするも悪くするも、總べては青年の双肩にかゝつてゐる。現在において、これほど痛切、緊要なる問題はない。現下、青年問題、特に青年教育の諸問題が喧ましく論ぜられ、青年亦大いに發奮、自覺せざるべからざる所以はこゝにある。

然らば新らしき青年とは何ぞや。我々に賦與された肉體はさう短日月に變更できるものではない。

幾世代もかけたら、體質も或は變るかも知れないが、一代のうちには左様な事は不可能である。病弱者が健康者に成ることは可能であり、また斯くあるべしであるが、人間の體質の方はさう簡單には變更されない。之れに反し精神は肉體とは異なる。この方はその積りになりさへすれば、豁然として一夜の中にも變り得るのである。新らしき青年とはつまりこの精神を新たにしたる青年、新らしきイデオの把持者たる青年の謂である。

新らしき精神とは何か。

第一の要素は、國體觀念であり、日本精神である。この最も古しとせられることが、何故に最も新らしいかは既に總論において縷々説明したる通りである。端的に言へば、最も新らしかるべき、革新の原動力が實にこゝに存するからである。國體の再認識、國體のほんとうの姿をはつきりと把握することから、我々は出發しなければならぬ。老婆心ながら、且又恐れ多きことながら國體の體は肉體の體と同じ文字であり、同じ意味と拜する。國體の尊嚴なる所以を眞に理解すると共に、一部の人の言ふが如く、餘りに堅苦しく考へない方が、反而國體の本義に副ひ奉り得る場合もあることを、一言申し添へて置きたい。

第二の要素は、科學精神である。ドイツ人は、眞の科學精神こそ即ち、ドイツ精神であると公言し

てゐる。ドイツではナチス政治になつてから、民族精神が高調され、多くのユダヤ系の著名な科學者が國外に追放された。併しドイツ人はこれに依つて科學を斥けようとしたのでなく、却つて科學を完全に自分の手に收めようとする強固な意志を示したのであつた。極端なナチス主義の科學者は、世界で一般に認められてゐる科學理論のあるものすら、それがユダヤ學者によつて創設されたと云ふ理由を以て、別に之に代るべきアリアン民族の手になる理論を確立しなければならぬと主張してゐる。まことにその意氣の盛んなる驚嘆すべきものがあるではないか。近頃日本において、大和魂の前にはいかなる科學も光を失つてしまふと云ふが如き議論が一部にあるのは大いに寒心すべきことであると考へられる。偉大なる日本精神と科學とは決して背馳してゐないのである。問題は日本人が大和魂を以て如何にこの科學を驅使するかと云ふことであつて、日本精神によつて科學が無力になるわけではない。故に精神力と科學とを無造作に對立せしむるが如きは、餘りに昂奮した議論、謂はねばならぬ。

現代の國家にとつて科學特に自然科學が如何に重要な役割を果すべきかは改めて言ふまでもないところである。世界大戰においてドイツがよく長期戦を支へ得たのは實にこのドイツ科學の優秀性によつてである。ドイツがその卓越せる科學的知識を利用して、よく大戰當時の異常な困難を切り抜け、特に甚だしく缺乏した色々な物資を手際よく補給することの出來たのは世界周知の事實である。更ら

に毒ガスを使用したり、百二十キロメートルの射程を有する長距離砲を突然戦線にあらはして敵を驚愕させたのもドイツ科學の威力を示すものである。

世界大戰中におけるドイツの物理化學上の研究並びにその應用の目覺ましかつた一例としては、ハーバー法として有名な空中窒素固定によるアンモニア合成法がある。この發明のお蔭でドイツは從來チリ硝石からのみ得てゐた硝酸を、この方法で多量に生産し得るやうになり、これによつて爆藥の不足を補つたばかりか、農業用の窒素肥料の供給を爲すことが出來たのである。若しこの方法が發明されてゐなかつたなら、ドイツは既に早く一年も経たない中に敗戦の憂目を見たゞらうと云はれてゐる。故に當時ドイツはこのハーバー法の發明をまつて、戦争を捲き起したのだとまで云はれたのであるが、それは發明者フリッツ・ハーバー博士の否定する如く、さうではない。たゞ、たとへ發明は戦前であるとは云へ、戦争勃發直後に、この方法を大規模に實行に移すために、多大の苦心をして、工場を設置替を行ひ、爆藥製造を中絶せしめない様に努力したのである。然し、何れにしても、このハーバー法のドイツ軍に貢獻した偉大さは測り知れざるものがある。そればかりでなくこの方法は戦後も工業的にアンモニア合成のために利用せられ、現在ではチリ硝石は世界であまり用ゐられてゐないのである。

大戦中におけるドイツのもう一つの重要な発明は葡萄糖の酒精酸酵によつてグリセリンを製造する方法である。グリセリンはダイナマイトの製造に必要であり、以前は専ら動物性又は植物性の油脂から脂肪酸と共にとるか、又は石鹼製造の際の廢液から回収したのである。ところが油脂は食料として絶対に必要であるから、若しこの方法が考案せられなかつたならば、ドイツ國民は滋養分の缺乏によつて忽ち衰弱してしまつたに違ひないのである。

この外に塗料工業に必要な樹脂の代りに人造樹脂の合成、天然ゴムの代りにメチル・ゴムと稱せられる一種の硬質ゴムの合成、石鹼の代りには粘土を混じた粘土石鹼が作られたり、革の代りに脂肪油成分を含まない擬革、其他木材の纖維から作つた織物、燃料としての代用ガソリンや、種々の代用食料品がつくられた。しかしドイツが最も惱んだのは食料品の缺乏であつた。これだけは種々代用品が生産されたが、或は味が不味かつたり、胃の消化に適しなかつたりして、遂に科學の力のなほ甚だ及ばないことを嘆じたのである。

以上は、大戦當時におけるドイツの一例である。更らに科學は本來戦争のために必要なのではなく、國力増進のために不可欠のものであり、現代においてはいかなる物資の生産も科學の應用なしには行れ得ない状態である。科學なくしては今日の國家は決して雄大なる發展を爲すことを得ない。故に科

學知識の普及と科學研究の獎勵とは是非とも必要なことである。即ち人々が事物を科學的に考究することは肝要なことであり、これを主知主義として一概に排すべきではない。主知主義の弊は、知が萬能だと信じてゐる點であり、科學的らしい研究の結果によつて得たる處を信じ過ぎる點である。吾人の理性に訴へ、如何なる事物に對しても、科學的に、論理的に研究する態度はむしろ獎勵さるべく、拒否されるべきものではない。

科學知識の普及、特に科學的研究態度の堅持及び科學研究の獎勵は國運を進展せしむる上に絶対に必要であり、不可避のものである。祖國愛の高調はまた同時に科學研究の高調となつても、少しも不思議はない位である。科學蔑視は我々日本人の進歩的發展を阻止するものと謂はねばならない。

國體觀念と科學精神とは矛盾しはしないか？ 一應提出せられさうな疑問である。これに對して我々は決して矛盾しないと、はつきり答へ度い。一つの例を擧げて説明すれば、

物理學では從來多くの經驗的事實に従つて、光を一つの波動現象であるとして解してゐた。之は今世紀の初頭に至るまですべての學者によつて少しも疑はれずにあつたのであるが、その後新しい事實によつて光が粒子性をもつことが漸次明らかにされて來た。ところが一方では波動的に、他方では粒子的に現はれるといふことは、理論の上でいかにしても解くことのできない矛盾であると見られ、この

両方の事實をどう處理したらよいかについて、物理學者は非常な困難を感じたのであつた。この問題は殆んど二十年の久しい間完全な解決を見ないであつたが、それが最近に發展した量子理論によつて遂に解かれ、實にみごとく光明に輝されるやうになつたのであつた。この解決の鍵がどこにあつたかと云へば、それは光の波動性と粒子性とが具體的現實のそれぞれの抽象面であつて、我々が之をどんな方法で觀測するかによつて互ひに異なつて現はれるのであると見做した點にあつた。つまり見方によつてこの両方の性質のどちらかが現はれるのであるから、兩者は決して矛盾對立するのではなく、却つて互ひに相補足するのであると解されたのである。そして光ばかりでなく、物質の窮極的要素としての電子などに於ても、この兩性質の示されることが知られるやうになつたが、ともかくこの補足性といふことは一つの新しい概念であつて、それは思想の場合に於ても極めて含蓄のある示唆的の意味をもつのである。つまり光や電子の抽象的性質に對すると同様に、我々は思想、特にその斷片的なものに對して輕々に矛盾對立を云々してはならないのである。たとへ之等が外見的にさうではあつても、もう一段高い立場から見れば、それらが當然互ひに相補足すべきものであることが明らかにされるかも知れないからである。今こそ全體として、我が國には祖國愛を中心とする偉大な現代的思想體系が確立されるべきである。

右の通り、解決の鍵は補足性といふ一つの新しい概念であつた。我々は物理学を専攻したわけではないから、この説の當否をいま自ら判斷することは出来ないが、併し、この理論は權威ある物理學者の多數によつて、充分客觀的に承認せられたる結論である。たとへ、さうでなくてもよい、兎に角、右の補足性といふ概念が一つの新しい概念、物理学上の一つの進歩であるといふ點に就いては些かの疑ひも存しないのである。

我々の強調したいのは、この進歩、この創造の精神である。我々は困難と不能とを混同してはいけなう。

憂きことのなほこの上につもれかし

かぎりある身の力ためさん

明治天皇の御製のお訓への通りである。この非常時局に際し、困難と不能とを混同することは絶対に禁物である。ジョン・ステュアート・ミルが、その自叙傳の中に、「不可能な事を要求されたことのない子供は決して全力を發揮することはない」と書いてゐるが、これも實に至言である。彼は彼の父から幼時、子供の力では到底不可能な事を要求されたのを述懐して、斯う云つてゐるのであるが、か様にして己れを鞭打ち乍ら、勉強したればこそ、あれ程の大學者に成り得たのである。

今日、我々は確かに困難な局面に立つてゐる。大陸經營においても、國內諸問題の處理に當つても。然し、それを克服し、打開することは、困難ではあつても、不能といふが如きことは全然有り得ない。故に青年は先づ、あらゆる事が可能であるといふ見地に立ち、そして全力を擧げて、その解決に對處すべきである。

國體の尊嚴にして、宏大無邊なるは、我々の總論において詳しく述べたる通りである。悠久幾千年の昔から正しく存在してきた事に、眞理の存しない道理はない。他方において、科學の力は今日決して萬能ではない。今日科學を以て解き得ざる事實はまだ幾らでも存在をしてゐる。然し、科學が眞理探究の有力なる方法であること、それが常に進歩の方向へ進んでゐることも、前述の通り否定し得ない事實である。今日解き得ざる事實も將來は必ず解決し得るのである。我々は進歩を欲する、故に科學を排することは出来ないのである。また排してはならぬのである。

二

これを要するに、我等が日本精神、大和魂を磨く場合に於てもそのために科學的思考を廻避、廢止するが如き事を爲さず、寧ろ大和魂を以てこれを克服する位な氣魄と意氣込とを以て、大ひに科學を

研鑽し、以て大和魂そのもの、内容を豊富にし、且つ發展的たらしむるにある、昔は所謂和魂漢才であつたが、現代はこの和魂歐米才でなければ、到底眞に進歩的なる青年たるを得ない。我々に於ける科學思想は假りに明治初年以來のものとしても、既に七十年の傳統を我國において持つてゐる。既にこれだけ我國のものに成り切つてゐるのである。これを我國における最も古き傳統と調和し、綜合せしめ、更らにより高度の科學、より程度の高い大和魂を創造することは必ずしも至難な事ではない。科學的思考は單に自然に對してのみならず、人間界に對しても適用さるべきである。かくして生活を、より規則的、より合目的たらしめ、以て明日の飛躍に備へなければならぬ。

さて、日本精神と云ふも科學と云ふも、我々は左迄難しいことを云つてゐるのではない。一は本來日本人に具有せるものであり、それを此際大ひに發揮して貫ひ度いと云ふのであり、一つはこの文化の高度に發達せる、複雑なる現代社會に處するにつき、科學的、合理的、計畫的生活態度の必要不可欠なる所以を説いた迄である。この方面の學者たらんとする者に對しては別に説く人があるべく、またその説く方法も、もつと特殊、具體的であるべきである。我々の問題にするのはこの點ではなくもつと一般的、より根本的な問題である。即ち我々は何の爲に學問を爲し、何の爲に修養をするかと云ふことである。即ち我々の初一念を何處に置くかと云ふことである。この初一念を何處に、また

如何なるものに持つかと云ふことは實に重大なる問題である。この初一念の如何が實に學問の眞偽の岐るところとなるのである。

これに就き、維新の志士、吉田松陰先生の學問に對する態度を窺つて見よう。松陰先生は特にこの初一念の肝要なることを、屢々且つ痛切にその弟子達に求められたのである。即ち、その文に曰く、「今の士大夫學を勤むる者若し其志を論ぜば名を得んが爲と官を得んが爲とに過ぎず。然れば功效を主とする者にして殆んど義理を主とする者と異なり、思はざるべけんや。嗚呼、世に讀書の人多くして眞の學者なき者は學を爲すの初志已に誤ればなり」と。蓋し、これ初一念を名利のためにするのであつて、「名利の爲に初めたる學問は進めば進む程其弊著はれ、博學宏詞をもつて是を粉飾すと云ふとも、遂に是を掩ふこと能はず、大事に臨み進退據を失ひ節義を缺き、勢利に屈し醜態云ふに忍びざるに至る」と、先生は云ふのである。即ち我々は本來名利や立身出世のために學問をすべきではないのである。斯の如きところに我々の初一念は存しないのである。

然らば松陰先生は何を以て學問の第一義としたか。先生の「士規七則」の第一則に、「凡そ生れて人たれば宜しく人の禽獸に異る所以を知るべし。蓋し人に五倫あり、而して君臣父子を最大となす。故人の人たる所以は忠孝を本となす」とあり、また同じく士規の七則の一節に、「君臣は一體、忠孝は一

致、唯吾國を然りとす」と。松陰先生の初一念、學問の第一義は即ち是である。

我々の初一念もまさに斯の如き處に存しなければならぬ。單に自己本位の事或は瑣々たる目前の利害問題は決して我々の初一念たるの價値が無いのである、換言すれば、「皇基の振起」、これ即ち我々の初一念である。日本精神の眞髓こそは實にこゝにあるのであり、これが我々の初一念たるべきことを現代青年は堅固に把握することが肝要である。

更らに、論を進めれば、最近における思想混亂、乃至思想惡化の一因は、實に日本國民としての、この臣民道の本義が忘却せられたる點に存するのではあるまいか。君恩一元の我國家に於ては、我が國土人民はみな天皇のものであり、更らに眞實にいへば、神祖の生んで後世に託したまへる「おほみたから」であり、力を以て征服し、驅使せらるゝのではなく、天皇より見れば人民程尊きはなき存在として、生みの親心を繼いで養ひ育て教へられるのである。臣民からいへば一切は君恩の所興であり私のもといふべきものがない。我あり、然る後君主を見出して仕へるのでなく、君主あつて我の存在が與へられたのである。故に我は君のものであるから、忠義をして參らせるとか、國家のために犠牲になるとかいふ事は本來あるべき筈がない。天皇がその徳を八紘に光被せしめ給ふに當り、臣民はたゞ詔のまゝに動くのである。即ち君徳顯現のために生きるのが我が國の臣民道である。天皇と臣民

との、この内面的關係を、松陰先生は、「此君民は開闢以來一日も相離れ得る者に非ず」といひ、又先に引用せる通り、「君臣は一體、忠孝は一致、唯吾國を然りとせず」と云つてゐる。

現代青年は須らくこの「皇基振起」並びに「臣民道」の本體を體得し、こゝにその一切の修養並びに活動の源泉を求めねばならない。

何事に就いても初一念を貫く事ほど大切なことはないが、何よりも先づ我々の生活の基本的態度、我々の行動と思索との核心を、自己の國家並びに民族の永遠の繁榮と幸福とに置くことは何者にもまして大切である。我々が先きに青年は須らく常に雄大、壯嚴なる國家の姿をその胸中に抱いてゐなければならぬと云つたのはこの故である。如何なる社會の動亂、動搖の裡にあらうとも、この精神的態度の中樞をしっかりと把握し、これを飽くまで貫徹するといふ所信を以て武装するとき、我々は安心である。この透徹、明快なる信念を以て、一切の汚濁、醜惡に充ちた雜念を拂拭せよ、斯くして我々は眞に確固不動の自信と膽力とを持つことが出来る。千萬人の敵來ると雖も、我に何等怖るゝところは無いのである。

この點において我が日本の青年は誠に恵まれたる境遇にあると云ふべきである。ゲーテは云つてゐる、「一切の偉大なるものはこれを理解する時、人を教育する」と。日本の歴史は萬國に冠絶して偉大

である、我々の國家は悠久、數千年の昔から神聖なる基礎の上に築かれ、未だ曾つてその誇りを傷けられたる事なく、明治維新以來約七十年の間には世界稀に見る素晴らしい興隆を遂げた。實に斯くの如き輝しい過去に對する現代青年の義務はまことに大きい。青年は過去の偉大さに相應しい者たることを身を以て實證しなければならぬ。

教養のある青年は自己の民族の魂の中にまどろむ最も美しい理想の實現に邁進しなければならぬ。これは極めて平明な理であるが、それには先づこの理想を正しく理解し、その眞意を把握しなければならぬ。それは我が國の歴史を回顧し、その偉大なる人物と偉大なる時期とに研究の眼を向けねばならぬ。而して我々は本書總論において、そのさゝやかなる試みを爲した。かくして得たる「偉大なるもの」から、我々は自己の努力の基準を見付け出し、それに依つて自己を強化し堅固ならしめねばならぬ。

さて、以上は來るべき新時代における青年の二つの重要な精神的要素並びに斯の如き青年の基本的なる心構へ即ち初一念に關する我々の所見の一端である。

併しこれにはもう一つ重要な要素が附加されなければならない。外でもない、それは肉體である。健全なる精神を宿すべき健全なる身體である。我々は我が民族の理想の優れたる運搬者、代表者とな

らねばならぬ。それには身體と精神とを健全に保つ事が肝要である。身體の健康を犠牲にして、精神の教養を求めするのは正しくない。精神的人間も等しく祖國防衛の義務を有するが、身體が精神の重荷に喘ぐやうであつてはならない。身體は精神を支持し、逆にこれによつて高貴ならしめられなくてはならぬ。何となれば人間は身體と魂とそして精神との合一體であるから。

體育に關しては、盟邦ドイツにおいては實に徹底的なる方針が執られてゐる。例へばヒットラー總統の「民族國家教育の原則」の首章のところを見るに、左の如き事が述べられてゐる。

我々は國家の第一の任務を、其の國民の福利の爲に最良の種族的分子を維持し養育し生成させることに見るものであるが、さすれば自ら若い同胞の誕生に對しても此の心遣ひが向けらるべきのみならず、此の若い同胞の中から將來の發展のための貴重なる肢體を作り上げる様に教育せねばならぬのは當然である。

而して一般に精神的能力の前提が當の人間の種族的素質の中に潜んでゐる如く、個々人の教育についても亦何よりも先づ肉體的健康と云ふ事を念頭に置いてそれを促進せしめねばならない。大體に於て健全にして力強き精神は亦健全な力強い肉體の中のみ見出されるものである。肉體的に缺陷ある天才が屢々あるが、之は例外的であるに過ぎぬ。然し乍ら若しも國民の大部分が肉體的に惡

質のものから成つて居るとすれば、假令極く稀に偉大なる人間が生れるとしても偉大なる成果は斷じて得られないだらう。他の類廢した多くの愚民達は其の偉大なる同胞の言葉を全然理解し得ないか、又は斯る驚の如き同胞の飛躍に追隨して行けぬ位に意志的に弱くなつてゐることであらうからである。

従つて民族國家は其の全教育活動を第一に單なる知識の詰込みでなく、眞に健康な肉體の増進に向けねばならぬ。そして第二番目に始めて精神的能力の教育に力を向ける必要があるが、此場合に於ても性格の發達特に意志力と決斷力の促進、及び責任を有つことを喜ぶ様に習慣つける事が第一に來て然る後に、最後に知識的教育と云ふ順になるのである。

此場合、民族國家は、學問は殆どなくても肉體的に健康で強固な性格を持ち決斷力と意志力の充實して居る者の方が學問はあつても肉體的に虛弱な者よりも其の國民全體にとつて價值がある、と云ふ前提から出發せねばならぬ。無論精神と肉體との調和と云ふ事は必要である。此意味でギリシヤの美の理想が不滅である所以はそれが卓越せる肉體と輝かしい知識として高貴なる魂とを驚嘆に値する程に結合せしめてゐるからである。夫故、國民の肉體的訓練は民族國家に於ては個人の問題には非ずして此の國家に依つて代表され保護されて居る國民全體の自己保存の要求であり、現在の

國家が今日既に兒童の教育に關して兒童の兩親の自己決定權に反して全體の權利を以て強制的に學校に入れてゐるが如く、否それよりもより高き程度に於て民族國家は自己の權利を徹せしめることを要する。小兒の時代から將來の生活に堪へ得る如き肉體を鍛へる様に留意し一人たりとも書物の蟲にならぬ様にさせねばならぬ。

盟邦ドイツの特に體育に重點を置ける教育方針の如何にも徹底せるを見るべきである。ドイツにはまたハンス・フォン・チャンマ・ウント・オステン¹の率ゐるドイツ體育總聯盟といふのがあつて、青年の體育に任じてゐる。其參加人員は凡そ二百萬位人で、機械體操、體操、フットボール、ラグビー、クリケット、排球、庭球、拳闘、水上競技、スケート、スキー、フエンシング、ボート、登山、ホッケー、自轉車等々、二十餘種の専門科目があり、夫々専門の指導者を任命して、盛んに青年の筋骨の鍛錬を圖つてゐるのである。日本のスポーツが兎もすれば大衆性を缺き、少數の卓斷した選手の養成に局限されようとする傾向のあるに反し、ナチス・ドイツの體育スポーツが極めて大衆的に行はれてゐる事は羨むべきである。とに角ドイツの青年は飽くまで強健、素朴であり、日本の街頭や喫茶店に見るやうな青白いウラナリ青年はドイツでは殆んど見られないとの事である。

またドイツの青年男女は好んで自然の懷に飛び込んでゆく。彼等はこれを最も楽しみにしてゐる。

ドイツの青年運動の先驅が山野を跋涉し、心身を鍛錬したワンダー・フォーゲルであつた事で察せられるやうに、ドイツの青年は自然との接觸を熱愛する。底知れず高く晴れわたつた青空の下に、青年男女が三々伍々打ちつれて、筋肉の盛り上つた腕、逞ましい毛脛を、半被の襦衣や半ズボンの蔭からのぞかせながら、嬉々と語り、高らかに民謡などを口誦みながら山野を跋涉してゆく姿は、傍から見ても、まことに明朗で微笑ましい風景であるらしい。

西歐と東洋とではその生活形態並びに生活感情に、色々な相異はあるにしても、我が日本においても斯の如く明朗、潤達、而かも健康に恵まれた青年男女が、田舎にも都會にも、學校にもオフィスにも充ち溢れるに至らんことは我々の衷心より希ふところである。左様な日の我國に一日も早く來らんことを念願しつつ、我々は先づ與へられた條件の下に、最大の努力を致さねばならぬ。これに就き我々の大日本聯合青年團では過般我國體育界の諸權威の參加を求め、「青年團體力検査要項」を制定、これを本團の各加盟團に通牒し、その協力を得て我國青年體位向上の總動員運動を起してゐるのである。讀者の参考のためにその計畫の概要を述べて置かう。青年團における體育運動は、青年の精神力を強化し、頑健鐵の如き身體を鍊成し、剛毅、潤達、明朗な精神を涵養すると共に、堅忍持久、不撓不屈の精神を訓練し、躍進的氣魄を以て日本精神を顯現するを目的としてゐる。而してこの爲には青年が

日常實行の目標となり得るやう、簡明にして且つ生活に即し、尙興味を有し得るが如き體力検査種目並びに検査標準でなければならず、左記要項はこの見地から作製されたものである。

即ち選定された體力検査種目は、走、跳、投、力、綜合の五種目で、その等級を初級、中級、上級の三に分ち、夫々の検査評準は左の通りである。

- 1 走 二〇〇〇米 初級九分以内、中級八分以内 上級七分以内。四〇〇〇米 初級二五分以内 中級二〇分以内 上級一七分以内
- 2 跳 走幅跳 初級四米以上 中級四米五〇以上 上級五米五〇以上
- 3 投 砲丸投（八封度・左右投を加へる） 初級一八米以上、中級二〇米以上、上級二三米以上
- 4 力 重量運搬 初級五〇瓦重量運搬・距離五〇米 中級五五瓦重量運搬・距離五〇米 上級六〇瓦重量運搬・距離五〇米
- 5 綜合 建國體操 初級、中級、上級とも各前操、後操、終操

右の體力検査種目のうち『走』の二千又は四千米は、青少年として如何なる場合でも走通さねばならぬ距離で身體の鍛錬と持久力養成の運動である。『跳』に走幅跳を採用したのは青少年が愛好する男性的な運動で、助走の速度空中飛躍による身體の支配等で敏捷性巧緻性を養成するに勅果的であるから

である。『投』の砲丸投左右兩投は身體の調和的發達を促進させ、短時間に狭い場所で出来る運動だからである。『重量運搬』は自己の體重に近い重量を擔ぎ五十米の距離を運搬する體力強化に有効な運動で、我が國青年の間でも古來行れて來た種目である。『綜合』に勇壯な建國體操を擇んだのは日常生活に一聯の體操を取入れることが保健上肝要と考へたからである。

さて、我國現代青年教育の缺陷、従つて現に生じてゐる我國青年層の通弊とも稱すべきものは、智性に、徳性に、生活力に、いづれも青年らしき潑瀾たる力の乏しいこと、換言すれば、鍛錬の缺乏ではあるまいか。鍛錬を経ない、耳學問、目學問の氾濫の結果は、兎もすれば青年をして、怯懦、卑屈ならしめ、雄渾なる氣魄と逆境をしも猶克服せんとする骨力とを萎縮せしめ勝にした。温室に培養された花は、朔風吹き荒ぶ戶外には通用しない。幾年かの試練に堪へて猶且毅然として大地に根を構ふる巨木は、見るからに人をして頼もしさ力強さを覺えしめる。問題は、見かけのよい温室の花となつて貰ふか、見かけはわるくとも不動の巨木になつて貰ふかの孰れを執るかである。先覺指導の立場にゐる者自身の深き反省と、青年自らの心構の鍊磨が必要である。

人文の高度化した現代に處し、國際情勢の紛糾裡に東亞の盟主たる我國運の展開を擔ふに當つては、素より卓越した智性を涵養しておかねばならぬ。而も其の智性は決して單なる詰込や丸暗記のみから

は生れて來ない事を我々は牢記せねばならぬ。皇基の振起を目さした活智識の吸收運用でなければ、智識の繩で我と我が身を縛してゐる嫌なきに非る現代時弊を更に上塗りすることになる。講壇のみの智識教育に止めずして、事上鍊磨、體驗を通して鍛鍊された智性の育成に迄高めなければならぬ。鍛鍊せられざる智識は畢竟雜學であり、口耳三寸の小才に過ぎぬ。現實の問題處理に當つて、活殺自在の活智識を揮ふ爲には、何といつても師友相集つての切磋琢磨が必要である。

以上智性の啓發について鍛鍊の缺乏を嘆じたのであるが、同様の事が德育についても、體育についても謂へると思ふ。否德育、體育に關しては、智性教育の根本的基地として更に一層嚴肅なる意味に於て鍛鍊倍加の要を提唱してよろしい。一旦の成敗に人生の希望を失つたり、一片の毀譽に喪神して了ふ様な薄弱な人間は常態の時代でも世の落伍者たるを免れないが、況んや現下の時局の如く、物心を一如して國民總動員の覺悟と之が實踐體制を築き上げなければ、民族發展の大動向を遂に見失ふに至る虞がある様な國家飛躍の歴史的段階に於ては、左様な薄志弱行の徒は我國民に一人でもあつてはならぬと考へる。時局擔當の繼續舞臺において常に其の最後を力走する者が青年層である以上、青年教育における鍛鍊の強化は今や緊急の重要國策なりと斷ぜねばなるまい。

尙ほ徳性の涵養について述べれば、我國德育の中樞が我が國體觀念の明徴にあることは申すまでもなく、我々の初一念も亦そこにあることは先きに述べたる通りである。この德育の効果は日々の具體的實踐に如實に顯現され、ばそれでいゝと云ふ丈けではなく、我々はこれに就いても、その陶冶を常時心掛け、自己の搖ぎなき信念を彌が上にも不動のものとなせねばならぬ。そのためには毎朝家庭において神拜を爲すとか、一定の日を定めて神社を參拜致し、自己の心中に護持する尊王敬神崇祖の信念を形に現はすことが極めて肝要である。斯の如きは單なる形式に非ずして、そは一の鍛鍊せられたる信念に外ならぬ。我が國民が古くから行ひ來れる伊勢詣り、或は時局に際し明治神宮參拜者の特に引きも切らざる所以のものはまさに此點に存すると思ふのである。要は形式に泥まず、またそれを輕んぜず、努めて神拜を怠らざるところに、眞實の國民精神の長養を心掛くべきである。

最後に所謂人生觀、社會觀、國家觀、世界觀に就いて一言すれば、我々にとつて重要なものは、その歸一すべきところであつて、これを堅確に把持してゐなければならぬ。云ふまでもなくそれは我が國體である。これらの一種の史觀はそれを有つ個人において、夫々が脈絡のある一貫したものでなければ全く意味を爲さないことを注意すべきである。人生觀に就いては誰に従ひ、世界觀に就いては他の誰の説がいゝと云ふのでは全くのナンセンスである。更らにこれらのものは一種の理想であるが、理想はその實現可能の方向を如實に我々が體得し得るものに非ざれば、單なる空想に墮するのであり、

我々の行動の基準にはなり得ない。更らに理想はその國民において一致したものでなければならぬ。これらの點に關し我々の意のある處は本書全體を通じて隨所に明らかにしたるを以て、こゝにこれ以上の説明は省略する。

唯、總てのことがさうであるが、特に國民教育においては常に一貫せる理想の下に、一貫せる方針が執られねばならぬと考へる。日本においては教育勅語に於て夙にその大本が明示せられてゐるのであるが、前にも述べたる通り、今まで果して勅語の御趣旨を體し、一貫した教育が行はれてゐたかどうか、現在再検討されつゝあるのである。轉機日本はまた教育方針の轉機をも促しつゝある。斯の如き情勢はまた世界的でもある。例へば盟邦ドイツのナチス教育では政治と教育とが不可分のものとされてゐることがその一大特色である。

即ち政治教育學といふものをその教育理論の根本となし、その政治教育學といふのは歴史と傳統とを有する具體的なるドイツの現状に則する教育理論であると云ふのである。ナチスの理論よりすればナチス以前の所謂自由主義者、所謂人道主義者なるものは具體的な現實の生活に則せざる抽象主義、日和見主義者であつて何等の生命も實力も持ち得ないものとするのである。現實の事實としては、現實の國家的、政治的關聯を有せざる一般的人間といふがごときものは存在しない。即ち實際の國家及

び政治に關する畫然たる態度を保持することは、眞に人間を人間たらしむる所以の條件であつて、自然的、政治的人間こそは眞の人間の實在であると見るのである。かゝる立場よりして教育は現實の生きた人間を教養するものとし、一定の世界觀、人生觀の下に行はれなければならぬと云ふのである。而してその世界觀、人生觀は國家の主義、方針によつて決定せられるものでなければならぬ。何等の歴史的背景なき抽象的、一般的人間といふが如きものを教育の理想とし、それを教育の目的とすることは排斥せられねばならぬとする。こゝにナチスの教育の全體主義、統制主義、具體主義が成立するのである。この點のみよりすれば、イタリアのファシズムの教育と極めて近似するものではあるが併しその思想的基礎は決してドイツ理想主義に屬する精神主義ではなくして、寧ろ經驗主義、實驗主義に基いてゐる。換言すれば、同じく全體主義、統制主義、具體主義であつても、イタリアのジェンティレの如き精神主義の哲學より生まれ出でたるものにあらずして、ルストといひジエムといひ又ヒットラーといふが如き實際政治家の現實政策より出でたるものと考へられてゐる。

またイタリアのファシズムの教育理論並びに制度は有名なるジェンティレに依つて樹立せられたのであるが、彼は早くよりイタリアの教育界に不満を抱き、「國民教育團」なるものを組織して、自己の教育思想を主張、宣傳してゐた。そしてムッソリーニのファシスト運動起るに及んで、これと合同し、

遂に一九二二年の十月三十一日即ちムソリーニがローマへ進軍した第三日目にジエンティレは直ちに文部大臣に任命せられ、翌年の一九二三年には教育全般に關する大改革を斷行した。かくしてイタリアのファシズムの教育は理論的にも實際的にもジエレティレ及びその同志の手に歸してゐるのである。

ジエンティレの精神主義の哲學はカント哲學を基礎とするヘルバルトの教育學說又オイケン哲學を基礎とする所謂人格教育學と同じく一種の個人主義に屬するものとして、ナチスの教育理論家からは非難せられてゐるが、ジエンティレはそれ等と同じ精神主義的哲學の立場よりしてファシズムの教育理論を産み出してゐるのである。ジエンティレに従へば、精神それ自身は統一を本質とする。統一は即ち全體主義となると考へるのである。次にジエンティレの理想主義は現實と對立する抽象的のものにあらずして、具體的精神生活そのものの中に精神の本質を認める所から、その當然の歸結として歴史を尊重する。かくしてイタリア國民といふ意識、即ちイタリアの中に展開する具體的精神生活の所産としてのイタリア文化、イタリア國家意識といふものを精神の本質的具現と見るのである。かくしてイタリアの國民であるといふ意識そのものを所持することを具體的精神生活と見るのである。かくして具體的なる現實生活の諸形態と見るべき家庭、學校、社會、國家等はそれ／＼精神生活の具體的實現と考へ、それに則して精神自體の本質的發展を遂げることが教育であると考へる。かくてナチ

スにおいて非難攻撃されてゐるドイツ理想主義哲學に屬するジエンティレの精神主義哲學がナチスの教育主義と同じく國家主義、國民主義を採つてゐるのである。

以上は盟邦ドイツ並びにイタリアにおける所謂全體主義の教育理論の一斑である。一方は精神主義を基礎とし他方は現實主義を基礎としながら、夫々同じ結論に到達してゐる。我が國においても政治と教育との關係の漸く密接ならんとする折柄、青年の大ひに研究を要すべきところである。

第六章 新らしき生活

一

次に然らば、現代青年は何を爲すべきか？ これが来るべき問題である。我々の初一念は既に確立せられた、この初一念を何處で且つ如何様に、發揮すべきか？ 次の問題である。

本書全體を通じて我々は繰り返し／＼革新の切要なる所以を述べた。それは事實革新さるべき事態が我國の到る處に、あらゆる生活分野において存在するからであり、また他方において既に革新そのものが、部分的にはあるが、また究極の理想から云へば、まだ多くはその端緒期を脱してゐないとは云へ、漸次實行されつゝあるからである。斯の如き事態は我々日常目前に起りつゝある事實でありこの動きつゝある社會に眼を掩ふことは出来ない。これを否定し、その由つて来る所以の説明を隠蔽し、廻避せんとすることは偽瞞であり、虚偽である。故に我々は斯の如き現實を大膽に確認し、而してこれに對し、我々青年は如何に爲すべきかを講ぜんとするのである。

自由主義的、個人主義的政治・經濟の運営は最早や行詰りつゝあり、之に代りて革新政治・計畫經濟の必要が朝野に叫ばれてゐる。資本主義的自由放任の政策では、現代の貧困、窮迫、矛盾、對立を克服することが不可能であると考へられて來た。政治の貧困、社會惡の増大、文化の偏倚も重大なる問題である。一個清新なる是正、改造が爲されなければならない。現代社會のあらゆる機構並びにその運用方法に對し、公正妥當且つ健全なる意圖を以て、而も嚴密なる批判力に依り、これを再検討し、かくして、より高度の、より進歩せる政策、制度の再建、樹立が最早や必至の勢となつてゐる。

今次事變以來、斯の如き社會の要望は益々大を加へて來た。當面の戰爭目的達成のためにもそれが必要であり、戦後の經營に備へるためにも、この事の極めて切要なることが看取される。要するに、日本は今次事變の果敢なる解決並びに雄大なる大陸經營の道において、新なる日本、醇化せられた道の國日本に發展、轉化せんとしつゝある。

來るべき理想の國家並びに社會が如何なるものであるか、今のところその全貌は全く豫測できない。しかし乍ら、それが全體主義に基づく新國民主義の社會經濟體制の樹立、政治の計畫化、廣義國防の實現である事は略明らかである。

これが今日の歴史の流れであり、所謂昭和維新と呼ばれる所以である。即ち恰かも維新當時におけ

るが如く、歴史の波は昂まり、狂瀾怒濤、河海は大ひに荒れてゐるのである。我々の使命はこの荒波を乗り切り、この波間を潜つて目的の彼岸に到達しようとするのであつて、この荒波の中に自らの身を投じ、溺れて死んで仕舞ふとするのでは勿論ない。また我々は徒らに無益に、この歴史の潮流に抗し、歴史必然の流れを喰ひ止めようとしてゐるのでもない。そこで、この間に處し必然的な歴史の流れが一體何處にあるのか、それを見極めることが重要なのである。總論において我が國史を回顧し、我國の特殊性を研究したのは斯の如き歴史の必然性が我國の過去において何であつたかを知るためであつた。もとより甚だ不十分なものであるが、青年諸君が斯様な意味で我が國の歴史を再び見直されんことを先づ切望するのである。

次に青年の任務は現在のかゝる革新的情勢の動きを認識し、その意味する處を分析し、それを批判する能力を先づ養成すべきである。

換言すれば國家、社會の現情勢を自らの深刻なる問題として採り上げることである。それを自己の將來の運命として考へ、如何にせば妥當、公正なる解決に達し得るか、又如何なる解決が爲されつゝあるかを觀察し、研究すべきである。斯の如き分析、批判に習熟し、その能力を青年の間に涵養しおかざれば來るべき時代の建設者たることは出來ない。然しながら曾つての若き社會運動家の如く、空想

的な、且つ實現不可能の故を以て歴史的必然性を缺いた、批判や意見では駄目である。健全にして建設的な批判が大ひに爲されなければならない。無責任な批評のやりつばなではなく、實現可能な具體的成案を自分の問題として考案しなければならぬ。青年は現存社會の缺陷、不正、汚濁を自己の責任と感じ、あらゆる力を盡してその改善を考へねばならない。この點において現代の青年はあまりに一般社會情勢に無關心であり、冷淡である。あまりにも利己的であり、自由主義である。目前の利害乃至自己自身の問題には極めて熱心であるが、そしてこれは生活問題其他から考へて、一面無理からぬ事であるが、自己が本來全體の一部分であり、全體はまた自己をその一部分と成してゐるとの全體觀に基づき、左様な自己中心の問題は、究極には全體との聯關において解決されるべきものたることを悟り、考察の觀點を常に全體たる、國家、社會の中に置かなければならぬ。斯くせざればまた自己自身の問題の解決すら恐らく不可能であらう。

本書卷頭において、我々は明治維新の當時を回想したが、然らば私は讀者に維新の志士の如くになれと要求したのであらうか。夫れ然り、豈夫れ然らん哉と言ひ度い。つまり、其志を承繼し、其行動を踏襲する必要なしと云ふのである。その理由は、極めて簡單に、當時とは歴史の段階が既に變化してゐると答へればよい。明治維新の志士は主として當時の青年公卿及び下級武士であつて、其他の農

工商の庶民の子弟即ち一般青年大衆は殆んどこれに参加してゐないのである。皆無では勿論ない。これには色々理由もあるが、概して言へば當時の青年大衆はかくの如き革新の情勢を認識し得る能力を有たず、またその自覺に到達し得る程の社會的條件下に置かれてゐなかつたからである。第一、當時の一般庶民階級は獨立の人格者としての地位が左様に判然たるものではなく、寧ろ全然それが認められてゐなかつたと云へる位である。従つて、特殊な例外を除いては、到底あの様な大業に参加し得る資格を持たなかつた。また當時は文化進まず、交通も極めて不便であつたから、彼等は一般にか様な歴史の大勢を知るに由なかつたのである。

ところが、現在は當時とはまるで情勢を異にしてゐるのである。即ち國民の總ては皆一個獨立の人格者として充分認められており、その教養も高まり、更らに立憲制度が布かれて、民意暢達の機構が夫々備はつてゐるのである。もとよりその運用の方法や機構そのものにも、大ひに改善の餘地があり、現にそれが部分的にでも、改善されつゝあるのが所謂革新の情勢に外ならない。斯の如く文化の高度に發達せる現代社會の革新の方向は、國民の總てが納得し得る方向、或は國民全體の要望に對應して改革が爲されるのである。従つて國民は斯の如き改善への要望を、その至公無私の道において決定し、その全體的な意思表示をすれば良いのであつて、その意思表示は爲政當局に公式非公式に誤りなく傳

達される機構並びに一般的情勢に現在になつてゐるのである。

斯の如き次第であるから、往時におけるが如き、又外國におけるが如き、暴力を行使せざれば革新が斷行できないと云ふが如き事は我國では一般的に前提されてゐない。我國に於ても曾つて左右兩翼に亘る斯の如き實行運動があつたが、何れも失敗してあり、それが我國における政治革新の方法として、寧ろ極めて非歴史的、非國民的であり、従つて全然妥當性を缺如せることを實證してゐるのである。是は云ふまでもなく、國體を輕んじ、國憲國法を無視したる爲であり、又それが我が尊き國體の下に、眞に美はしき社會を作らんと努力しつゝある一般國民大衆の總意に背いてゐたからである。

されば、我々は國家の將來を思ひ社會の現状打開のための雄志は維新の志士と同じく、絶対に高潔純正で無ければならぬが、その實行の方法、手段は歴史の發展段階を異にせる今日においては、當時とは全然別途の道を發見しなければならぬ。即ち當時におけるが如く、國民中の比較的少數者の力に依るのでなく、全國民の意志、愛國心の自らなる發展として生れる改革手段並びに形態でなければならぬ。

況んや、青年は未だ準備の時代であり、待機の時代である。斯の如き政治の改革を自己直接の使命と考ゆるが如きは斷じて不可である。またいま我國內に胎動しつゝある諸々の革新の動きの中に青年

が直ちに飛び込むことも不賛成である。我々が斯の如き諸種の革新情勢に對して一定の體勢を整へ、それに對して心の準備、頭の用意を爲しおくことは正しいし、また當然であるが、青年自體がこの意味の政治運動に参加することは未だその時機ではあるまい。云ふまでもないが、こゝに革新とは現在の戦時體制、從つて國家の推進力を結果において強化するものであり、そしてそれに必要なる革新政策の實行に協力せんとするものであり、つまり斯の如き國家の革新政治に對し、清新潑瀾たる活氣を興へんとするものである。國家の前途を深憂する青年として、之は當然であり、また正しい態度であると思ふ。

が併し、青年の前には青年自體として解決すべき、もつと着實な、もつと眞劍な重要問題が一つ横はつてゐる。曰く、それは青年自體の團結である。全國青年層の大同團結である。

今日は個々の青年が一騎拔駆けで事を成すやうな時代では最早や無い。總ては協同、協力である。現代社會において個々人の力をあまり過大評價することは禁物である。青年は正しい目標と目的の下に先づ自らの組織と團結とを持って！そしてそれを健全にして且つ進歩的な全國的團結にまで發展せしめよ。青年の國家、社會特に政治に對する一般的态度は、かやうな中央的な團體において、その一般方針が決定せらるべきである。個々の青年はその一般方針を遵守すべきであり、また正しい中

央の方針が樹立されるやう、その團體内で活動すべきである。故に現代青年の當面の任務は先づ斯の如き一大團結々成の機運を全國的に捲き起し、その目的達成の爲に健闘すべきであらう。

が然し、こゝに注意すべきはか様な全國青年の一大組織は何等かの政治的目標を持つて行はるべきではない。我が日本の青年の個々に對し、一般的に課せられてゐる義務、使命が同じくこの團結の使命たるべきである。云ふまでもなくそれは我々の初一念、即ち「皇基の振起」である。我が尊き臣民道の新なる展開である。我國の青年にとつて、國家、社會に關して一般的に持つべき目標はこれより以外にあるべき筈はなく、又あつてはならない。次いで、より具體的な對政治方針はこの根本的立場に於て、眞に至公無私、熟慮、検討の上に決定せらるべきで、斯の如きはもとより獨り青年團體のみによつて決定さるべきではなく、國家全體の問題であり、夫々國家の機關と聯合協議の上決定さるべきことは云ふまでもない。か様なわけであるから、個々の青年は先づかゝる團體の結成に力を盡し、政治に對する自己の意思はこの全國的な團體の意思として發表すべきである。たとへ青年の意思が公明正大であつても、斯の如き方法をとる事が眞に現在の時局に副ひ得る所以である。

右の點に關し盟邦ドイツのヒットラー・ユーゲントの生成過程は我々にとつて尠からぬ參考となるのである。たゞ彼我國情の相違により、ドイツの經驗を以てそのまゝ我が國に適用できないことは論

を俟たない。が併し、他方において青年の一大團結を必要とする點は、今の我國も當時のドイツと略々同様であることを看過してはならない。駐日ドイツ青少年代表シユルツエ氏の言に依れば、

世界大戦に先立つ數年間、ドイツは富裕な、しかも内部的に基礎の強固な國である様に見えた。同時にドイツの青年は、その將來について何の心配する必要がないやうに思はれた。しかしその當時、物事を少し深く觀察する眼を持つた人——そんな人は決して少くなかつたのだが——は、ドイツが盛んに工業化され、大都市が慌しく建設され、そのためマルクス主義が廣汎な労働者と若き知識階級の中に根を下す可能性を獲んだことを認めざるを得なかつた。深い眼識をもつたものは、ピスマークのもとに外的な力に上る國家の統一は成就されたものゝ、内的に深然たる融合を遂げやうといふドイツ民族の古い夢は、それによつて決して實現されてゐないことを認めないわけにゆかなかつた。具眼の士は、當時のやうな高度資本主義の時代においては知識階級の人々が表面どれほど國家的な立場を示すにせよ、結局唯物論的な考へ方に馴れてゐて、到底マルクス主義の嵐に抗し得るものでないことを看過することが出来なかつた。

時恰も世界大戦が勃發してドイツはあらゆる方面に向つて生死の闘争を遂行することを餘義なくされた。その場合、血の聲は、マルクス主義のいかなる教義よりも、資本主義思想のいかなる影響よりも強力であつた。ドイツ民族は一丸となつて巨大なる闘争を続け、四年の久しきにわたつて優勢なる敵國の力に抗したのである。だがつひに遠く戦線の背後にあつて密かに破壊工作をめぐらしつゝあつた敗戦主義者共の裏切によつて、悲惨なる終焉が齎された。ドイツは敗れたのである。

二百萬の同胞は異國の土に屍を埋めた。過去數年間の飢餓と窮乏とは、抵抗力を破壊し去つた。かくしてドイツ民族とは縁故のないユダヤ人の徒黨がドイツの政權を掌握し、純軍事的或は經濟的崩潰よりも遙かに大仕掛の崩潰を、組織的に導き來つたのである。ドイツでは「名譽」や「誠實」の觀念が地を拂はんとする淺ましい時勢が始まつた。階級闘争は國民を引き裂いて互ひに噛み合はせた——そしてドイツの青年は、實にかゝる情勢の眞只中に立たされたのである。

彼等は自ら未來の生活を建設しなければならなかつた。しかしこの未來には何の希望も見えなかつた。彼等には職がなかつた。誰一人として大きな高遠な目標を立て得るものはなかつた。隨所に氾濫するものは憎惡と自暴自棄ばかりであつた。

この時一介の參戦兵士たるアドルフ・ヒットラーは、民衆の中から起ち上つて、彼の主義を説きはじめた。沈没した信仰を再建し青年に偉大なる義務の觀念を植えつけることに着手した。ドイツを救はんとする激烈な闘争の數年が経過した。共產主義は恐怖手段を以て街頭を支配した。知識階級には

とてもこの敵に有効に立ち向ふ力がなかつた。さしやかな参戦兵士の一團と、無爲にして衰滅の道を辿ることを欲しない青年の選良だけが、アドルフ・ヒットラー指導のもとにこの敵に對抗した。彼等の信念は他のものをも把へずにはおかなかつた。ナチス運動の戦列から一人の犠牲者が殞れる毎に、この間隙を満すため百人がそこに集つて來た。新らしき偉大なるドイツへの信念は、恐怖手段よりも強く、金力よりも強かつた。わづか數年前まで軽く一笑に附せられてゐた事柄が、一九三三年一月三十日、つひに現實となつて現れた。ドイツは自分自身を再発見したのである。アドルフ・ヒットラーは世界戦争の戦死者の死に意義あらしめたのだ。そして、闘争と信念とのうちに強く團結した追隨者の援助によつて、彼は、ドイツ史から汚辱の過去を抹殺し、ドイツ民族の偉大なる憧憬の夢を實現すべく發足したのだ。

この勝利の日が來る數年前からすでにヒットラー青年團の最初のグループが結成されてゐた。かつて物質的精神的に深刻な苦惱を経験した若い人々が、これらのグループの指導者であつた。工場から、大學から、彼等は出て來て相協力して新しい教育のシステムを作りドイツ青年が遂行しなければならなかつた任務の遂行を不撓不屈の努力によつて準備し、そして毎日に、行動とアドルフ・ヒットラーへの忠誠とを通じて公明正大と意志の強固さとを立證した。そして一九三三年一月三十日青年男女の

精華二十萬人が、ハーケンクロイツの旗に従つて行進した。その時以來、新しい國家の保護の手が、ヒットラー青年團の事業の上に差し延べられた。青年團の任務は、すべての身分と階級とを超越して全ドイツ青年を一つの團體に結成し、これを統一されたドイツ國民の映像たらしめることであつた。多年アドルフ・ヒットラーに隨つて忠實にその義務を果して來たバルドゥア・フォン・シラハが、この巨大なる事業の遂行をヒットラーに委囑された。彼は斯る全ドイツ青年を包括する大團體は一片の命令によつて創造され得るものでない事を知つてゐた。彼は兩親や子供達の信頼をかち得なければならなかつた。彼は彼の選出された指導者團を通してまた彼が若き人々のあらゆる生活領域に亘つて作り出した主義原則を通して、この事業を成し遂げたのである。バルドゥア・フォン・シラハが今日、全ドイツ青年の指導者として、七百萬の青年男女を結成し得たのは、多年にわたる彼の不撓不屈の有効な活動に對する全ドイツ國民の感謝の現れであつたのだ。

ドイツ國家の青年團はかくして成立したのである。一つの國家が一つの獨裁的な命令によつて一つの偉大な青年の組織を創造したのではなく、全ドイツの青年が自ら彼等の國家のために、アドルフ・ヒットラーの國家のために結合したのである。

右の通り、ヒットラー・ユーゲントはヒットラー氏に率ゐられた國粹社會主義黨の勝利のために戦

ひ、またその勝利と共にその地位が確定したのである。この戦いにおいてヒットラー・ユーゲントは指導者並びに團員二十一名の若き蓄を散らし、數千の少年がその犠牲的精神のために傷いた。而してヒットラー・ユーゲントはその不斷の闘争とこの若き闘士の貴き死骸を踏み越えて、益々その信念を固め、活動を強化し、團員は増加し、その團勢は黨の擴大強化と同一歩調を以て進展し、遂に最後の勝利を獲得したのである。

斯の如くヒットラー・ユーゲントはその成生の最初より國民社會主義といふ一つの政治的目標を持ち、その爲に闘ひ、國家再建後の現在においても、亦この目標の下に組織されてゐるのである。不當な媾和條約によつて、その生活の權利と生活の可能性とを奪はれた國家の青年達がその現状を打破し、國民の更生を決意し、熱烈なる感激を以て赴くべき、それは唯一の道であつた。彼等はドイツの政治的更生といふことに最も緊急、不可缺の歴史的任務を見たのである。ドイツはヒットラー氏の國粹社會主義によつて遂に救はれた。が併し國內における闘争は終熄したかも知れないが、國外における對立は依然たるものがある。かくして勝利を得たる今日においても、ヒットラー・ユーゲントはこのドイツ國家の最高目的の爲に戦つてゐる。そしてその政治的目標を自己の團體の政治的目標としてゐるのである。

以上述べたる通り、現在の我國の情勢と當時のドイツとは大分相異なるのであるが、青年が一致團結して國難に當るべきことの切要なる點はまさに同じである。我國において戦時中並びに戦後において種々重大なる問題の發生、繼起すべきは論を俟たぬ。併し乍らドイツにおけるが如く共產主義が擡頭し、以て國危しと云ふが如き事は皇國日本において、今後最悪の場合においても到底豫想し得ざるところである。が併し、種々なる思想の暗流があり、その不安動搖は多かれ少かれ免れざるところであらう。特に國民生活の問題がどうなるか。赤字財政の前途は如何等々、經濟上の重要問題が發生し、國內の紛糾は免れないであらう。とまれ漫りなる豫想は慎しむ可きであるが、何れの國においても戦後の經營は仲々の大事業であり、反而戦時中より至難であらう。これらの事は彼の歐洲大戰の結果、各國が如何に苦惱し、困惑したかを見れば全く思半ばに過ぎるものがある。

斯く觀じ來れば我國青年の任務たるや誠に重大である。青年蹶起の秋はまさに來た。最早や些かでも躊躇峻巡すべき時ではない。一大社會變動は迫りつゝある。昭和維新の叫びは益々聲高く叫ばれるであらう。

この間に處し、我國青年の任務は須らく健全なる精神を以て健全なる團體を組織し、國家の搖ぎなき中堅、不動の支柱として、無用、有害なる動搖、不安を防止し、皇國日本を萬代の安きに置き、眞

に社會福祉の實現のために闘ふべきである。如何なる事態が発生しようとも、常に透徹冷靜、眞に國家社會全體の爲に闘ふべき義務と責任とを有する。

青年が克く斯くの如く闘ひ得る爲めには、彼等の掲ぐる旗印が公明正大、純一無垢、萬人の渴仰し、崇敬し得るものでなければならぬ。我國の青年がかねて「皇基の振起」を志し、皇國のために一身を挺せんとするの覺悟あることは我々の熟知するところである。今やこの大旆の下に、一致團結すべき時機は到來してゐる。個々の青年諸君の生活上、社會上、經濟上の種々なる條件の差、それに基づく不平、不満、矛盾、對立等々は、こゝに顧みる必要はあるまい。何となれば斯の如き區々たる世上の差別の一切を超越すべき、青年共通の一大目標が樹てられたからである。我々は何者を措いても、先づこの一大目標目指して集結、勢揃ひをしなければならぬ。

日本の全青年は今やまさに斯の如き理想を掲げて起つべきである。起つて大いに世を覺醒し、神州未だ亡びざるの意氣を天下に示さなければならぬ。青年諸君の愛國の至情、憂國の志は決して朽ち果てたのではない。唯それが表面に現はれなかつただけだ。今やそれを正々堂々と公明正大に世に現はす時が來てゐる。

青年諸君は自ら起たねばならぬ。起つて、眞に我國の將來を負擔する者の正義と純情とを示さなけ

ればならぬ。國家はそれを期待し、社會はそれを希望してゐる。青年諸君に活氣なく、經綸なく、元氣なきは國家の堪へ得ざる處であり、社會の默視し得ざるところである。

今や待つべきの時ではない。人から手を差し伸べられるのを待つ時ではない。こちらから手を差し出すときである。

諸君は既にいろ／＼な團體を持つてゐる。曰く大日本聯合青年團、大日本女子聯合青年團、産青聯全國聯合、日本基督教青年同盟、日本青年協會、更らに労働組合、農民組合の青年部、學生諸君の團體等々、先づこれらの團體が自らその組織を擴大し強化し、出来るだけ多數の青年を包容しなければならぬ。次いでこれらの諸團體の聯合が企てられなければならぬ。目標は常に一つである筈である。故に各團體間の利害關係の克服し得ざるものゝある道理はない。

もとより夫々の團體は夫々の使命を有し、相異なる、或は相重る活動分野を持つてゐるが、それらは偉大なる國家目的の前には容易に整理、調整し得る問題である。各々の團體の使命は、來るべき一大中央組織の、一部門、または一活動方面となればよい。各團體の特種の要求、それは自らまた青年各個の特種なる要求を表現してゐるが、それらは右の如くにして解決されるべきである。

青年は自己の持つ一切の希望、欲求、それはスポーツであり、旅行であり、一切の若き生の欣びで

ある。更らに生活條件の改善、職業技能の上達、福利施設の増大であらう。それらの要求はまさにこの團體に於て解決されるべきである。我々は青年がその青春の生活を樂しむことを無視することは出来ない。彼等の生活はいくら豊かにならうと成りすぎる事はない。あらゆる近代文化の成果はまさに彼等の享受しうべき處であり、又させねばならぬ。

しかし、それは眞劍なる道を通つて爲されねばならぬ。國家、社會への奉仕の爲の體勢を先づ決然と樹立することが必要である。然る後それらの問題は極めて適正に解決されるであらう。青年はいまや全一體となつて生きなければならぬ。青年特有の、華やかな生の享樂も、全一體として享受しなければならぬ。個々の青年が排他的に、他の青年を犠牲にして行ふやうな娛樂はもはや健全なものではない。自己の周圍に恵まれざる多數の青年あるを傍觀しつゝ、自分だけが人生を樂しむといふが如き個人主義は絶対に廢止しなければならぬ。生活に根のないロマンチズム、漠たる憧憬は此際斷然廢棄しなければならぬ。斯の如き自由主義は清算されるべきである。

日本の將來は正に青年諸君の手によつて指導されるのだ。未來の日本國家は諸君の手中にある。故に青年諸君は自ら自己の指導者を養成しなければならぬ。それらの指導者諸君は青年團體の指導者であると共に、將來國家の指導者となるべきだ。左様な指導者を青年は先づ自ら作らなければならぬ。

指導者は如何にして生れるか、他なし、この一大青年團體結成の大事業の途上において。

「青年は青年によつて指導されねばならぬ」とはヒットラー・ユーゲントの教育原理である。日本においても同様である。日本の青年はこの原理を自らの實踐によつて、眞に日本的に樹立しなければならぬ。又曰く、「上に對しては責任を、下に向つては訓練されたる服従を」と。これまた社會の轉換期、國家の革新時代に必要なる原則だが、青年は自らこの關係を造出しなければならぬ。斯の如き原則は本來外部から與へられるものであつてはならない。青年自らの手で樹立されるべき法則だ。國家の危急に際して、緊張せる闘ひの必要なるときにおいて、青年は自らの經驗によつて必ずや容易にこの原理に到達しうるであらう。

青年が自己の發意で、自ら率先して起つべき理由の一つはこゝにある。全體主義は國民の各人の心奥の偽らざる叫び聲となつて出て來なければ、眞に力あり、眞に公正なる全體主義たり得ない。危局迫つて慌てゝ出來上つた全體主義では物の役に立たぬ。その爲には先づ青年が醇乎たる日本的の全體主義者として、社會に登場しなければならぬ。かくの如き理想の把持者として先づ青年の精神が轉化純化されなければならぬ。

青年は自ら學ばねばならぬ。そは自己の組織並びに自己の指導者の手によつて行はれるとき、最も

理想的である。青年教育の革新は國家の行政上の問題であると共にまた青年自身の問題である。如何に優秀なる青年教育者が養成されやうと、如何に青年教育制度が完備しやうと、肝心の青年そのものが良くなつてゐない限り、それは佛を作つて魂を入れざるものである。教育は單に受動的であつてはその効果は薄い、自ら積極的に求めざれば眞に教育の目的は達せられない。

我國內外の情勢はか様な青年の大同團結を必然的ならしめてゐる。この歴史の必然の線に副つて青年は行動すべきである。而してこの必然の線を踏み越えてはならぬ。何が必然の線であるかは本書全編に亘つて縷々説明せる通りであつていま改めて云ふを俟たない。前に述べたる如く我等は我々の初一念によつて行動しよう。この至公無私の道において、いとも勇敢に闘ふべきである。我々の爲すべき事は多い、また既に多くの事が爲されつゝある。

二

さりながら、青年の能力には肉體的にも精神的にも一定の限界がある。まだ未完成である、完成への途上にある。故にこの若き生命は決して蝕ばれてはならぬ。社會はその爲に萬全の考慮を致さねばならぬ。併し青年自身はその限界内においては自己の全力を發揮しなければならぬ。青年時代をよ

く生き抜いてこそ始めて優秀なる時代の建設者たり得る。

かくして青年の時代は準備の時代である。彼等はそれ自身完全なる社會生活を營んではゐない、また營み得ると自負してはならない。併しこの期間において青年は自己の民族全體の中における使命と自己の國家的義務とを學ばねばならぬ。即ち健康の維持、身體の鍛鍊、性格の陶冶、祖國及郷土の風習の會得、過去から傳はれる諸々の國民文化財の習得、等々。

更らに青年の時代は奉仕の時代である。國家社會へ奉仕しつゝ、その奉仕の意味を體得しなければならぬ。青年の本質的使命は元來この奉仕にあつた。何れの民族においても、過去の教育はみなこの形態で行はれ、偉大なる効果を擧げた。今やこの舊き健全なる思想の復活を要する時代である。平和の時にはこの奉仕の觀念が弛緩し勝ちである。併し戰爭の時代にはこれが強化されなければならぬ。而してそれは極めて當然の理である。

先づ、政治に於ても經濟に於ても又社會に於ても、青年が獨自に解決し得る問題は極めて限られてゐる。例へば知識階級に就いて言へば、官公吏にしても銀行會社員にしても、特別の事情の無き限り、年若き者が重要な事務を自らの責任において處理するが如き事は見られない。また今日會社の重役や政府の大官や其他有力なる社會的地位の椅子に青年がさう容易く到達し得ないことも一般の常識で

ある。先きがつかへてゐて、實力は有り餘る程あつても、それを發揮する地位を得られないのが今日の實情である。社會の指導者と目せらるゝ知識階級にして既に然りであるから、其他の勤勞青年の地位が社會的に極めて向上性に乏しいものたることは尙更ら然りである。要するに青年には社會を現實的に動かす發言權が無いのである。

併しながら、青年をして權威と責任ある社會的地位（經濟的に收入の多いことを必ずしも意味してゐない）に就かしめ、彼等をしてその持てる實力を充分に發揮せしむるは先輩の責任である。聰明にして理解ある成熟せる世代がなければ、年若き世代はうだつが擧らない。彼等の國家、社會の爲に盡さうとする純情と熱意とはその持つて行き場を失ふのである。

青年は民族の春である、併し春にはまだ實りは見られない。若き世代は既に固定してゐる世代に比較すれば常に遙かに豊かであるが、併し青年はまだ固まつてゐない。世の指導的先輩が若し尊敬に値するならば、彼等は青年に對して眞に努力に値する目標を定め得る筈である。これに反し若し成熟せる世代が既に腐朽してゐる場合には、青年はその本來の感情からこれに反抗して立ち上るかも知れない。けれども青年自身には未だ確實なる解決の手段はないのである。青年は一つの可能性であり、希望であるに過ぎない。この單なる可能性、希望がそれ以上のものになる爲には二つの力が必要である。

即ち健實にして、鞏固なる意志を有する先輩と、後輩たる青年の潑刺たる新鮮味である。後者を缺く時はそこに盛り上る、充實せる力が失はれ、前者を缺く時は、よつて以て青年が現代に處すべき賢明なる指導が與へられないのである。

人生を横に分ければ、様々な職業といふ夫々の立場があり、縦に分ければ、先輩、同僚、後輩と云ふ之も夫々の立場と云ふものに分けられる。世の中は大雜把に云つて以上の縦横の分業と云ふか、職分と云ふか、之を要するに相互依存の關係の綜合で動いて行くものだと思へられる。

先づ第一に痛感せられる事は、近頃の青年の間では、先輩と後輩との間の縁が稍々薄きに過ぎてゐはせないだらうか、と云ふ事だ。之には色々の批判があると思ふが、私は大體に於て先輩の方が反省すべきではないかと考へてゐる。世の中が世智辛くなり過ぎた爲か、兎角同年輩の間では、職業を異にしてゐても屢々會談して共同意識を斷やさぬ様にしてゐるが、年層を異にしてゐる間では、例へば學校の同窓會と云ふ様なものに出て見ても、昔程先輩と後輩が親しみ合つてはゐぬ様に見受けられる。お互に夫々の立場で十分考へて見る必要がある。そこで後輩の方でも、進んで先輩に教へを求めると云ふ氣持が足りないかと云ふ非難は受けなければならぬのではないか。又同僚の間でも先輩と後輩との中に立つて、紹介し合つたり斡旋し合つたりする努力に缺けてゐるのではないかと思ふ。もつと

お互に訪ね合ふ事、例へば先輩は機會ある毎に後輩の動靜を檢分し、後輩も亦先輩の動きに後輩としての立場からの批判を禮儀正しく提出してみ、御意見を訪ねて見ると云ふ様な事を、出来るだけ頻繁にする事が必要の様考へる。左様な缺陷をお互が抱いてゐる爲に、時運の進展とか人生に對する見方とか云つたものが、歸一しないし、それにもまして悪いのは、先輩の嘗めたにがい經驗と云ふものが後輩によつて再び繰返されたり、後輩の眞剣な努力に對する先輩の認識不足から意外に後輩を腐らせたりするやうな結果に陥つてゐるのではないであらうか。もつとぞつくばらんに、お互のやつてゐる事、考へてゐる事を話しあふならば、時艱の克服、新しい力強い日本の建設に役に立つべき仕事、事が具體的に進められる様になりはせぬかと考へる。

併し、他面に於て近時革新氣運の勃興と共に、特に官界においてたとへ青年とは稱し得なくても兎に角比較的若き人物が國家樞要の地位に登場し、一脈の清新なる空氣の漂ひつゝあるは欣ばしき事である。斯の如き情勢は社會の上下を通じ、また社會の各界において爾後、發展することが望ましい。新舊世代の交替がもつと果敢に、もつと大膽に爲さるべきである。かくして新らしき革新意識が現實に有力なる發言の機會を持つに至るとき、我國の情勢は餘程變つて來るであらう。政治の運用も眞に時代に即應することとなり、それは國民大衆の現實的基礎の上に立つに至り、搖ぎなき國民的信頼に

援護されて、眞に「正義と公平」の政治に轉化するであらう。

また經濟の部面においても、單なる營利主義は廢棄せられ、公益主義が支配的となるであらう。個人主義的經營に對立して、非個人主義的要素が成長、發展し、それは結局現在の經濟機構の新民主主義的經濟體制への再建樹立となるであらう。國民の生活安定問題はこゝに至つて始めてその窮極の解決點に到達するのである。

先づ夫々の産業が眞に正しい意味の社會的分業の原則によつて、編成替され、統制化され、それに對應して生産の技術的組織の運用が合理化され、生産労働の地位が國家的權威と價値にまで上昇せられる。筋肉労働と精神労働との間の本質的相異は消滅し、各人が夫々自己の肉體的、精神的能力の如何に應じて、各産業部門の夫々の職業において各自適正なる地位を與へられる。かくして單に知識がある故に尊いのではなく、また單に勤勞を爲すが故に卑しいのではなく、一切の人物評價の基準は一つにその人の人格に存することが、公私何れの生活においても判然とされるに至る。併しながら人間には本來容易に消滅し難き、色々な天賦の差があり、それを基礎にして行ふ各人の努力と精進、特に公けのために行ふ各人の努力の差があり、かくの如き、止むを得ざる、併しまた當然にして、公正、透明なる標準によつて、社會に一定の指導者群を發生せしめる。斯の如き指導者の穩健中正、健全無

比なる識見と手腕とによつて、社會の新生面は展開せられ、人力、物力ともに大いに伸張、發展するのである。

かくして生産力の異常なる發展となり、物資は豊富となり、國防力は擴大する。生産の組織の合理化、計畫化と共に分配の組織にも變化が起り、商業の形態も、現在の如く無計畫的なものではなく、もつと消費の實情に即した、計畫性のあるものに轉化する。經濟の根本機構における斯の如き統制、合理化の進展は輸出入の合理化、延いては爲替の安定となり、それは自から物價の合理性、勞働賃銀の妥當性を招來する。こゝに國民生活は極めて安定鞏固なものとなるのである。各人の餘裕ある生活はやがて國民の文化的水準の向上となり、現在よりも遙かに卓越せる、偉大なる諸文化を生産し、至大なる貢獻を世界文化史の上に齎すであらう。

右の如き過程は一面においては都市と農村との關係の調整、合理化となつて現れる。兩者の眞の意味の提携が成立する。かくして工業生産物と農業生産物との間の不當なる價格の差は消滅し、都市住民と農村人との利害相反するといふが如き事態は無くなる。農業勞働と工業勞働との差は單に技術的のものとし、現在の工業勞働相互の間の差と殆んどその差なきに至る。都市にも農村にも、生産に

従事する者の、眞に朗らかな、愛と平和に充滿した家族の團圓が營まれるのである。都市に發達せる極めて高度の科學、技術、藝術、文化の農村への移入は、從來のやうに農村人の徒らなる拒否を受くことなく、寧ろ欣んで受容されるであらう。かくして農村の文化的水準は眞に人間的に向上し、明るい村が出現するであらう。他方に於て都市は農村の美はしき自然、その由緒深き傳統の長所を學び、その否曲され、汚濁に滿ちた、潤ひのない文化を改善し、眞に近代的人間の住むに相應しい壯麗、典雅な都市と化するであらう。

さて、我々は餘りにも美はしき憧憬の夢を追ひ過ぎたやうである。けれども憧憬やロマンチズムは本來青年特有のものである。唯我々はいまこのロマンチズムや夢や漠とした憧憬を追うてはならぬのである。また左様なことを許す餘地はない。青年はいま重大なる國家的任務の前に立たされてゐる。知識青年も勤勞青年も、都市青年も農村青年も夫々の分に應じて國家のために全力を盡すべき時機が到來してゐるのである。既に屢々述べたる通り、我國內外の情勢は國民の一切の力の、強力なる集中を要求してゐる。特に我々青年は我國の偉大なる理想の把持者として、まさに國家の全體的責任者としての自己を自覺しなければならぬ。最早や自分自身のために、或は自分自身において何者かに成るといふ觀念は棄て去らねばならぬ。我々はより大なる全體の生活を我が胸の中に生かし、全體に

おいて、或は全體の關聯の中に於て生きるといふ覺悟の切要なるものがある。

我々日本青年に、いま全國的に課せられてゐる問題は云ふまでもなく戦争である。青年諸君の多くの同朋は今や大陸の戦場において、あらゆる艱難と辛苦とを盡して戦つてゐる。また銃後における青年諸君は或は都市に、或は農山漁村に、或は官公署、銀行會社、商店、工場に、或は學校に、家庭に、夫々その職業に従業しつゝ、また夫々の分に應じて、銃後奉公の誠を致し、邦家のために盡瘁してゐる。我が青年の斯の如き活動が今後とも益々持續、強化せらるべきは勿論のことであり、而して實にこゝにこそ新らしき生活への第一歩は踏み出されてゐる。

第七章 青年の社會的地位

一

現在、日本は幾何の青年を包擁し、これらの諸君が夫々如何なる職業に従事してゐるかを、昭和五年の國勢調査の結果によつて調べて見よう（全國人口を各方面から總觀的に見るためにはこの昭和五年度の計數に依る外はない。尙昭和九年度の男子青年推計人口は七百七萬八千二百三十八人である。）青年層人口は滿十四歳から滿二十四歳までをとるが、これは常識で云ふ數へ年の十五歳から二十五歳までの實態を示すからである。

右に依れば、全國青年の總人口は一千三百四十二萬二千五百九十七人で全人口六千四百四十五萬人の二〇・八%に當り、そのうち男子六百八十一萬八千五百六十九人、女子は六百六十萬四千二十八人で、女子一〇〇につき、男子一〇三・二四の割合で男子の方が多い。男子青年は全國男子の二一・一%を占め、女子青年は同じく全國女子の二〇・六%である。

更らにこれを都市別、郡部別に見ると、都市青年人口は四百十一萬五千三百十二人、郡部青年人口は九百三十萬七千二百八十五人であつて、その割合は都市が三〇・七%、郡部が六九・三%で、農山漁村青年の方が壓倒的に多數を示してゐる。これは男女兩方の計數であるが、それを性別に見ると、男子の場合には、市部三二・一%、郡部六七・九%、また女子の場合には市部二九・二%、郡部七〇・八%を示してゐる。

併しながら、周知の通り農村人口は毎年都市へ／＼と集中の傾向にある。昭和五年における右の郡部別人口比例も實は同年までに至る滔々たる都市人口集中の結果である。大正九年から昭和五年迄の十年間に日本の人口は八百四十八萬七千人を増加してゐるが、そのうち郡部の増加が七百萬を下らないとして、この七百萬の郡部において成長し、教育された青年大衆中、三、四百萬人は郷土を離れて都市に流入してゐる。

更らに東京市の流入人口の増加を調査したるものを見るに、昭和五年の東京市の人口中、男子の青年人口（十四—二十四歳）は六十九萬二千人で、そのうち二十二萬六千人即ち三分の一がそれより過去五年間に外部から流入し、同様に女子の五十五萬九千中、十八萬六千人、やはり三分の一が外部から入つたもので、男女併せて四十萬人が差引流入超過となつて東京の増加人口となつてゐるのである。

とに角、人口の都市集中は、特に歐洲大戰後急速であり、顯著である。かくして育成期中の幼年人口は全國的に見て都市より農村の方が多いが、所謂生産年齢中の十五歳から四十四歳までの青壯年層は男女とも斷然都市の方が多いのであり、働き盛りの人間が都市に集中してゐるのである。然るに四十五歳以上の中老人口は農村の方が多いとされてゐるが、これは一方において農村の若い者が都市に集中すると共に、他方農村の中老の健在者の殘存せる處へ、都市の四十五歳以上の中老期の者が歸農するためである。更らに農村に歸農する者にはその外に罹病者、廢疾者もあり、失業者も最後には温い故郷へと歸るだらう。これによつて日本の農村は幼稚園、小學校を經營し、療養所、養老院、更らに失業人口の貯水池たる役目を引受けてゐる。割の悪い負擔のかゝる大役を引受けてあえいでゐるのが今日の農村の姿の一面である。

次に青年層の職業を検討しよう。我國青年層の職業構成はやはり昭和五年の國勢調査に依れば青年總人口一千三百四十二萬二千五百九十七人中、有業者九百二十四萬三千人、無業者四百十七萬九千五百九十四人であつて、青年層人口中六九%が勤勞青年で、残り三一%が無業者であるが、この無業者は學生、生徒、從屬者等がその多數を占めてゐると思はれる。この中學生生徒の數を調べて見ると、中等程度以上の學校の學生及び生徒が百二十三萬二千七百七十二人で、その中大學高等專門學校の學

生は十八萬五千五百四十九人を算してゐる。尙實業補習學校の生徒は百二十七萬七千三百三十八人となつてゐる。次に職業別青年人口を示せば左の通りである。

第一表 職業別青年人口 (男女計)

職業	員 數	百 分 比
總 數	13,422,597	100.0
農 業	3,549,090	26.4
水 産 業	155,083	1.2
鑛 業	67,799	0.5
工 業	2,392,134	17.8
商 業	1,364,877	10.2
交 通 業	387,125	2.9
公 務 自 由 業	695,167	5.2
家 事 使 用 人	490,768	3.7
其 他 有 業 者	140,960	1.1
無 業 者	4,179,594	31.0

さて右の有業者九百二十四萬三千三人を職業大分類に従ひ部類すれば、農業の三百五十四萬九千九十人が最も多く有業者の三八・四%を占め、次に工業の二百三十九萬二千三百三十四人(二五・九%)、商業の百三十六萬四千八百七十七人(一四・八%)が之につき、此の三者を以て有業者の七九・一%を占めてゐる。其他は公務自由業、家事使用人、交通業、水産業、其他有業者、鑛業の順序である。これを男女別に見たものは次表の通りである。

男子青年人口六百八十一萬八千五百六十九人中、有業者は五百四十九萬六千九百七十七人、無業者は

第二表 職業別青年人口 (男子) 同 (女子)

職業	員 數	百分比	職業	員 數	百分比
總 數	6,818,569	10.0	總 數	6,604,028	1.00
農 業	1,881,620	27.6	農 業	1,667,470	2.52
水 産 業	142,307	2.1	水 産 業	12,776	0.2
鑛 業	53,947	0.8	鑛 業	13,852	0.2
工 業	1,541,282	22.6	工 業	850,852	12.9
商 業	899,038	13.2	商 業	465,839	7.1
交 通 業	333,087	4.9	交 通 業	54,038	0.8
公務自由業	509,122	7.5	公務自由業	186,045	2.8
家事使用人	17,280	0.2	家事使用人	473,488	7.2
其他有業者	119,234	1.7	其他有業者	21,726	0.3
無 業 者	1,321,652	19.4	無 業 者	2,857,942	43.3

百三十二萬千六百五十二人であつて、有業者の男子青年人口に對する割合は八〇・六%にあたる。即ち我國青年の大多數は所謂勤勞青年である。男子青年有業者五百四十九萬六千九百七十七人を前の通り職業大分類によつて區分すれば、農業の百八十八萬千六百二十人が最も多く、有業者の三四・二%を占め、工業の百五十四萬千二百八十二人(二八%)、商業の八十九萬九千三十八人(一六・四%)がこれに次ぎ、此の三者を以て有業者の七八・六%を占めてゐる。更らに工業と商業とに従事する者、併せて四四・四%は農業に従事する者三四・二%より一〇・二%多く、商工勤勞青年の問題のすこぶ

る重要なことを示唆してゐるのである。其他は公務自由業、交通業、水産業、其他有業者、鑛業、家事使用人の順序である。無業者は男子青年人口の一九・四%を占めてゐる。

尙ほ男子青年層全體に對する各職業的地位を検するに、農業二七・六%、工業二二・六%、商業一三・二%である。

次に女子青年の状態も明らかにしておかう。女子青年人口六百六十萬四千二十八人中、有業者三百七十四萬六千八十六人、無業者二百八十五萬七千九百四十二人であつて、有業者の女子青年人口に對する割合は五六・六%で、過半数の女子が勤勞女子青年たることを示してゐる。女子青年有業者三百七十四萬六千八十六人を職業大分類に依り、區分すれば、農業の百六十六萬七千四百七十人が最も多數を占め、有業者の四四・五%を占め、工業の八十五萬八千五百五十二人(二二・七%)、家事使用人四十七萬三千四百八十八人(一二・六%)、商業四十六萬五千八百三十九人(一二・四%)がこれに亞いでゐる。即ちこの四職業を以て、女子有業者の九二・二%即ち女子職業の大部分を占めてゐると云つて良い。更に工業及商業に従事する女子青年は三五・一%で、女子においては農業に従事する者の方が九・四%多く、男子の場合と逆であるが、商工業に従事する女子青年の相當多數なるは、やはり商工勤勞女子青年問題の看過すべからざるを思はせる。尙ほ女子青年人口中、農業に従事する者はその二五・二%、工

業一二・九%、家事使用人七・二%、商業七・一%である。

また男女青年職業人口を比較するに概ね男子職業人口が多いが、無業者、家事使用人のみは著るしく女子の方が多い。即ち家事使用人中女子は全體の九六・五%を占め、男子は僅かにその三・五%を示してゐるに過ぎないのである。また無業者の六八・四%は女子であつて、男子は三一・六%である。

さきに、農村において育成せられた青壯年人口の大量が働口を求めて都市へ流入することを述べたが、この事は直ちにこれらの人々の職業の轉換若くは開拓を意味する。前の通り大正九年と昭和五年の國勢調査の比較によりて得た數字により、農村人口がどれだけ都市に吸収されたかにつき少しく關説して見よう。内地人口はこの十年間に一割五分二厘即ち八百四十八萬人餘を増したが、有業人口は僅々八分七厘を増し、その代りに無業人口が二割一分四厘も増してゐる。既にこゝに増加人口と就業人口との均衡が著るしく破れてゐるが、これは失業者の増加を意味する。上田博士は昭和五年の失業者數(未就職者を含む)を二百三十七萬人と推算せられてゐる。

農業人口はこの間において減少してゐる。即ち先づ相對的には大正九年に有業人口の半数以上を占めてゐたものが、十年後にはその半数にも達しない。更らに絶對數が十五萬六千人減少してゐる。この十年間に約八百五十萬人の人口増加があり、そのうち郡部人口の自然増加が七百萬を下らないこと

は前に述べたが、斯の如く人口増加に伴ひ、生活必需品としての農産物の需要は増大すべきであり、それだけ生産も増加し、人口の自然増加も郡部は著大なるに拘らず、農業人口は減少してゐるのである。またこの十年間に農業人口において生産年齢に属する二十歳から四十九歳迄の働盛りの青壯年者が少くなり、十九歳未満と五十歳以上の幼年者及び老年者が比較的多數を占めてゐる。この點は先きに述べた郡部人口の構成と同じである。尙十歳以上十九歳の者の著るしき減少が指摘されてゐるが、これは小學校卒業後直ちに徒弟となり、女工となつて離村する者の多いことを物語つてゐる。

次に工業人口はこの十年間に七十三萬七千人の増加を見、商業に次いで人口收容力の大きなことを示してゐる。大正九年と昭和五年との比較で著るしく目立つことは女の従業者が減少し、男子中、殊に十五歳以上四十四歳迄の働盛りの年齢層が非常に膨大したことが指摘される。我國の増加人口の吸収のために何人も最も多く期待してゐるのは工業であつて、所謂工業立國或は工業化の聲大なるわけだが、とも角不況の際にも拘らずこの期間増加人口中の成年男子を工業において毎年數萬消化してゐるのは多しなればならぬ。

唯注意すべきは、我國の工業は飛躍的に發展しつゝありとは云へ、尙ほ家内工業から手工業へと大體の轉換を終り、他方資本の集中による大企業が勃興しつゝあるといふ發育中である。即ち一般に工

業規模が頗る小さく、従業員四人以下の工場が過半を占め、五十人以下の程度の工場が大部分である。これは高度化せる資本の組織が未だ部分的であり、従つて不變資本たる機械や動力に對する投下が少なく、低賃銀の勞力の需要の多いことを示すものである。また考へねばならぬことは、工業従業者に扶養義務の負擔が少からずかゝることである。都市における消費生活は殆んど全く金錢支出によるのであつて、その生活を満足せしめるだけの収入を得るのは容易ならずと察せられる。

次に商業人口はこの十年間に本業者を百二十四萬四千人を増加してゐる。即ち人口吸収の第一位を占めるのであるが、然しその内容を検討して見ると、物品販賣業が八十七萬二千人、接客業者が三十萬六千人の増加で、兩者を併せて商業人口の増加數の殆ど全部に當る。生産が隆盛となれば、その配給分配の業務も擴大するわけであるが、何人も氣附くやうに實は生産の増進以上に人が増してゐるのである。換言すれば都市的職業たる商業人口の増加は小資本を持つてば特殊な技能は無くても開業可能な、行商とか小賣商業の増加である、物品販賣業、接客業の業務は正にそれを示してゐるのである。併しながら冷酷な都市はか様な零細な商業者の生活を決して保證して呉れるものではない。此意味において商業人口の増加の中には不健全不安定な半失業状態のものが相當存在することを推察せしめるのである。尙ほこの十年間においてこの部門においては比較的多く女子の活動が現はれ、また男女と

も十五歳以上四十九歳までの生産年齢層が著るしく増してゐる。

公務自由業人口のこの期間における増加は四十八萬八千人で、人口の收容力の第三位を占め、而も有業人口に對するその相對的地位さへ甚だ増進してゐるのである。而して官公吏、教師、醫者、團體職員が増加が目立つて多い。

尙ほこの十年間に、水産業人口は三萬二千人の増加をなし、交通業は七千人近くの従業員減少を示してゐるが、これは交通業そのもの、縮少の結果では勿論なく、機械の進出により人間が閉出しを喰つて來た結果である。更らに家事に於ける就業人口は女が男の八倍以上を占め、而かも十五歳乃至二十五歳の者が大部分であることが指摘される。この十年間の吸収率は十四萬人の増加を示し、女子青年職業の立場から云へば極めて重要な意義をもつてゐる。

さて以上は昭和五年における我國青年の社會經濟的地位の一斑を示し、且つそれが大正九年より昭和五年に至るまでの種々なる變移の結果たることを概觀したものであるが、昭和十三年の今日においてはこの様相は更らに變化してゐることであり、特に今次事變發生以來は、それがもう一層激變したであらうことは察するに難くない。併しながら、情勢變移の諸傾向は右に述べたる處によつて極めて明瞭に看取されるのである。問題は複雑錯綜してゐるが、要するにそれは云ふまでもなく青年獨自に

解決し得るが如きものではなく、實に國家全體の問題、特に日本の人口問題、従つて一面それは我國の産業開發の問題、國民生活の問題である。更らに農村問題の極めて重要なことが看取される。

我國の人口は昭和十年國勢調査の結果に依れば約一億、内地人口のみにも約六千九百萬人に達し、それが僅か三十八萬平方畝の土地に居住し、一方畝當り實に一八一人の人口密度である。それは資本主義的に最高の發展を遂げたイギリス本國の一九五人を除けば、ドイツ、フランス、イタリーよりも大である。然も右の諸國は何れも或は廣大なる屬領があり、或は商工業が高度に發達し、それに多くの人口が依存してゐるのであるが、我が國では土地を生産の基本條件とする農業人口が猶總人口の約半ばを占めてゐる。その上食糧原料の供給源たる耕地の國土全面積に對する割合は、僅々一五・七%（昭和十年）に過ぎず、農業國としては貧弱なるイギリス本國すら二一・二%を有し、ドイツ、イタリー、フランス等はみな我に二、三倍するのである。

更らに周知の通り我國の人口の増加率は驚くべく高い。文明國としては高過ぎる死亡率であるが、それにもまして出生率がずば抜けて高いから、結局人口の膨脹は急速である。自然増加の實数は日本が文明國中最大であつて、昭和七年、十年には百萬を突破してゐる。然しアメリカでも流入増加を差引くと日本より少く僅か八十萬、ドイツとイタリーは日本の半分で四十萬、フランスは昭和十年は遂

に二萬程の減少となつてゐる。かくの如く日本は狭小な國土に約七千萬の人間がぎつしり押し込まれ、尙年々非常な勢で人口が膨脹してゐるのである。

日本の人口は明治維新以來飛躍的に發展せるもので、維新前約二百年といふものは、約三千萬程度を上下停滯してゐたのであるが、明治六年の三千五百萬から昭和十年の六千九百萬へ、この間實に人口は倍加した。これは維新以來の我國資本主義の目覺ましい發展を如實に示すものである。かくして商工業の急速なる進展は農業部面からも勞働力を吸収し、農業自體も、耕地の擴張や、新技術、新經營法の採用によつて、自らその新たなる増加人口を吸収することを得て來た。然るに今日人口の増加よりも寧ろ過剰が感ぜられ、茲十年來人口問題は朝野の重大問題化して來た。即ち日本における産業の發展と増大する人口の壓力との間に均衡を維持することが至難になつて來たのである。換言すれば日本の自由主義經濟は最早や新たなる増加人口に充分に就職の機會を與へ得ず、國民の生活程度の向上乃至は維持が脅かされ出したのである。かくして都市においては失業問題、勞働爭議、農村においては農村過剰人口が小作爭議の重要な原因となるに至つた。

過剰人口の悩みは農村において激烈である。特に昭和五、七年の恐慌以來、農業生産力はその耕地面積擴張の不可能と共に漸く固定化の傾向を示し、農産物價格は缺狀價格の矛盾を孕んで下落し、農

家の所得は減少の一方である。周知の通り現在の生産技術と價格關係とを前提する限り、農家はそのさゝやかな生活を維持するために約二町歩の經營面積を必要とするのであるが、事實は一農家に割當てられたる平均耕地面積は一町一段に滿たず、それは多年に亘り何等擴大されない。要するに過剰人口は我國農家をして過小農經營に固定せしめ、經營上生活上の困難を到來せしめてゐる。かくて農業における人口收容力はまさにその極限に達してゐるのである。

かくて農村人口の滔々たる都市流入となり、それは商工業等々の人口の増加となつて現れるが、それによつて問題は必ずしも解決されてゐないのである。と云ふのは、前にその數字を擧げて述べた通り、第一は潜在的失業者約二百萬の存在である。次ぎに商工業、公務自由業等が發展し、農業人口を吸収した事を述べたが、その吸収の仕方の一考を要すべき處がある。即ち工業といふ基礎的生產過程における勞働需要が比較的僅少であるに反し、富の再分配過程に關聯する商業及び公務自由業に於ける吸収率の増大に問題があるのである。

生産の擴大、發展と共に商業人口の増大することは自然の趨勢であるが、我國では前記の通りその比率が高い。即ち我國における過剰人口が、小資本さへあれば容易に着手し得る小賣商業の分野にその捌け口を求めたる結果はこゝに寄生的な商業過剰人口を發生せしめてゐるのである。一方には百貨

店の發達、他方には消費組合、商業組合の進出に依り、物品の配給組織は整備され、かくて流通過程中の無用の費用を節約する機運が醸成されると共に、中間商人の存在は益々過剰であり、無意義であり、その必然の結果に中小商業者の窮乏といふ社會問題を生むのである。産業組合運動の目覺ましき進展に對し、常に反産の叫びのあるのは、生活を脅されるこれらの同情すべき人々である。中小商業はもはや人口收容の餘力あるを意味せず、寧ろ一切の職場から掃出しを喰つた過剰人口の最後の行き處であると云つても過言ではない。次ぎに公務自由業であるが、これも産業の發展と共に擴大すべきものであるが、それは基礎的生産過程と異なり、物資を生産しないのであり、この部門に多數の人口が吸収されることはあまり健全な状態ではない。

最後に工業であるが、先きに示せるは昭和五年の數字であり、其後我國の工業は相當躍進を爲してゐるから、工業の將來の發展は大いに期待できるが、我國有業者中工業者の比率は一九二〇%であり、アメリカの二八・九%、ドイツの三八・二%、イギリスの三二・五%、フランスの三一・六%より遙かに劣るのである。加ふるに工業においては機械及び動力使用が益々發達するに伴ひ、必ずしも従業員勞働者數の増加を必要としないのみならず、その減少を來すことが多いのである。されば工業の人口吸収力を著るしく増大するためには、單に資本や技術の準備や、製品の販路等を準備する必要あるのみならず、従業員の勞働時間や待遇等にも充分なる社會政策的考慮を拂はねばならない。然しながら斯の如きは直ちに生産費の増大を來して製品の海外市場への發展を妨げる恐れがある。これは容易に解き難き矛盾であり、この矛盾は國內的及び國際的なる政治、經濟の革新なくしては解決され得ない。要するに工業における過剰人口の吸収力も決して容易ではないのである。

かくの如く、大正九年より昭和五年に至る十年間に亘る右數字の示す處に依ればこの間農業は著るしい停滞を續けると共に農業人口は半減し(但し水産業は増加)、鑛業は減少し、工業の發達は人口吸収の點から云つて、満足するほどでなく、反而商業、公務自由業等の直接生産に關係なき部門の發展を見たのであつた。職業各分野の人口收容力が如何に跛行状態にあるかを示すと共に産業の内容に色々難點のあることが分るのである。而して産業の急速なる發展が望み得ない以上は、我國人口過剰問題の前途は益々多難と云ふべく、所詮それは國家全體の社會經濟機構の革新、その統一化、計畫化なくしては解決し得ざる傾向を示してゐる。即ち現制度は何等か清新なる方法を以て活を入れなければ到底その矛盾を克服し得ざる状態に立ち至つてゐるのである。人口過剰問題はかゝる矛盾の表現に外ならぬ。自由主義、個人主義的なる從來の資本主義的營利方法を以てしては日本民族の發展は不可能であり、國家の躍進は期待し得ないこと明らかである。須らく総合的なる新經濟體系を樹立し、勞力、

技術、資源を全體的且つ合理的に活用し、生産の飛躍的發展を確保すると共に、社會に正義を取り戻し、國民大衆の生活を安定、向上せしめ、新なる理想と道徳との基礎をつくる必要がある。然もそれは東亞においてはもとより世界全體に對しても矛盾なく行はれ得るが如き新體制でなければならぬ。

日本の現段階はまさに斯の如き目標達成のための過渡期である。我々の大陸經營はその第一の階梯である。この大業は如何なる事があつても達成しなければならぬ。これが爲には國防力の強化が必要であり、國民はそのためにはあらゆる不便と苦痛とを忍ばねばならぬ。然るに他方において、國內に革新政治が斷行され、革新經濟政策が採用される時は、この國防問題も又合理的、組織的に解決されるのである。とに角社會の何れの面をとつて見ても、悉くこれ革新を必要とせざるものはなく、しかも問題は單に一局部のものではなく、常に全體と聯關してゐる。最早や全體即ち全機構が問題であり、部分ではない。部分だけでは何事も解決されない。

現代青年はまさに斯の如き時代に生活してゐるのであり、まことに容易ならぬ覺悟と慎重なる態度とを肝要とする（斯の如き革新情勢に對して執るべき態度は前に述べたる通りである。）現代青年の義務と責任とは蓋し測り知れざる程大きい。我々青年は先づ忠勇なる皇軍兵士であり、更らに最も活力的なる勞働力であり、また最も創意に富む智力である。國家は青年諸君が斯の如き總力を全面的に且

つ創意的に發揮せんことを要請してゐるのである。先きに我々は青年期が準備の時代であり、またその能力には一定の限界があることを指摘したが、現段階はまさに準備以上の準備時代であり、能力の限界以上に能力を發揮すべき時代である。換言すれば、まさに全面的に奉仕の時代と謂ふべきである。而もこの奉仕は既に青年諸君によつて爲されつゝある。即ち第一には青年自身の日々の職業的業務がそれであり、第二は都市特に農村に於ける果敢なる銃後活動であり、第三は近時頓みに勃興しつゝある所謂勞働奉仕運動等々である。

我々は青年諸君の勞を深く多とすると共に益々奉仕の念を練磨し、奉仕の範圍を擴大し、君國のために盡されんことを切望する次第である。それと同時に青年諸君がこれらの奉仕活動のうちから幾多の教訓を酌みとるべきことを注意しておきたい。即ちこれこそが全體的責任者としての自己を自覺する道であり、この過程を眞に生き抜かなければ青年は決して來るべき時代の擔當者としての資格を獲得し得ないのである。

二

さて、我々は現實から飛躍することは出來ない。問題は具體的に且つ生活の實際に即して考察され

なければならぬ。さすれば青年なる言葉の如何にも概括的、一般的なることが直ちに反省される。青年諸君は決して一色ではないのである。先づその居住地域によつて都市青年と地方青年（農山漁村及び地方小都市）とに分れ、その職業における態様によつて勤勞青年とサラリーマン（知識階級）、更らにこれが職業によつて色々に分けられる。此の外に學生の一群がある。

更らに青年は年齢層によつて分けねばならない。これは極めて重要である。普通一般に女子九歳男子十歳までを少年期とし、それから後を女子十三歳、男子十四歳までを青春前期とし、それ以上女子十七歳、男子十八歳までを青春期と名け、更にこれに後期を加へ、合せて青年期とされてゐる。而して女子十七歳及び男子十八歳の半において略々丁年に達すると認められてゐる。

右の青春前期から青春期にかけての發達は、それが丁年へ連續する所の完了充實期であり、この時期には記憶再認等の比較的簡単な能力よりも、推理、洞察等の、智能の寧ろ本質的なる方面の發達せられる時期である故に、人間の發達上非常に重要であるとされてゐる。

然るに小學校を卒業して直ちに勤勞生活に従事せる者と在學のものとを比較するとき、兩者の間に著るしい差が認められる。それは推理、洞察において差が甚だしい。即ち在學者は十二歳以上、青春期の頃まで長足の進歩を遂げるが、在職者は十二歳以上、多く發達せず、發達しても低い處に停滯し

てゐる。女子においてはこの懸隔が一層甚だしい。日本の今日の學制では青年期を學校生活に送り得る者は何等かの方面において選ばれたものであるから、これはその先天的素質の優位並びにその少年期における恵まれた生活の爲とも云へる。原因は素質か環境か、何れにあるにせよ、現實においては早くより工場勞働に就ける者の神經、精神機能並に智能の發達は遲滯或は停頓するのである。然るにこれらの智能はいづれも、今日の工場勞働においては優良なる生産者としての必須の資格である。

右は智能に関する差異であるが、發達の差異は人格の發達の上にも現はれ、現代産業の所謂合理化の發達につれてそれは愈々歪められて來た。資本主義産業機構の下における所謂合理化とは、その組織、制度の上において、機械の極度の利用、作業の分割、速度の強化、生産品の格一化等のために、作業方法上、雇傭者も被雇傭者も一樣に斯の如き強制支配の下に置かれ、經營から人間的なもの、道徳的なものが除去されてしまふのである。極度の分業と速度の強化とは人間をして一介の機械の一部たらしめ、そこには作業への意志も悦びもない。青春期の精神發達の特徴は自我の發見と精神的なるものへの渴仰といはれてゐる。精神的向上と人格の自主的活動を要求し、責任ある自律的、自主的仕事をなさんとする。かくの如き青年心理は現代産業機構内の諸條件と合致するものではない。かくして若くして勤勞生活に従事せる青年は、かくの如き青春期の精神的展開を爲すことが出來ず、精神的

なるものへの渴仰もなく、唯精神的發達より身體的早熟の方がおこり、肉體的力量の誇示と感覺的享樂とへの慾求だけで他の方の發達は停るのである。

これは勿論勤勞青年の悉くが斯うと云ふわけではない、一般的にか様に成り勝ちだと云ふのである。これを原始的青年型とすれば、學生等は一般に文化的青年型である。併しながら最近の學生の中にも原始型が少なくないと共に勤勞青年の中に文化型が多敷見受けられる。これは今後日本の青年の一つの重要な傾向となるのではあるまいか。一方は生産に直接參加する者の健實性を表現し、他方はそれから遊離せる者の墮落性を表現してゐる。一方は最早や權威ある知識を代表し得ず、それだけ蠻性が復活する。蓋し學校の教育が既に生活の實際に即せず、左様な知識は別に昔の學生のやうに覺え込まなくてもいいのである。と云つて自から學ぶほどの叡智の無い者は結局文化人たるの資格を自ら放棄してゐるのである。他方はも早や單に筋肉勤勞だけを代表してはゐない。生産過程そのものが既に相當の智性と叡智とを必要とするし、また家庭の都合其他で上級學校へ行けなかつた素質の優秀な青年は、徒らに自己の環境に囚はれず、むしろ自己の職場から人間として學ぶべき多くのものを引き出し、自ら獨立的に向上しつゝあるのではあるまいか。

兎に角知識階級の青年と勤勞青年との間には從來あまりにも劃然たる區別があり過ぎた。これは恐らく教育の罪であらう。この間隙は埋めなければならぬが、併しそれは事實上徐々に埋まりつゝあるのではないかと思はれる。

産業上の實際作業における生産能力の進歩についても亦差が認められる。紡績工場を中心である精紡作業において、その習熟に要する日數に就いて、同一年齡に就職した尋常小學校卒業者と高等小學校卒業者とを比較するに、三〇番手以下の太絲に就いては兩者の間に差がないが、三五番手以上の細絲においては、高等小學校卒業の方が遙かに速く習熟が完了するといふ。技術の習得及び練達の速さと高さとが、學歷との間に大なる關係を有することは、今日各方面の實際家の等しく認めるところである。また精度の高い製品をつくる工場の従業者とその低い工場のそれでは精神検査の成績に著しい差があるといふ。即ちこれは、前者においてはその従業者のものによつて訓練發達せしめられるからであり、かくして種々なる陶法が行はれる結果である。とまれ將來熟練工たるためには相當の教育を受けなければならぬことが今や絶対に必要らしい。

以上、智能、人格、生産能力の發達において學歷の差が如何にそれに影響するかを見たのであるが、これによつて心ある、向上的なる勤勞青年が何を欲し、また産業上の教育必要が那邊にあるかは略見當がつくと思ふ。

即ち勤勞青年の多數についてその欲求を調べたところによると、その仕事に關するものが大きな割合を占めてゐる。優秀な男子職工にあつては、責任のある独自の仕事への希望と、未知の知識と技術との渴望が甚だ熾烈であるといはれる。即ち青年は決して現在の活動に満足してゐない。その旺盛なる活動慾に依つて、進んで企劃し、進んで學び、進んで創造し、進んで奉仕し、進んで自己の獨立せる生活と活動とをなさんとするのが一般である。

こゝに人生全體の進歩が約束されてゐるといつていゝ。早く職業に就いた青年は、獨立した満足はあるけれども、その活動を一定の方向に早急に決定したことに對する不安と失望とがある。外面的な日常の仕事とこの心奥の人格的生活との内的協和がうまく保てないとき、青年期の活動慾はどんな誤れる方向に向けられるか分らない。か様な青年を長く不安の境地におき、失望させることは絶対に不可である。

次に職場において進歩の著るしい青年は、好んでその技術に對する理論的探求を熱心に希望してゐる。この事は眞の技術の獲得には當然必要なことである。例へば塗料の化學的知識を授けて初めて本格的な家具工の技術は獲られ、金屬に關する知識と一緒に教はつてこそ速かによく鋸が使へるやうになる。また土壤學の一斑が教へられて、始めて肥料を合理的に使用する農夫ができるのである。

以上によつて現代の都市勤勞青年が何を希望してゐるか、またそれに對して何を與へねばならぬかは大體分ると思ふ。

第一に教育の方針が青年の生活の實際に即して立てられなければならない。これは次に述べる職業教育の徹底の意味にもなるが、要するに青年の生活を理解し、その生活から生れて來る彼等の意識を捕へてこれを指導することである。即ち彼等の現在の生活に深い交渉のある媒介物によつて、或は彼等の實際に經驗するところの其儘を捕へ、そこから、より高きものへ向上させるのである。そのためには指導者は青年の訴へを虚心坦懐に聞かねばならぬし、彼等の生活の眞實をよく把握しなければならぬ。教育がこの方針によつて進められるならば、彼等の學問に對する態度はより着實に、より眞實となるに違ひない。青年の氣持をして表裏あらしめ、着實さ、眞劍さを殺すやり方はよくない。

第二は彼等に社會認識の方法を指示することである。更らに進んでは、社會そのものゝ今後の進路を示し、青年に對し明白な行動綱領を與へることが必要である。現代の青年が歸趨に迷つてゐるのはこの點である。故に青年教育者たる者は彼等に對し、日本は今後どうなるかと云ふことをはつきり言へなければ駄目である。併し青年は純眞であり、熱情的であり、極端に理論を受し、屢々度を過して輕舉盲動をすることすらある。従つて青年に與ゆべきものは餘程慎重に考へてからの結論でなければ

ならぬ。唯一言云へることは、與ゆべきものは、社會進歩の理論に外ならず、何がその進歩であるかをばつきりさせればよいのである。

青年は國家運動の中樞であり、一切の革新の先驅をなすものは青年である。従つて彼等の行動をその理論と一致せしめるやうな、客觀的に正しい方向を與へねばならぬ。また青年に社會の眞實の動向を知らしめることは、結局彼等をして自己の地位を自覺せしめ、着實なる職業生活を行ふこととなりかくてよき職業生活はよき郷土生活、よき公民生活、よき國民生活となるのである。現代の技術的に合理化せられた産業機構内の商工徒弟の心の世界は概して全く傳統のない現實的皮相主義に墮してゐる。或は獨善主義的な、自己解釋的な我が儘が多い。又その職業生活と自我との支離滅裂について煩悶する者もある。要するに明確なる指導理論を與へることが今日最も肝要である。

第三には職業教育の徹底である。彼等の作業能力を増進せしめる基礎として、智能の啓發と科學的知識の教授が爲されねばならぬ。我國の産業は今日粗工業から精工業へ向つて既に進んでゐる。將來の國家産業が要求する人間はかやうな一定の教養のある青年であつて、これによつて初めて技術の發達が爲され得るのである。國軍の要求する處も同様であると思はれる。これはまた前述の通り、心ある青年の自ら要求するところであり、近代的な職業教育の徹底が肝要である。

第四は教育の方法である。嘗ての我國の教育は無批判的に天下りの教師を絶對視させて教授したが、其後文化の進展に伴ひ、個別的な教授方法が盛んに行はれ、個性の尊重が叫ばれた。最近の傾向は所謂全體主義である。我々の云ふ全體主義の意味する處は既に屢々述べたる通りであるが、この意味における全體主義の教育は今日極めて緊切である。今日は個別よりも全體が問題なのであり、正しい進歩的な全體の改造、再建時代である。故に全體のために個性を或る程度まで無視すべきは止むを得ない。全體的な訓練が今は必要である。

併しこの場合個々の個性が自ら納得して自己を犠牲にするやうにされなければならぬ。換言すれば個々人が各々その地位を自覺して、自ら卒先して全體のために犠牲となる。かやうに個と全體との間に明瞭な境界、統一がなければならぬ。即ち一方において自主的に個別的に指導して、その個性の伸張を圖り、他方においては團體的訓練を與へて、全體動作、全體觀念を養成し、兩者矛盾のないやうにしなければならぬ。つまり現在肝要なのは一種の硬教育であるが、それは昔の儘の硬教育でなく、軟教育の長所をも採り入れた、新らしい硬教育である。形式はたとへ昔の通りであつても、その精神は反動的、封建的であつてはならぬのである。また適度の慰安を巧みに採り入れた嚴格主義でなければならぬ。

さて、以上述べたことを眞に效果的に實現するためには先づ指導者乃至教育者において、明確なる時代認識のあることを要し、被教育者たる青年において判然たる進歩の自覺がなければならぬ。

更らにこれにもう一つ考へねばならぬ事は、勤勞青年に對する諸種の社會政策的施設の増強である。この點に就いて日本の現状は必ずしも充分であるとは云へない。一般に我國の社會政策は貧困であると云はれてゐる。勤勞青年に關する社會法規に從來どんなものがあるかと云へば、工場法（明治四十四年）、鑛業法（明治三十八年）、工業勞働者最低年齢法（大正十二年）、鑛夫勞役扶助規則（大正五年）、勞働者募集取締令（大正十三年）、傭人扶助令（大正七年）、健康保險法（大正十一年）、職業紹介法（大正十年）等々であつて、勞働者の雇入、年齢、就業時間、休憩、休日、業務、賃金、解雇及び疾病災害等に關して夫々法規を以て保護されてある。先般の通常議會は社會立法において大きな收穫を擧げた。即ち例へば國民健康保險法、社會事業法、職業紹介法改正（國營）、商店法等々厚生省直屬の一般的社會立法を始めとして、農地調整法、庶民金庫法等々、更らに軍事方面に關聯して入營者職業保障法改正があり、また當然のことではあるが傷痍軍人保護對策のための種々なる企劃が樹立された。非常時局を背景として人的資財の涵養と保護の必要から、割合に容易にその成立を見たのであるが、いづれにしても、これに依り一般庶民階級並びにその子弟の生活苦惱が、輕減されるわけであり、欣

ぶべきである。かくの如き保護立法は從來は資本家其他の現状維持的勢力側の反對に依り、仲々實現を見なかつたものであつて、時勢は、大正十一、二年頃むしろ自由主義的背景の下に諸勞働法規の生れた頃を考へると格段の相異の生じた事を思はせるのである。

併ししながら、これらの法規はみな數年間法案だけは出來てゐて、容易に成立しなかつた店晒し案で、新鮮味を缺き、長い間に相當骨抜きにされたと稱され、人によつてはこの程度の勞務者保護を以て果して現下の時勢に處して新たに世に見ゆる價值ありや大に疑問なりとする者もあるが、併しこれだけの事でも爲されたのは確かに進歩であつて、要はこの傾向が今後も益々進展すべき事である。更らに勞資關係を如何に調整するか等々、この社會轉換期に際し、創造的意圖を以て爲さるべき新設厚生省に期待するところは大きい。とにかく、進歩の自覺を以て、業務にいそしみ、研學をつゞけ、國家社會に御奉公せんと心掛けてゐる勤勞青少年の地位は向上されねばならぬ。

前に述べた通り人口の都市集中は今日不可避の現象であるが、憂ふべきは都市における青年層の人口増大である。東京市役所の統計書に依り、昭和十年の國勢調査の結果について見るに、東京市では各歳の人口の總人口一〇〇に對する割合は、一歳未満が最も多く（二・七九%）、それより二歳（二・六五%）、三歳（二・六五%）、四歳（二・六四%）、五歳（二・五六%）、六歳（二・五三%）、七歳（二・五三%）、八歳（二・五三%）、九歳（二・五三%）、十歳（二・五三%）、十一歳（二・五三%）、十二歳（二・五三%）、十三歳（二・五三%）、十四歳（二・五三%）、十五歳（二・五三%）、十六歳（二・五三%）、十七歳（二・五三%）、十八歳（二・五三%）、十九歳（二・五三%）、二十歳（二・五三%）、二十一歳（二・五三%）、二十二歳（二・五三%）、二十三歳（二・五三%）、二十四歳（二・五三%）、二十五歳（二・五三%）、二十六歳（二・五三%）、二十七歳（二・五三%）、二十八歳（二・五三%）、二十九歳（二・五三%）、三十歳（二・五三%）、三十一歳（二・五三%）、三十二歳（二・五三%）、三十三歳（二・五三%）、三十四歳（二・五三%）、三十五歳（二・五三%）、三十六歳（二・五三%）、三十七歳（二・五三%）、三十八歳（二・五三%）、三十九歳（二・五三%）、四十歳（二・五三%）、四十一歳（二・五三%）、四十二歳（二・五三%）、四十三歳（二・五三%）、四十四歳（二・五三%）、四十五歳（二・五三%）、四十六歳（二・五三%）、四十七歳（二・五三%）、四十八歳（二・五三%）、四十九歳（二・五三%）、五十歳（二・五三%）、五十一歳（二・五三%）、五十二歳（二・五三%）、五十三歳（二・五三%）、五十四歳（二・五三%）、五十五歳（二・五三%）、五十六歳（二・五三%）、五十七歳（二・五三%）、五十八歳（二・五三%）、五十九歳（二・五三%）、六十歳（二・五三%）、六十一歳（二・五三%）、六十二歳（二・五三%）、六十三歳（二・五三%）、六十四歳（二・五三%）、六十五歳（二・五三%）、六十六歳（二・五三%）、六十七歳（二・五三%）、六十八歳（二・五三%）、六十九歳（二・五三%）、七十歳（二・五三%）、七十一歳（二・五三%）、七十二歳（二・五三%）、七十三歳（二・五三%）、七十四歳（二・五三%）、七十五歳（二・五三%）、七十六歳（二・五三%）、七十七歳（二・五三%）、七十八歳（二・五三%）、七十九歳（二・五三%）、八十歳（二・五三%）、八十一歳（二・五三%）、八十二歳（二・五三%）、八十三歳（二・五三%）、八十四歳（二・五三%）、八十五歳（二・五三%）、八十六歳（二・五三%）、八十七歳（二・五三%）、八十八歳（二・五三%）、八十九歳（二・五三%）、九十歳（二・五三%）、九十一歳（二・五三%）、九十二歳（二・五三%）、九十三歳（二・五三%）、九十四歳（二・五三%）、九十五歳（二・五三%）、九十六歳（二・五三%）、九十七歳（二・五三%）、九十八歳（二・五三%）、九十九歳（二・五三%）、百歳（二・五三%）

(二・四%)の順序となり、「一歳未満が最多数を占め以後年齢の上昇に伴ひ人口減少し、一一歳を境とし年齢の増大に従ひ人口漸増し、二一歳を境として年齢の上昇するに従ひ人口は漸減の傾向を辿る。年齢別構成は所謂ピラミッド型をなし、一歳未満最も多く年齢と人口は反比例するの形態を示すが普通であるが、本市に於ては一五歳乃至二五歳の所謂働き盛りの人口部分異常に多数を示せるは地方青年の多くを吸収せる事實を裏書するものである。」東京市において年齢別の人口構成が普通のピラミッド型を破り青年階級者の特に多い傾向を示し出したのは既に大正年間よりであり、昭和五年の國勢調査以後は特にこの傾向が著るしい。而してこの型は大阪、京都、名古屋等の都市にも明瞭に現はれてゐる、と報告されてゐるのである。而して注目すべきは青年の特に大都市への集中であつて、既に、昭和五年の國勢調査の結果において、全國都市青年人口四百一十一萬五千三百十二人中、所謂六大都市の青年人口は二百一十一萬八千六十人であつて、都市青年人口の五一・五%を占めてゐるのである。かくの如く都市青年層の増大化は都市自體の人口の多きにもよるであらうが、主たる原因は、或は就職或は學業のために都市に集中する地方青年の多きに依るのである。今日のやうに都市と農村との生活が餘りにも懸け離れてゐる状態では、これは如何ともし難い現象であるが、早晚何とか是正されなければならぬ問題である。都市は確かに經濟的にも文化的にも、其他萬般に亘つて近代적であり、進

歩的である。これに反し農村は著るしい窮乏を示し、その生活は一般に因循、保守的である。自由な刺戟を欲する若き青年が、表面でも華美な、諸設備の整つた都市に憧憬れるのには青年らしい一面の眞理はある。併しながら都市には最早や殆んど救ひ難き汚濁があるに反し、農村には若し喪つたら、再び取り返されない美しい所がある。この問題は根本的には國全體の事であるが、都市農村兩方の青年の自覺によつては、局部的にでも問題は解決して行くのではあるまいか。

都市の弱點の一つは何かにつけ、不健康なことである。東京市における昭和十年度の死亡者年齢の五歳別を示せる統計によると、總死亡者一〇〇の中〇——四歳階級で三二・〇%を占め、次は二〇——二四歳階級の五・九三%、一五——一九歳階級の五・六三%、二五——二九歳階級の四・七五%の順で、一五歳乃至二四歳の青年階級の死亡者が他の階級に比して特に多い。而して一五——二四歳階級の青年にあつては、呼吸器の結核及びその他の結核が斷然多く、同病に依る死亡者が總數の三割乃至四割を占めてゐる有様である。要するに都市は青年にとつて誠に香しからぬ處である。かるが故にまた都市青年教育の重大性を思はざるを得ない。さりながら、この事は單に都市青年だけを切り離して考へずに、農村青年との關聯において考へられねばならぬであらう。

例へば、ドイツのヒットラー・ユーゲントでは農村學年ランドヤールなるものがあり、それに関する法律が發布

せられて、十四歳より十五歳までの學校を終へた少年が、身體、性格、精神を陶冶するためにこの農村學年に入學する義務を負はされてゐる。その重なる行事は規律訓練、團體訓練、耕作、體育、スポーツ、水泳、遊戲等であり、その目標とする所は廣義の國民社會主義的教養を與へるにある。特に重大を置かれる點はこの施設が農村生活と密接な關係を少年に持たせる點であつて、そのために農村學年では農民の人世觀や、農耕が重視される。また學課のうちでは郷土學、民俗學などが主な部分を占めてゐる。斯様な施設が我國の都市勤勞青年のためにも行はれることが望まじき事は云ふまでもない。

上來述べたる通り現代青年の生活條件並びに生活環境は、端的に云へば決して恵まれたものではない。併し來るべき彼岸を待望しつつ、その苦境と難關とを乗切るべきことは我々の本書全體を通じて強く主張せるところであつた。我々は常に最も高きものを目標として生きて行くことが肝要だ。大日本聯合青年團において毎年行つてゐる篤農青年大會或は商工精勵青年大會などには、かやうな理想的な青年がよく出席する。これらの青年は教育上、經濟上少からぬ不利な立場に置かれながら、常に努力と研究とを怠らず、自己の生活、職業に即して、堂々とその進路を開拓してゐるのである。

斯くして青年諸君は進歩の自覺を持つことが最も肝要である。實に、これこそ現状打開の第一歩である。生活に即する、具體的な現状打破の第一歩は實にこゝから出發しなければならぬ。

既に本書序説において述べたる通り、「私は毎日進歩して居る。私の本領は是だ」といふ、この自覺を以て日々の業務に従ひ、毎日の生活を營まれんことを切望する。今日は昨日より、明日は今日より、進歩してゐる。斯様な自覺を以て毎日を生き抜くとき、我々は誠に力強い、そして生甲斐のある生活を爲すことが出来るのである。

然しながら、斯の如き進歩の自覺には先づ何が進歩であるかといふ事の正しい認識を伴はねばならぬ。たとへば前進が進歩、單に行動が進歩であるわけではない。各人の進歩の自覺は常にその正しい認識の基準によつて批判され、發展せしめられる。駕籠、人力車、自轉車、汽車、汽船、電車、自働車、飛行機等々、主なる交通機關の名前を並べた場合、或は炬火から、蠟燭、行燈、ランプ、電燈等々、燈火の歴史を考へた場合、或は農村の手織機が都市の力織機に驅逐せられた場合、諸君はこの際、進歩の方向は、歴史的發展の法則はどうなのかを判然と考察して見よ。これはほんの一例であるが、すべて社會の歴史的發展は如何に些々たる生活の中にも、如何に小さな事業の中にも、力強く脈動してゐるのである。たとへばそれを判然と認識することが必要である。そして、それが將して社會全體のために國民の全體のためになつてゐるか否か、又左様なるべき萌芽を含んでゐるか否かを省察せよ。

諸君の毎日の行爲が、斯の如き省察において正しくあり、且つ毎日の行爲が段々高まつて行くと自

覺されたならば、それこそ眞實の進歩の自覺である。故に進歩の自覺あるためには、青年諸君は極めて明確、透徹せる歴史的認識の上に立ち、自己に與へられたる毎日の仕事の中にある進歩的な方向を注意深く省察しなければならぬ。それと共に諸君は毎日を一段一段と高めて行くための工夫と努力とを怠つてはならない。

以上の二つの要件が備はるとき、諸君は眞に、進歩の自覺者である。而してこれこそ眞に青年としての條件であり、適格である。若しこれ無くんば我々は如何に年齢は若からうとも、其人を青年と呼ぶことを差控へねばならぬ。先きに述べた年老ひしセザンヌの如き、寧ろ青年的氣魄に富むと稱すべくこの自覺なき青年は反而老年者と稱さるべきである。

更らに我々は常に健康でなければいけない。心身ともに、それから生活も亦健康でなければならぬ。青年諸君は進歩の自覺を以て、自ら鼓舞し、激勵し、少しでも自己の生活を健全化し、淨化しなければならぬ。

進歩の自覺とはまさに斯の如きものである。大工場の勞務青年も、中商工業従業員も、農村の青年も、將又學生も知識階級もこの自覺を以て毎日を生き抜かんことを切望して止まない。然して都市青年については既に關説したから、以下特に農村の青年諸君に對し、今少しく語りたい。

日本の資本主義社會の矛盾として、特に強く言はれてゐることは、都市が著しく發展的であるに對し、農村が著しく停滯的なことである。都市は極めて高度の科學、技術、藝術、文化を擁するに反し、農村は封建的傳統、非科學的陰影を帯びてゐる事實である。諸君は然し乍らこの事を以て致し方がないと云つて徒らに自棄すべきではない。問題は斯様な意味において極めて見窄らしき農村の實情を卒直に認識して、之を如何にして進歩向上せしめ得べきかを攻究する所に在る。そこに農村青年としての進歩の自覺が芽生える。徒らなる批評主義、退嬰主義は清算しなければならぬ。

私は農村の青年は或る意味で都市の青年よりも遙かに爲すべき仕事が多く、恵まれてゐるとさへ考へてゐる。諸君は少しく注意深い心を以てこれに臨むとき日本の農村に餘りにも多い非合理性を發見して驚く程であらう。農村の農耕の状態、施肥の模様を少しく省察してみるならば、如何に諸君が學校や書籍やで知つた知識に照して、その非科學的なところ多きかを、諸君の祖父や父たちのやつてゐることの如何に遅れてゐるかを、知ることが出来る。

青年諸君は農村において、都市の進歩せる科學、産業の媒體となつて、日本の農業生産力を發展せしむ可き重責の擔ひ手である。青年諸君はこの科學的進歩の擔當者として古き傳統を批判し、積極的に農村の爲に働かねばならぬ。進歩の自覺は先づこゝに生れる。更らに農村が都市に比して劣弱性の

ある反面、著しく卓越した徳性のあることを看過してはならない、私は勿論單なる農本主義を主張するものではない。私は寧ろ都市と農村との眞の意味の提携を欲する。都會が持つ科學、藝術、知識の偉大さは現在の農村に見出すことが出来ないことは云ふ迄もない。然し乍ら農村が保有する自然、健康的な性格、斯の如きは農村青年に恵まれた環境である。

諸君は自然から思ふ存分に學ばねばならぬ。これこそ諸君に與へられた大きな問題である。然し乍ら、自然はどこまでも自然であつて、之に學ぶことは方法を要する。そこで諸君が自然の中に、何を學ばねばならぬかを少しく語らう。私は諸君に科學の擔ひ手たることを要求した。之は科學的精神の要求であるが、實はこの事は人間文化の基本たる自然の理解に繋がる問題なのである。知識と云ひ、科學と云ひ、藝術と云ひ自然の理解をその根底に置かぬものはない。

扱て、東洋文化と西洋文化との差異は、自然の理解、自然解釋の差異にあると言はれてゐるが、之を單純に東洋人と西洋人とが自然に接する分量の多寡に其區別を求むることは出来ない。實は其の自然に對する接し方に問題がある。西洋人の接し方は自然を客體として處理する方法を意識した接し方であるに對し、東洋人、特に日本人の自然に對する態度は、自然物を自然物として處理することなく、一つにつながつて了ふ行き方であると云ふ。東洋人の自然の謳歌はこゝに根據があると言はれる。西

洋人の場合には抽象化の論理的力が發展し、科學が生れるに對して、東洋人の場合には詩が生れる。

この關係は農村の青年の場合にも都市の青年の場合にも共に妥當した古き東洋文化一般の傾向であつた。然し乍ら、新しき農村の青年には、自然の中に生活が開拓されて行かねばならぬだけ、自然に對する接し方は當然に科學的方法をも加へたものとならなければならぬことになる。諸君は自然の理解を眞に論理的に開拓して行かねばならぬ運命を擔つてゐる。自然をどこまでも論理的に科學的に凝視し、利用せよ。こゝにも進歩の自覺は生れる。

更らに自然は諸君に大切なものを教へる。單なる見せかけではなく、本體、實有の偉大さ、眞實さを教へる。即ち人類の見えざる基礎と結合とを。この眞實、實體の示す力に比すれば、見かけの人間社會の如何に見すばらしいことか。諸君は都會が生む單なる技巧の狡智がどれ程強く、諸君を誘惑しようとも、自然が示す眞實の力、最高の美を以て、うすつべらな、吹けば飛ぶ様な技巧美を壓服しなければならぬ。諸君は農村の保有する徳性を尊重し、自然に學び、科學を普及し、生活を改善し、生産力の發展を計り、國家の支柱となる氣魄に燃えなければならぬ。而して斯の如きは單なる個人的自覺を以てしてはその力に限度があり、それは團體的進歩の自覺にまで發展して、始めて眞に青年日本の黎明を招來し得るのである。